

県道小野富岡線関連遺跡発掘調査報告 1

日南郷遺跡（2次調査）

高津戸館跡

2023年

福島県教育委員会
公益財團法人福島県文化振興財団
福島県土木部

県道小野富岡線関連遺跡発掘調査報告 1

ひ　な　こう　遺　跡　(2次調査)
日　南　郷
たか　つ　ど
高　津　戸　館　跡

序 文

福島県では、東北地方太平洋沖地震と原子力災害により被災した地域の復興を支えるふくしま復興再生道路の一部として、田村郡小野町と双葉郡富岡町とを結ぶ主要地方道小野富岡線の整備を進めています。これに伴い、福島県教育委員会では、同事業計画地内について埋蔵文化財の保存のための協議を行い、現状での保存が困難なものについては、記録保存のための発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、令和3年度に発掘調査を実施した、双葉郡富岡町大字上手岡地内に所在する日南郷遺跡及び高津戸館跡についての調査成果をまとめたものです。発掘調査の結果、日南郷遺跡では古墳時代の集落跡が、高津戸館跡では中世の堀と土塁が確認されました。当地は交通の要衝であり、いにしえよりこの土地の利をいかし、連綿と生活をつなげてきた郷土の先人たちの、これまでの歩みが偲ばれます。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解を促進するものです。本報告書が、文化財に対する県民の皆様の理解を深めるとともに、郷土の歴史を解明するための一助となれば幸いです。

結びに、発掘調査の実施に当たって御理解と御協力を頂いた福島県土木部相双建設事務所、富岡町教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団を始めとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和5年3月

福島県教育委員会

教育長 大沼博文

あいさつ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託を受けて、県内の大规模開発に伴う埋蔵文化財の調査を実施しています。特に、震災以降は浜通り地方において復興関連の調査を多く行ってきました。

本報告書は、令和3年度に実施した主要地方道小野富岡線（高津戸工区）整備事業遺跡発掘調査における日南郷遺跡及び高津戸館跡の調査成果をまとめたものです。富岡町に所在する高津戸工区は、福島県が策定した「ふくしま復興再生道路」29工区の一つで、避難解除区域等の復興加速化に向けて、現在、道路整備工事が進められています。

日南郷遺跡では、古墳時代中期後半～後期前葉の集落跡を発見・確認しました。5軒の堅穴住居跡を検出ましたが、各住居跡の特徴から、日南郷遺跡の古墳時代の人々は、新地開発を目的としてこの地に入植してきた可能性があります。

高津戸館跡では、中世末期頃と考えられる土壘・堀の調査を行いました。高津戸地区を含む一帯は、相馬氏領と岩城氏領の境界付近であり、そのような緊張関係が背景となって土壘・堀が築かれたものと考えられます。

本報告書を、郷土の歴史研究の基礎資料として、さらにはふるさとの文化を理解するための資料として、生涯学習の場などで広く活用していただければ幸いです。

終わりに、今回の発掘調査に御協力いただきました関係諸機関並びに地域住民の皆様に厚くお礼申し上げます。また、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます

令和5年3月

公益財団法人 福島県文化振興財団

理事長 鈴木淳一

緒 言

- 1 本書は、令和3年度に実施した主要地方道小野富岡線(高津戸工区)整備事業関連遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書には、以下に記す遺跡の調査成果を収録した。

日南郷遺跡	福島県双葉郡富岡町大字上手岡字日南郷、後田	遺跡番号：0754300054
高津戸館跡	福島県双葉郡富岡町大字上手岡字高津戸	遺跡番号：0754300003
- 3 本事業は、福島県教育委員会が福島県土木部と協定を締結し、調査に係る費用は福島県土木部が負担した。
- 4 福島県教育委員会は、発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施した。
- 5 公益財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部の下記の職員を配置した。

【令和3年度】
副 主 幹 香川 憲一 専門文化財主査 佐藤 啓
文化財主査 笠原 興※
※公益財団法人北海道埋蔵文化財センターより出向

【令和4年度】（報告書作成）
副 主 幹 香川 憲一
- 6 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。
- 7 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図、並びに富岡町作成の都市計画図を複製したものである。
- 8 本書に掲載した自然科学分析は、次の機関が行い、その結果を掲載している。

日南郷遺跡出土炭化物分析	株式会社吉田生物研究所
日南郷遺跡出土土師器・石製品蛍光X線分析	福島県文化財センター白河館
- 9 引用・参考文献は執筆者の敬称を略し、各編ごとに掲載した。
- 10 本書に収録した調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 11 発掘調査及び報告書の作成に際して、次の機関及び個人から協力・助言をいただいた。

富岡町教育委員会	渡邊泰伸
----------	------

用 例

1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 表記がない遺構図は、すべて図の真上を座標北とした。
- (2) 縮 尺 各挿図中にスケールとともに縮尺率を示した。
- (3) 標 高 断面図及び地形図における標高は、海拔標高を示す。
- (4) 座 標 平面図における座標は、平面直角座標X系の数値を示している。
- (5) 土 層 基本土層はアルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積土はアルファベット小文字lと算用数字を組み合わせて表記した。
- (6) ケ バ 遺構内の傾斜部は「ミ」、相対的に緩傾斜の部分には「リ」、後世の搅乱部や人為的な削土部は「フ」の記号で表現した。
- (7) 網 点 等 網点等は各挿図中に用例を示した。石断面は斜線で表した。
- (8) 計 測 値 堪穴住居跡内の()内の数値は、床面で検出した穴の底面までの深さを示す。
- (9) 遺 構 番 号 当該遺構は正式名称、その他の遺構は略記号で記載した。
- (10) 土 色 土層注記に使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修『新版標準土色帖』に基づいている。

2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 縮 尺 各挿図中にスケールとともに縮尺率を示した。
- (2) 番 号 遺物は挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば図1の1番の遺物を「図1-1」とし、写真図版中では「1-1」と示した。
- (3) 断 面 鉄製品の断面は黒塗りとした。粘土積上痕は一点鎖線で表記した。
- (4) 網 点 等 網点等は各挿図中に用例を示した。
- (5) 計 測 値 各挿図中に示した。()内の数値は推定値、〔 〕内の数値は遺存値を示す。

3 本文中及び遺物整理に使用した略記号は、以下のとおりである。

富岡町…TO 日南郷遺跡（2次調査）…HNG2 高津戸館跡…TKD
堪穴住居跡…SI 溝 跡…SD 土 坑…SK 小 穴…P
グリッド…G 遺構外堆積土…L 遺構内堆積土…l 石…S

目 次

序 章

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡周辺の環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	4

第1編 日 南 郷 遺 跡 (2次調査)

第1章 調査概要

第1節 遺跡の位置と地形	9
第2節 調査経過	10
第3節 調査方法	11

第2章 調査成果

第1節 遺構の分布	13
第2節 基本土層	13
第3節 堅穴住居跡	15
1号住居跡(15) 2号住居跡(22) 3号住居跡(27) 4号住居跡(33) 5号住居跡(34)	
第4節 溝跡	40
1号溝跡(40) 2号溝跡(40)	
第5節 その他の遺構・遺物	42
1号土坑(42) 小穴(43) 弥生土器(44)	

第3章 総括

第1節 遺構について	45
第2節 遺物について	47
第3節 まとめ	48

第2編 高津戸館跡

第1章 調査概要

第1節 遺跡の位置と地形	51
第2節 調査経過	52
第3節 調査方法	53

第2章 調査成果

第1節 遺構の分布	55
第2節 基本土層	55
第3節 土壘・堀	58
1号土壘(58) 2号土壘(61) 堀(61)	
第4節 その他の遺構	63
3号土壘(63) 1号溝跡(64)	

第3章 総括

第1節 土壘と堀の歴史的性格	65
----------------	----

付編 自然科学分析

付編1 日南郷遺跡出土炭化物分析	71
付編2 日南郷遺跡出土土師器・石製品蛍光X線分析	75

挿図・表目次

序章

[挿図]

図1 高津戸工区位置図	1	図3 遺跡周辺の地形	3
図2 工事計画と遺跡	2	図4 周辺の遺跡	5
〔表〕			
表1 周辺の遺跡一覧	6		

第1編 日南郷遺跡(2次調査)

[挿図]

図1 調査箇所	9	図11 2号住居跡出土遺物(1)	26
図2 グリッド配置	12	図12 2号住居跡出土遺物(2)	27
図3 遺構配置	14	図13 3号住居跡(1)	28
図4 基本土層	15	図14 3号住居跡(2)	29
図5 1号住居跡(1)	16	図15 3号住居跡(3)	30
図6 1号住居跡(2)	17	図16 3号住居跡出土遺物	32
図7 1号住居跡出土遺物(1)	20	図17 4号住居跡	34
図8 1号住居跡出土遺物(2)	21	図18 4号住居跡出土遺物	34
図9 2号住居跡(1)	23	図19 5号住居跡(1)	35
図10 2号住居跡(2)	24	図20 5号住居跡(2)	37

図21	5号住居跡出土遺物(1).....	38	図25	小穴.....	43
図22	5号住居跡出土遺物(2).....	39	図26	弥生土器.....	44
図23	1号・2号溝跡.....	41	図27	馬蹄形状施設をもつ竪穴住居跡.....	46
図24	1号土坑.....	42	図28	日南郷遺跡出土土師器.....	47
[表]					
表1	小穴一覧.....	43	表2	竪穴住居跡一覧.....	45

第2編 高津戸館跡

[挿図]

図1	調査箇所.....	51	図7	2号土壙・堀断面.....	62
図2	グリッド配置.....	54	図8	3号土壙・1号溝跡.....	64
図3	遺構配置.....	56	図9	高津戸館跡構張図集成.....	65
図4	基本土層.....	57	図10	豊城国稻葉郡上手岡村十一番 字高津戸地籍図.....	68
図5	1～3号土壙、堀、1号溝跡.....	59			
図6	1号・2号土壙断面.....	60			

付編 自然科学分析

[挿図]

図1	顕微鏡写真(1).....	72	図4	蛍光X線分析チャート(1).....	77
図2	顕微鏡写真(2).....	73	図5	蛍光X線分析チャート(2).....	78
図3	顕微鏡写真(3).....	74	図6	石製品変色部写真.....	78

[表]

表1	出土炭化物同定表.....	71	表2	分析試料一覧.....	75
----	---------------	----	----	-------------	----

写真目次

第1編 日南郷遺跡(2次調査)

1	日南郷遺跡と周辺の地形(東から).....	81	11	2号住居跡カマド土器出土状況(南から).....	84
2	1期調査区1～5号住居跡(南から).....	81	12	2号住居跡カマド燃焼部(南から).....	84
3	基本土層・J15G北壁(南から).....	82	13	3号住居跡全景(南から).....	85
4	1号住居跡検出作業(南西から).....	82	14	3号住居跡細部.....	85
5	1号住居跡全景(西から).....	83	15	4号住居跡全景(南東から).....	86
6	1号住居跡南北断面(西から).....	83	16	4号住居跡断面(南東から).....	86
7	1号住居跡カマド燃焼部(南から).....	83	17	5号住居跡全景(南から).....	87
8	1号住居跡P4断面(南から).....	83	18	5号住居跡南北断面(東から).....	87
9	2号住居跡全景(南から).....	84	19	5号住居跡炭化物出土状況(南から).....	87
10	2号住居跡東西断面(南から).....	84	20	5号住居跡P5断面(南から).....	87

21	1号溝跡全景〔Ⅱ期調査区〕(東から).....	88	28	1号住居跡出土遺物(2).....	90
22	2号溝跡全景(南東から).....	88	29	2号住居跡出土遺物.....	91
23	1号溝跡断面(東から).....	88	30	2~4号住居跡出土遺物.....	92
24	2号溝跡断面(南から).....	88	31	5号住居跡出土遺物.....	93
25	1号土坑全景(南から).....	88	32	5号住居跡出土土師器甕.....	94
26	1号土坑断面(南から).....	88	33	3号・5号住居跡出土石製品.....	94
27	1号住居跡出土遺物(1).....	89	34	弥生土器.....	94

第2編 高津戸館跡

1	高津戸館跡と周辺の地形(南西から).....	97	9	1号土壙南東部断面(北から).....	101
2	調査区全景(南東から).....	97	10	1号土壙北西部断面(南東から).....	101
3	調査区全景(南西から).....	98	11	2号土壙全景(北から).....	102
4	調査区西半部(北東から).....	98	12	2号土壙南東部断面(北から).....	102
5	調査区中央部遺構検出作業(南西から).....	99	13	堀全景(南東から).....	103
6	基本土層.....	99	14	堀南東部(北西から).....	103
7	1号土壙南東部(北から).....	100	15	堀断面(北西から).....	104
8	1号土壙全景(北西から).....	100	16	3号土壙・1号溝跡全景(北から).....	104

序 章

第1節 調査に至る経緯

主要地方道小野富岡線（福島県道36号）は、磐越自動車道「小野IC」付近を起点として阿武隈高地を東に横断し、太平洋沿岸部の双葉郡富岡町に至る総延長約51kmの路線で、福島県が策定した「ふくしま復興再生道路（8路線、29工区）」の一つに位置づけられている。

ふくしま復興再生道路は、原子力災害からの復興に向けて戦略的に道路整備を進め、避難解除区域等の復興加速化と、住民の帰還促進及び帰還後の生活再建を支援していくものである。主要地方道小野富岡線整備事業では6工区が計画され、小白井工区・吉間田工区（いわき市）及び五枚沢1工区（川内村）の3工区については、すでに供用が開始されている。残る高津戸工区（富岡町）、五枚沢2工区（富岡町・川内村）及び西ノ内工区（川内村）の3工区については、第2期復興・創生期間内（～令和7年度）の完了を目指して整備工事が進められている。

福島県教育委員会は、高津戸工区の整備計画を受けて平成29年度に分布調査、平成30年度及び令和元年度に試掘・確認調査を実施している（2020・2021『東日本大震災復興関連遺跡調査報告6・7』）。分布調査では、高津戸工区に所在する周知の埋蔵文化財蔵地「日南郷遺跡」「高津戸館跡」の現状確認等を行うとともに、高津戸館跡の縄張り図が作成された。試掘・確認調査では、高津戸工区と重複する日南郷遺跡2,100m²・高津戸館跡1,300m²の範囲について保存が必要であることが確認され、保存協議により記録保存のための発掘調査が行われることになった。福島県教育委員会は、日南郷遺跡・高津戸館跡の発掘調査を、公益財団法人福島県文化振興財團に委託して実施することとした。

公益財団法人福島県文化振興財團は、令和3年4月1日付け福島県教育委員会との委託契約に基づき、遺跡調査部の職員3名を配置して、日南郷遺跡・高津戸館跡の発掘調査を実施した。

なお、日南郷遺跡の発掘調査は、平成12年度に常磐自動車道建設関連の事業で1次調査（福島県教育委員会2002

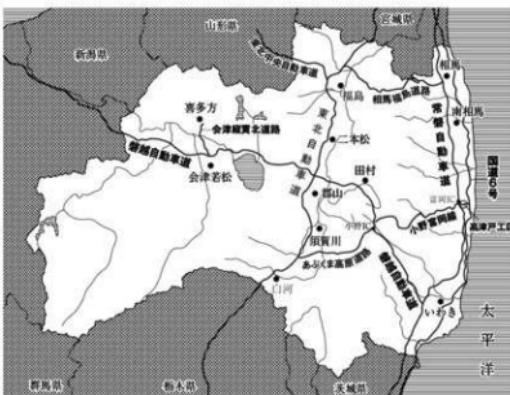


図1 高津戸工区位置図

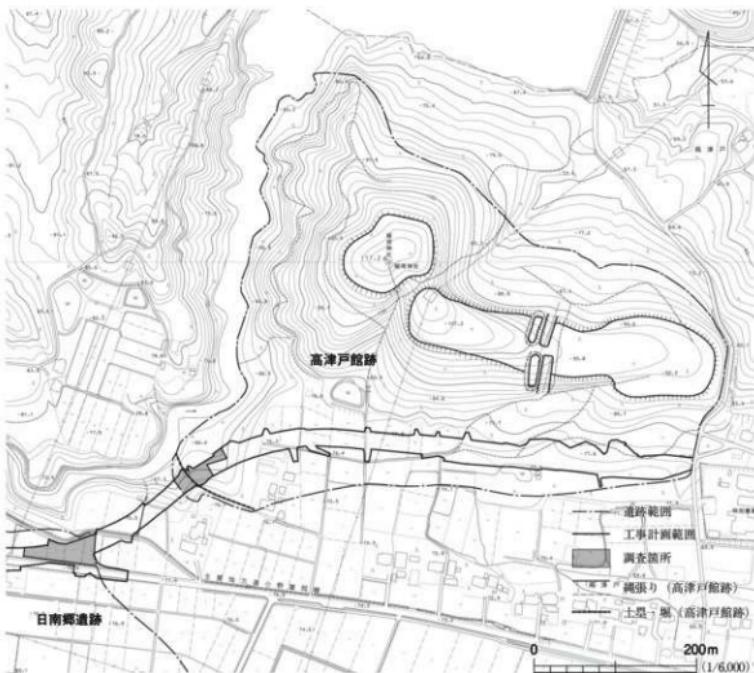


図2 工事計画と遺跡

33])が行われており、今回が2次調査となる。

(香川)

第2節 遺跡周辺の環境

1. 地理的環境(図3)

日南郷遺跡・高津戸館跡が所在する富岡町は、福島県の太平洋沿岸地域を指す浜通り地方の中央部(双葉郡)に位置する。富岡町の北は大熊町と、西は川内村と、南は楢葉町と接している。富岡町沿岸部の気候は、気温の年較差が小さい海洋性であり、福島県中部・西部の中通り地方・会津地方と比較すると、夏は涼しく、冬は雪が少ない。

富岡町が属する浜通り地方の地形の大きな特徴は、西半の阿武隈高地と東半の低地帯に明瞭に分けられるという西高東低の地勢にある。阿武隈高地は、福島県東部を南北に縦貫する隆起準平原性の山稜で、東西の分水界及び中通り地方との境界である。

一方、東の低地帯は、概ね東流する各主要河川の作用によって河岸段丘地形等が発達しており、

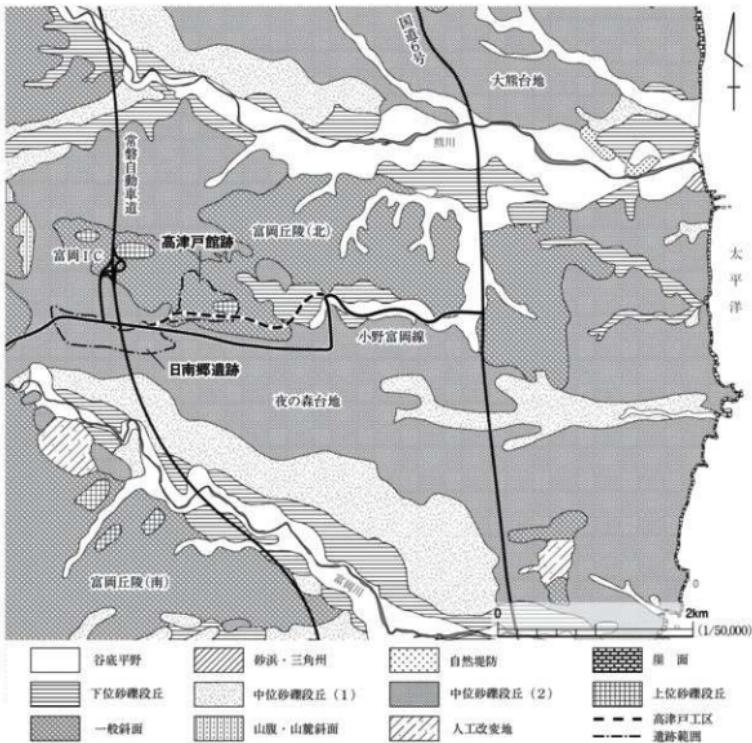


図3 遺跡周辺の地形

太平洋に向かって流れる河川に沿って丘陵(上位段丘等)、台地(中位段丘等)、低地(下位段丘・谷底平野等)が形成されている。

富岡町の主要河川は、二級河川の富岡川に代表される。富岡川は、田村市都路町と双葉郡川内村の境界に聳える大鷲鳥谷山を水源とし、阿武隈高地を概ね東方向に貫流する。阿武隈高地を抜けると上手岡地区中央の麓山付近で流路を南東方向に変え、富岡町の中心街に向かって流れしていく。

富岡川流域における丘陵は、麓山付近を起点として東と南東方向に分岐する「富岡丘陵」が知られる。富岡丘陵は、定高性の支脈丘陵である。その分岐丘陵の間に扇状の「夜の森台地」が形成されている。富岡町では、夜の森台地が平坦地形の大部分を占めており、下位段丘・谷底平野の発達は比較的狭小である。

日南郷遺跡の立地は、夜の森台地に位置づけられる。高津戸館跡の立地は北側の富岡丘陵で、その丘陵頂部に上位段丘面が部分的に残存している。

(香川)

2. 歴史的環境(図4)

富岡町では令和4年3月現在、73か所の遺跡が登録されている。時代的には旧石器時代から近代にわたり、種別としては集落跡・官衙関連遺跡・生産遺跡・古墳・横穴墓・城館跡のほか古戦場など多様である。図4は周辺の遺跡分布とともに、本報告に関連する古墳時代と中世の遺跡を抽出した図である。以下周辺地域も含めた富岡町の歴史的環境について、調査例のある遺跡を中心に概観する。

町内における旧石器時代の遺跡は少なく、日南郷遺跡・後作A遺跡や本町西A遺跡・本町遺跡で石器が出土したのみである。石器ブロック等は発見されておらず、出土量も少ない。類似する状況は大熊町や双葉町でも指摘できる。一方、楢葉町大谷上ノ原遺跡では、層位差をもつ石器群が確認されている。

縄文時代になると遺跡数は増加し、河川沿いの中位段丘や下位段丘を中心に立地する。町内では常磐自動車道の建設に伴う調査例が多い。上述した本町西A遺跡では前期後半の東北系の土器に関東系の土器が混在していた。前山A遺跡では複式炉出現段階の住居跡が発見されている。また、後作A遺跡や本町西B遺跡では晩期の土器埋設遺構が検出され、墓坑と推定されている。大熊町では早期の大平遺跡・砂出遺跡、後晩期の道平遺跡が著名で、楢葉町では馬場前遺跡や鍛冶屋遺跡で発掘調査が行われている。

弥生時代の遺跡からは、遺物は出土するものの、遺構の検出例は少ない。そのような状況の中、毛萱館跡では12軒の竪穴住居跡が検出され、同一丘陵上に立地する毛萱遺跡からも住居跡が検出されている。今回の調査で、日南郷遺跡から少量の弥生土器が出土した。町外では楢葉町美シ森B遺跡・南台遺跡・植松遺跡で竪穴住居跡が検出され、楢葉町天神原遺跡・井出上ノ原遺跡から中期末葉の土器植墓が検出されている。大熊町落合B遺跡では中期の土器とともに石包丁が出土し、双葉町では郡山地区を中心に遺物散布地が集中する。当地域では、中期の遺跡に比べて前期・後期の遺跡数が少ない点や、継続的な居住の痕跡が少ない点が特徴といえる。

古墳時代の遺跡は、河川河口近くの丘陵に立地する例が多い。丘陵頂部に小浜古墳群(36)・王塚古墳(34)・大熊町熊川古墳(20)・双葉町小豆追古墳(4)など、斜面部に小浜横穴墓群(37)・清水尻横穴墓群(40)・仏浜横穴墓群(41)・大作横穴墓群(43)・大熊町六丁目横穴墓群(17)・大熊町長者原横穴墓(6)などが立地する。一方、集落跡の調査例は少なく、毛萱遺跡や上郡B遺跡で前期の住居跡が検出されている。今回、日南郷遺跡から中期後半～後期前葉の集落跡が確認され、町内においては貴重な調査例となった。

奈良・平安時代の遺跡は多い。小浜地区の小浜代遺跡からは、基壇をもつ建物跡が検出され、單弁六葉蓮華文軒丸瓦や奈良三彩などが出土することから、楢葉郡衙関連遺跡に推定されている。また、上本町B遺跡・上本町D遺跡・本町西C遺跡から住居跡・後作B遺跡から製鉄炉・上本町D遺跡から廐葬場・上郡B遺跡から製炭に関する遺構がそれぞれ検出されている。

中世の当町は楢葉郡に属し国人領主楢葉氏の支配下にあったが、文明6(1474)年の楢葉氏滅亡後

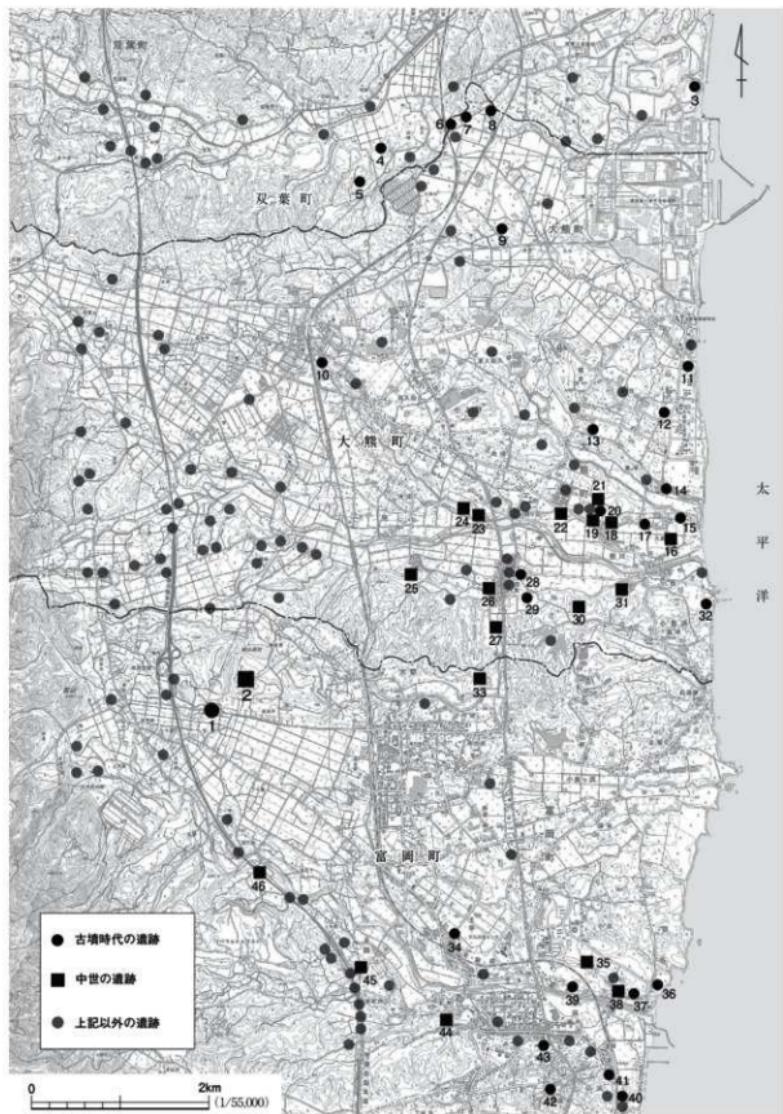


図4 周辺の遺跡

は相馬領と岩城領の境目として戦乱に巻き込まれ、戦国期末期に確定した境界が現在の富岡町と大熊町の境界として引き継がれている。該期の遺跡は城館跡が多く、このうち真壁城跡・毛蓋館跡・日向館跡で発掘調査が実施されている。分布的には大熊町を含む町北部の館跡群(2・18・19・21・24～27・33)と真壁城跡・毛蓋館跡を含む町南部の館跡群(35・38・44・45)に分けられ、当時の高い緊張関係を示していると推測される。このほか上本町A遺跡では掘立柱建物跡を中心とする集落とともに常滑焼大甕が、上本町F遺跡からはかわらけが一括で出土している。

近世初頭の当地域は平藩の支配を受けるが、延享4(1747)年以降は小浜代官、次いで棚倉藩・多古藩・仙台藩の支配を受け明治維新を迎えることとなる。この時期の遺跡として、幕末から近代にかけて創設した上手岡鉄山鉱炉跡があり、このうち滝川製鉄遺跡で発掘調査が実施されている。このほか江戸時代の街道に設けられた新田町一里塚・清水一里塚や、戊辰戦争時の遺構である新夜ノ森古戦場跡がある。

明治以降当地域は、平県、磐前県を経て明治9(1876)年福島県に編入された。明治22(1889)年には近隣の6か村が合併して富岡村が成立し、明治33(1900)年に富岡町となった。昭和30(1955)年には上岡村と合併して現在の富岡町に至っている。

平成23(2011)年3月11日に東日本大震災が発生し、大津波により当町の沿岸部も壊滅的な被害を被った。この時発生した東京電力福島第一原子力発電所の原発事故により、町の全域が避難指示区域に設定され全町民が避難、役場機能は郡山市に移転した。平成29(2017)年4月に町の大部分で避難指示区域が解除されたものの、一部の地域は依然として帰還困難区域のまま立ち入りが制限されており、現在、全面解除に向けた復旧・復興作業が進められている。
(佐藤)

表1 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	種別	時期	No.	遺跡名	所在地	種別	時期
1	日南郷遺跡	富岡町大字下手岡字日南郷地	集落跡	绳文～古墳	25	鶴見跡	大熊町大字鶴見字鶴見	城郭跡	中世
2	高津戸難跡	富岡町大字下手岡字高津戸	城館跡	中世	26	内城遺跡	大熊町大字鶴見字難町	散布地	绳文・平安
3	森之内跡	双葉町大字細谷森之内	集落跡	绳文～平安	27	大沢遺跡	大熊町大字鶴見字大沢	散布地	中世
4	豆小豆古墳	双葉町大字山田字豆小豆	古墳	古墳	28	大塚平古墳	大熊町大字鶴見字大塚	古墳	古墳
5	柳木平古墳	双葉町大字山田字柳木平	古墳	古墳	29	藪平古墳	大熊町大字鶴見字藪平	古墳	古墳
6	長者原横穴墓	大熊町大字夫沢字長者原	古墳	古墳	30	蒲原遺跡	大熊町大字小良浜字高平	城郭跡	中世
7	熊ノ澤古墳	大熊町大字夫沢字長者原	古墳	古墳	31	東引林道跡	大熊町大字小良浜字高平	散布地	绳文
8	窓ノ神古墳	大熊町大字夫沢字長者原	古墳	古墳	32	池原沢古墳	大熊町大字良浜字高平	古墳	古墳
9	櫛船子古墳	大熊町大字丸子字櫛船子	古墳	古墳	33	大音船跡	富岡町大字大音船字田川	城郭跡	中世
10	櫛船子八道跡	大熊町大字八道字櫛船子	散布地	绳文	34	王塚古墳	富岡町大字大良浜字王塚	古墳	古墳
11	和尚前遺跡	大熊町大字片岡字和尚前	散布地	绳文・古墳	35	北郡船跡	富岡町大字小浜	城郭跡	中世
12	南原遺跡	大熊町大字夫東町	散布地	弥生・古墳	36	小浜古墳群	富岡町大字小浜	古墳	古墳
13	梨木平道跡	大熊町大字小人野字東平	散布地	绳文・古墳	37	小浜横穴墓群	富岡町大字小浜	古墳	古墳
14	北原横穴墓群	大熊町大字小人野字東平	古墳	古墳	38	小浜船跡	富岡町大字小浜	城郭跡	中世
15	女追遺跡	大熊町大字堀川字久麻田	散布地	弥生～中世	39	小浜道路	富岡町大字小浜	集落跡	古墳
16	鷹川六丁目条里道路	大熊町大字鷹川字久麻田	散布地	奈良～中世	40	酒水尻横穴墓群	富岡町大字酒水尻字並田	古墳	古墳
17	六丁目横穴墓群	大熊町大字鷹川字久麻田	古墳	古墳	41	弘法穴横穴墓群	富岡町大字弘法	古墳	古墳
18	熊川船跡	大熊町大字鷹川字古船	城郭跡	中世	42	西原人遺跡	富岡町大字西原字西原	散布地	古墳
19	熊船跡	大熊町大字鷹川字古船	城郭跡	中世	43	大作横穴墓群	富岡町大字小浜字中央	古墳	古墳
20	熊川古墳	大熊町大字鷹川字古船	古墳	古墳	44	印門跡	富岡町大字印門字本町	城郭跡	中世
21	古船跡	大熊町大字鷹川字古船	城郭跡	中世	45	諸沢跡	富岡町大字本岡字上本町	城郭跡	中世
22	旧裏照寺跡	大熊町大字鷹川字古船	寺社跡	中世～近世	46	上本町F遺跡	富岡町大字印門字上本町	集落跡	中世
23	佐山船跡	大熊町大字鷹川字新野	散布地	绳文					
24	佐山船跡	大熊町大字鷹川字新野	城郭跡	中世					

第1編 日南郷遺跡(2次調査)

遺跡記号 TO-HNG 2

所在地 福島県双葉郡富岡町大字上手岡字後田

時代・種類 古墳・集落跡

調査期間 令和3年5月10日～8月3日

調査面積 2,100m²

調査員 香川慎一・佐藤 啓・笠原 興

第1章 調査概要

第1節 遺跡の位置と地形

日南郷遺跡は、双葉郡富岡町大字上手岡字日南郷、後田地内に所在する。JR常磐線夜ノ森駅を起点とすると、その西方約2kmの地点に位置する。日南郷遺跡の範囲・面積は東西長1.3km×南北長0.5km・315,000m²で、東西に長い遺跡である。日南郷遺跡のほぼ中央を常磐自動車道が縦貫しており、遺跡の北約500mの地点に常磐富岡ICがある。また、日南郷遺跡の北辺を東西に主要地方道小野富岡線（以下「小野富岡線」とする。）が横断し、遺跡西端で通称山麓線と呼ばれる主要地方道いわき浪江線と交差している。日南郷遺跡の西側には、福島県指定重要無形民俗文化財「上手岡麓山神社の火祭り」の神事で有名な標高約231mの麓山が聳えている。



図1 調査箇所

第1編 日南郷遺跡(2次調査)

日南郷遺跡一帯の地形区は、夜の森台地に属している。夜の森台地は、富岡川によって形成された扇状地性の河成段丘である。日南郷遺跡の立地は富岡川左岸の中位砂礫段丘面で、東に向かって標高を減していく。日南郷遺跡の標高は、西端部が約100m、東端部が約70mである。今回、調査を実施した2次調査区(2,100 m²)の位置は、日南郷遺跡の北東部(後田地内)にあたり、その標高は約77~78mである。2次調査区は家老沢と呼ばれる小谷の屈曲部と接しており、2次調査区の北辺は弓なりになっている。2次調査区の調査前の状況は、農地整備が行われた田である。調査区東部は、農地整備等による削平が比較的深くまで及んでいた。

なお、2次調査区の西約320mの地点には、常磐自動車道関連事業で平成12年度に発掘調査が行われた1次調査区がある。

(香川)

第2節 調査経過

日南郷遺跡は、平成6年度の常磐自動車道関連分布調査(福島県教育委員会1995『福島県内遺跡分布調査報告1』)により発見された。当初、縄文時代・近世の散布地として福島県埋蔵文化財包蔵地台帳に登録された遺跡であるが、令和元年度に実施された小野富岡線関連の試掘・確認調査の結果、新たに古墳時代の集落跡が確認され同台帳の変更増補が行われた。また、小野富岡線関連の工事計画範囲と重複する2,100 m²の範囲について保存が必要とされた。

この2,100 m²に係る保存協議の結果、記録保存の措置が決定され、令和3年度に公益財團法人福島県文化振興財团が発掘調査を実施することとなった。なお、平成12年度の日南郷遺跡の1次調査についても同文化振興財团(旧財團法人福島県文化振興事業団)が実施している。

今回の2次調査は、用地の取得状況から調査を2回に分けて実施することとなった。また、調査で生じた排土の処理方法も各回で異なり、調査1回目で生じた排土についてはダンプ車による場外搬出と決まった。しかし、調査2回目の排土については、工程上、場外搬出が難しい状況となるため、引渡しが終了した調査1回目の西部に仮置きすることが決まった。

令和3年4月1日付け時点での指示面積は、2,100 m²のうちの1,700 m²である。便宜上、調査1回目の1,700 m²の箇所をI期調査区、調査2回目の400 m²の箇所をII期調査区とした。なお、II期調査区の追加指示は、5月14日付けで通知された。

I期・II期調査区の各調査経過は、以下のとおりである。

1. I期調査区の調査経過

5月10日に遺跡調査部職員3名が現地入りし、福島県教育委員会の立会いの下、I期調査区の繩張りを行った。5月11日、表土等掘削・土砂運搬作業用の敷設板を搬入・配置した。同日、I期調査区の周囲にガードフェンスなどの安全柵を設置した。休憩所、仮設トイレ等の各設備を、5月10~14日の期間で設置した。

5月12日、重機・ダンプ車による表土等掘削・土砂運搬作業を開始した。この作業は、6月9

日に終了した。5月24日から作業員による遺構検出・掘削・土砂運搬作業を開始した。同日、1号・2号住居跡、1号・2号溝跡を確認した。5月26日、測距測角儀を使用して基準杭打設を行った。6月1日に3号・4号住居跡、6月10日に5号住居跡を確認した。

調査は比較的順調に進捗し、6月22日までに検出遺構のすべてを完掘した。6月25日、ドローンによるⅠ期調査区の空中写真撮影を行った。6月30日、Ⅰ期調査区の地形測量が終了した。また、同日から遺構断割り等の最終的な調査に入った。7月9日、Ⅰ期調査区の調査が終了した。

なお、Ⅰ期調査区の工事側への引渡しが7月13日に行われた。引渡し終了後、Ⅱ期調査区の東端部に集積していた堆土を、Ⅰ期調査区西部の一画に移動した。

2. Ⅱ期調査区の調査経過

7月5日からⅡ期調査区の調査を開始し、重機による表土等掘削・土砂運搬作業に着手した。7月13日から作業員による遺構検出・掘削・土砂運搬作業を開始した。Ⅱ期調査区で確認できた遺構は、Ⅰ期調査区から連続する1号溝跡の1条である。7月26日、堆土置場の残土を重機で念入りに転圧・整形し、表土等掘削・土砂搬出作業が終了した。

7月28日に1号溝跡の平面図作成、翌29日にⅡ期調査区の地形測量図を作成した。8月2日にドローンによる空中写真撮影を行い、撮影終了後、遺構断割り等の最終的な調査に入った。8月3日、Ⅱ期調査区の調査が終了した。

なお、Ⅱ期調査区の工事側への引渡しが8月17日に行われた。

第3節 調査方法

表土等掘削作業は、効率化を図るためバックホーで行った。表土等掘削土の運搬作業は、Ⅰ期調査区については掘削土をダンプ車に積載し、指定された堆土置場（旧館山荘）まで移送した。堆土置場では小型のバックホーを待機させ、運ばれてきた掘削土の整形・転圧を行った。Ⅱ期調査区の掘削土は、引渡し後のⅠ期調査区の西部までバックホーで移動し、台状整形・転圧を行った。

遺構検出・掘削作業は、原則人力で行った。竪穴住居跡の掘削は4分割法、土坑は2分割法で行い、遺構内堆積土の観察・記録を行った。竪穴住居跡の主柱穴調査において、検出状態が不明瞭であったものについては、先に断割り断面による観察を行った。また、竪穴住居跡の完掘後、竪穴壁、床面、カマド等の各施設については、断割りによる最終確認を行った。Ⅰ期調査区の遺構掘削作業で生じた堆土は、小型ダンプ車で旧館山荘の堆土置場まで移送した。Ⅱ期調査区の堆土については、人力でⅠ期調査区西部の堆土置場に搬出した。

日南郷遺跡及び高津戸館跡の各調査区、遺構等の位置を正確に示すため、平面直角座標系X=152,800、Y=100,700を基点とする10m四方のグリッドで網羅した。各グリッドの名称は、基点から東方向へA～fのアルファベットを、また南方向へ1からの算用数字を付け、その組み合わせによってA 1～f 1のように表記した。調査区内に各グリッドの位置を明示するため、測距測角儀

第1編 日南郷遺跡(2次調査)

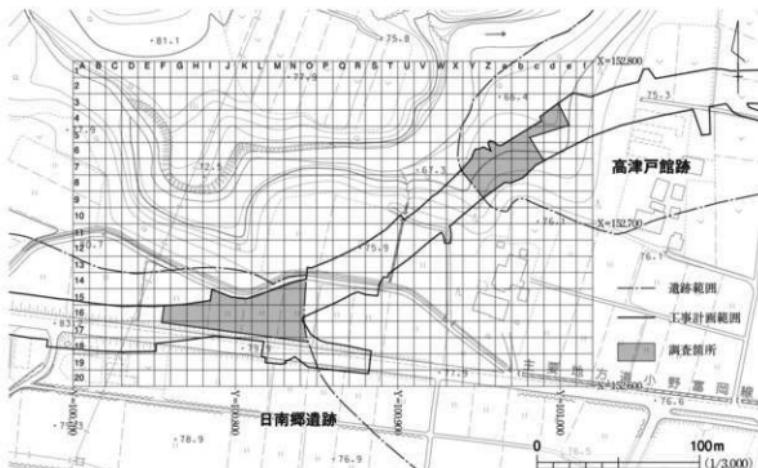


図2 グリッド配置

を使用して、測量基準点を兼ねた木杭を打設した。また、調査区内に標高を示すベンチマークを設置し、水準測量用の基準点とした。

基本土層の表記は、大文字Lとローマ数字の組み合わせを基本とし、さらに細分した土層については、アルファベットの小文字を付加してL II a・L II b…のように表した。遺構内堆積土については、小文字ℓと算用数字でℓ 1・ℓ 2…のように表記した。

遺構番号は、発見順で1号住居跡・2号住居跡…のように通し番号を付し、また、便宜上、用例に示した略記号と算用数字を組み合わせてS I 01・S I 02…のようにも表記した。

遺構実測は、平面・断面のセットを原則とした。遺構実測図の縮尺は、遺構の規模、細部状況等に合わせて1/10・1/20・1/40とした。遺構平面の実測は、グリッドの木杭を測量基準点とし、簡易造り方測量又は測距測角儀を使用して行った。地形測量図は、1/200の縮尺で作成した。

堅穴住居跡から出土した特徴的な出土遺物等については、その出土状況を実測図・写真で記録した。なお、堅穴住居跡から出土した炭化物の一部について樹種同定を行い、その結果を付録1に所収した。堅穴住居跡の遺物は、床面出土と堆積土中出土を明確に分けて取り上げた。遺構外出土遺物は、グリッド単位で取り上げた。

写真記録は、デジタルの1眼レフカメラ・コンパクトカメラの2機種で行った。また、遺跡の立地や調査区の全景を記録するため、ドローンによる空中写真撮影を実施した。

発掘調査で得られた各種記録・出土遺物は、公益財団法人福島県文化振興財团遺跡調査部で整理作業を行った。報告書刊行後は各種台帳を作成し、閲覧可能な状態で福島県文化財センター白河館に収蔵・保管する予定である。

(香川)

第2章 調査成績

第1節 遺構の分布(図3)

調査の結果、竪穴住居跡5軒、溝跡2条、土坑1基、小穴6個を検出した。竪穴住居跡(以下「住居跡」という。)は、いずれも5世紀後半~6世紀前葉の古墳時代に位置づけられる。

調査区東部において、2~5号住居跡が近接している。特に2号・3号・5号住居跡の3軒は、分布範囲が半径10mの円内に収まり、各住居跡の中心部を結ぶと概ね正三角形になる。また、これら3軒の住居跡は、カマドを通過する中軸線方位もほぼ等しく、相互に何らかの関連性があった可能性が考えられる。そのうちの3号・5号住居跡は、床面上に炭化物・焼土の散布が確認され、焼失したものと考えられる。4号住居跡は、中軸線が大きく西に偏位しており、また、カマドも確認できなかったことから他の住居跡とは様相が異なる。

調査区中央部に位置する1号住居跡の中軸線方位は、2号・3号・5号住居跡と異なっているが、いずれも家老沢の屈曲部に向いていることが共通する。

2号溝跡は、1号住居跡と2~5号住居跡を区画するように北西方へ延びている。しかし、2号溝跡の時期が不明であり、古墳集落との関連性を明らかにすることはできなかった。

1号溝跡の時期・性格は不明であるが、1号住居跡との重複関係から古墳集落よりも新しい遺構である。6個の小穴については、検出数が少なく、その分布も散在的である。
(香川)

第2節 基本土層(図4、写真3)

今回の2次調査区は、平成12年度に常磐自動車道関連で発掘調査が行われた1次調査区から300m以上離れており、立地する面も異なる。堆積土も1次調査区とは異なっており、その成果を援用することができなかつたため、基本土層は改めて層序を付すことにした。ただし2次調査区の現況が体耕田であったため、耕地整備の影響を大きく受けており、大部分の地点で表土直下に遺構検出面であるLIVが露出する状況であった。旧表土以下の土層が確認されたのは、わずかに調査区北側のJ15グリッド周辺のみであった。この地点は、北側には家老沢がせまっており、沢に向かって傾斜する谷頭とみられる。以下に各層の特徴を記述する。

L I・L IIは近現代の土層である。L Iは盛土からなる表土層で、原子力災害に伴う避難指示解除に向けて実施された耕地の入替土を一括した。L IIは黒褐色シルトで、東日本大震災以前の耕作土である。L Iにより削平されているが、上部には水田耕作時の酸化面が観察でき、水田床土だったことが理解できる。以上の土層は調査区内の大部分で確認されている。

L IIIはやや赤みのある黒褐色粘質シルトを基調とした土層で、近世以前の旧表土と考えられる。

第1編 日南郷遺跡(2次調査)

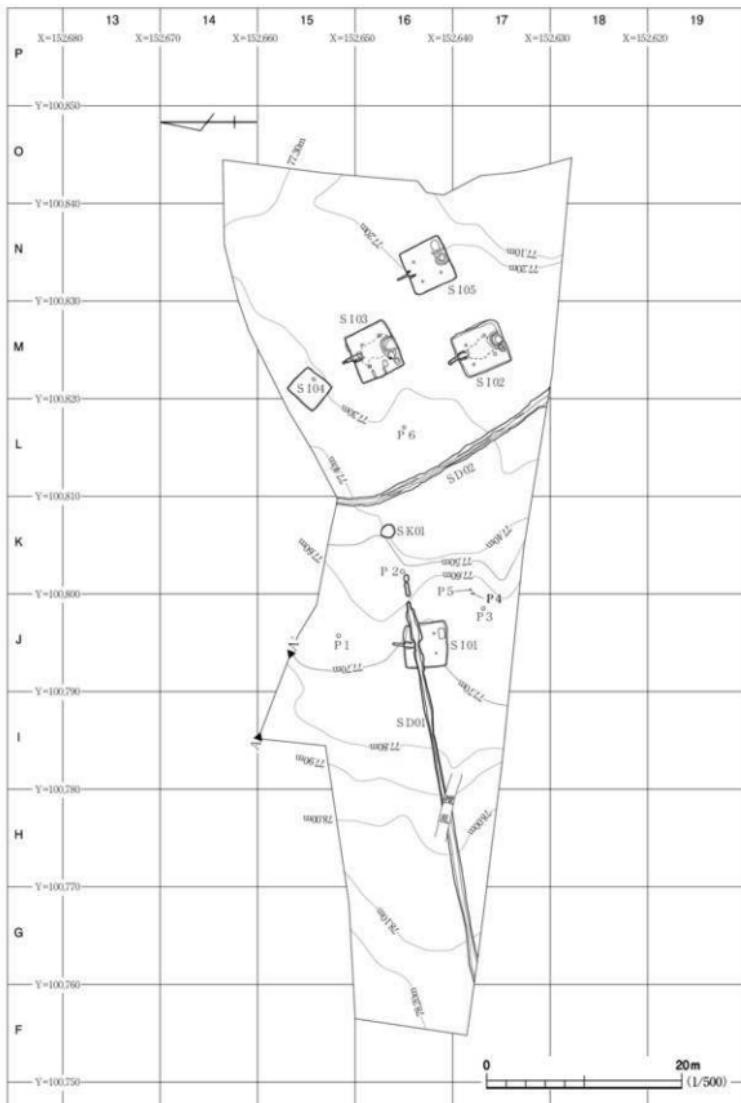


図3 遺構配置

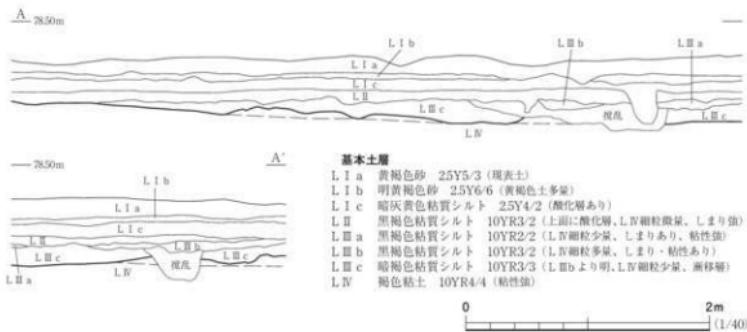


図4 基本土層

L IVの混入度合いで色調の違いがあり、L III a～III cに細分される。各層とも層厚は、大部分が5～10cmしかない。住居跡の下部には本層に由来するとみられる土層が堆積していた。今回の調査では、本層から遺物は出土していない。L IVは明るい色調の褐色粘土層で、今回の調査の基盤層である。すべての遺構が本層上面で検出されている。いわゆる「ローム層」で、遺物は含まない。なお、L IVの約50cm下位には砂を多く含む褐色土層が堆積しており、段丘疊層と推定される。住居跡の中で主柱穴底面がこの層に達しているものもあるが、本報告では区別せずL IVに含めている。

以上が今回の調査で確認できた土層であるが、住居跡上層や溝跡内には、基本土層で確認されていない黒色ないし黒褐色シルト層が堆積していた。この黒色シルトが、L IIとL IIIの間に堆積していた可能性が高いが、今回の調査では確認できなかった。

(佐藤)

第3節 壁穴住居跡

今回の2次調査区において、古墳時代中期後半～後期前葉と考えられる1～5号住居跡を検出した。そのうちの1～3号・5号住居跡は、北カマドと南壁側に貯蔵穴をもつ。また、近接した位置関係にある2号・3号・5号住居跡は、南壁沿いの中央に馬蹄形状の盛土が施されている。

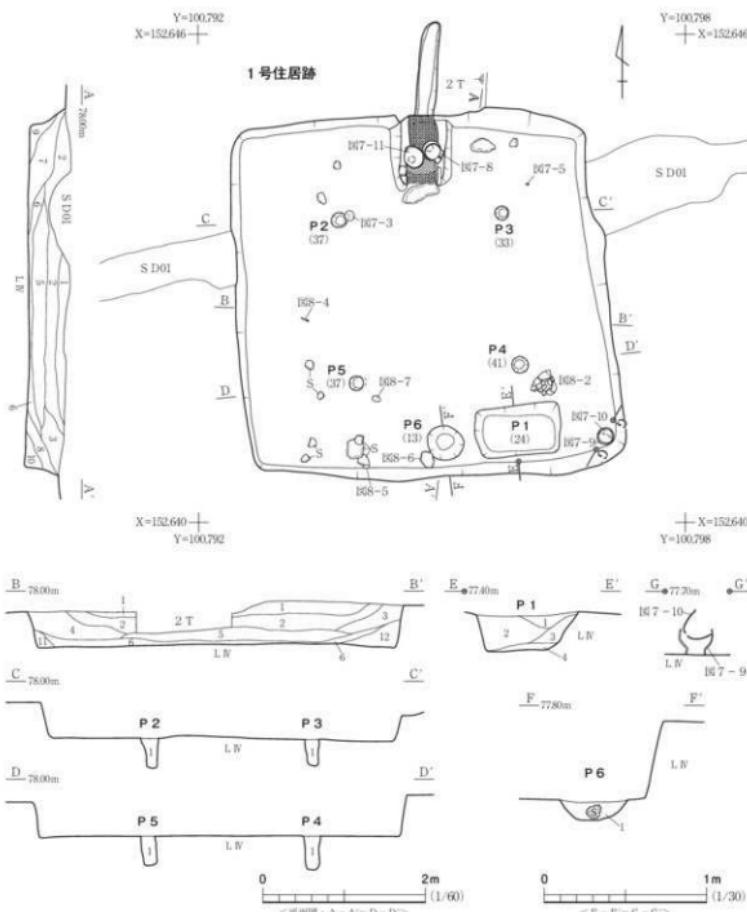
各住居跡の出土土器は、土師器に限られた。また、遺構外でも須恵器は確認できなかった。他に、住居跡から炭化物や一部が赤色の磨石等が出土している。炭化物については樹種同定を、磨石等については蛍光X線分析を行い、各分析結果については付録1・2に所収した。

1号住居跡 S I 01

遺構 (図5・6、写真4～8)

1号住居跡は、令和元年度に福島県教育委員会が実施した試掘・確認調査において、その2号トレンチ(2T)から発見された遺構である。1号住居跡の位置はJ 16グリッドである。遺構検出面

第1編 日南郷遺跡(2次調査)



1号住居跡堆積土
1 黒褐色粘質シルト 10YR3/4
2 黄褐色シルト 10YR3/2
3 黄褐色粘質シルト 10YR4/2
4 にぶい 黃褐色粘質シルト 10YR4/3
5 黑褐色シルト 10YR2/1
6 にぶい 黄褐色シルト 10YR5/4
7 黄褐色シルト 10YR4/6
8 黄褐色粘質シルト 10YR5/6
9 黄褐色粘質シルト 10YR5/8
10 にぶい 黄褐色粘質シルト 10YR5/6
11 黄褐色粘質シルト 10YR4/4
12 黄褐色粘質シルト 10YR5/6

P 1 堆積土

- 1 黄褐色シルト 10YR5/6
- 2 黑褐色シルト 10YR3/1
- 3 棕褐色シルト 10YR4/6
- 4 灰褐色粘質シルト 10YR4/1(炭化物微量)

P 2 堆積土

- 1 棕褐色シルト 10YR4/6

P 3・4 堆積土

- 1 にじみ黄褐色シルト 10YR5/4

P 5 堆積土
1 暗褐色シルト 10YR3/4

P 6 堆積土
1 黒褐色粘質シルト 10YR
(炭化物・葉褐色土粒)

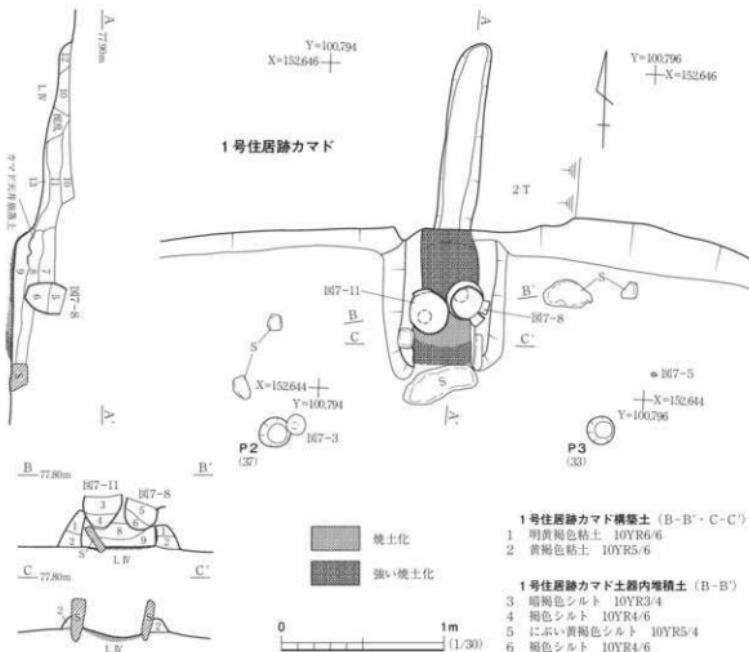


図6 1号住居跡（2）

はLIV上面である。

遺構検出状況は、地山としたLIV面に対して、土色が明瞭に異なる方形の広がりが認められた。また、遺構検出作業の段階で、遺構内堆積土がレンズ状堆積を呈していることも見て取れた。1号住居跡の東・西壁上端の一部が、1号溝跡の重複によって破壊されている。1号住居跡の東約15mの地点には2号溝跡がある。なお、2号トレンチの掘り込みを利用して調査を進めたため、1号住居跡の軸線方向と土層観察用畔の方向に誤差が生じてしまった。

遺構内堆積土の状況は全体としてレンズ状堆積であり、廃絶後、自然に埋没したものと考えられる。遺構内堆積土は12層に分けた。堆積状況は、竪穴壁際の三角堆積と竪穴中央の凹状堆積に分けられる。三角堆積はℓ7~12が該当し、いずれもローム質の褐色～黄褐色土壤である。凹状堆積はℓ1・ℓ2が該当し、いずれも腐植質土壤である。なお、各層の肉眼観察で、テフラ状の含有物等を確認することはできなかった。

1号住居跡の平面形は、正方形に近い。上端の平面規模は、長軸長4.55m×短軸長4.50mを測る。各堅穴壁の長さは、北壁4.27m、東壁3.95m、南壁4.55m、西壁4.17mと均一ではない。南北軸の方向はN 6°Wである。堅穴壁の立ち上がり角度は80°前後である。遺構検出面から床面までの深さは、全体的に約50cmである。床面は地山を直接利用し、東西、南北ともほぼ水平である。床面の踏み締まりは確認できなかった。また、壁溝・床面小溝も確認できなかった。

北壁の中心からやや東寄りの地点で、造りつけのカマドを検出した。カマドの燃焼部は、すでに天井が崩落していたが、掛口付近で東西に並ぶ2個の土師器甕(図7-8・11)が出土した。両甕の底部は、火床面に接地していない。カマド周辺の堆積土は13層に分けた。 ℓ 1・ ℓ 2は、燃焼部両袖の構築粘土である。 ℓ 3～6は、甕内の堆積土である。 ℓ 7～9は、燃焼部内の堆積土である。 ℓ 7は、遺構内堆積土の ℓ 8に類似する。 ℓ 8は、燃焼部天井の崩落土と推測される橙色に熱変した粘土塊を含む。 ℓ 9は、火床面上に厚く堆積する焼土層である。 ℓ 10～13は、煙道内の堆積土である。 ℓ 10・ ℓ 11は、土質・色調から基本土層のL IIIc・L IVに対応すると考えられる。このことから、煙道は地下式であった可能性がある。 ℓ 12は、煙出しからの流入土と思われる。

燃焼部の規模は、外寸で長軸長90cm×短軸長75cmである。火床面の規模は、長軸長77cm×短軸長44cmである。燃焼部両袖の先端には、焚口の袖石と考えられる花崗岩が検出され、おそらく袖石の上端に架けられていた焚口の天井石と推測される。燃焼部火床面は、焚口付近でわずかに窪むが、それ以外では床面とはほぼ同一標高である。火床面・奥壁・袖内面は、熱により暗赤褐色～明赤褐色に硬化していた。甕(図7-11)の下部から支脚と思われる石を確認したが、火床面への埋め込みが浅く、カマドの左袖側に倒れていた。奥壁は、火床面から約50°の角度で立ち上がる。煙道は、奥壁上端から約10°の傾斜で北に延びている。カマド煙道の規模は、長軸長117cm×短軸長25cmである。燃焼部の長軸線に対し、煙道の長軸線はやや東に傾いている。

床面からP 1～6の穴を検出した。P 1は床面南東部に位置する長方形の穴で、その周囲から土師器甕・瓶(図7-9・10、図8-2)が出土している。P 1内の堆積土は4層に分け、いずれも自然堆積土と判断した。P 1内から遺物は出土しなかった。P 1の上端規模は長軸長105cm×短軸長63cmである。床面から底面までの深さは24cmである。P 1は、いわゆる貯蔵穴の可能性がある。P 2～5は、概ね床面の対角線上に位置することから主柱穴と推測される。P 2～5内の各堆積土から柱痕を区別することができず、それぞれの堆積土を1層とした。抜取りの痕跡がなく、おそらく掘形と柱の直径が近似していたものと思われる。P 2～5の規模は、上端の直径が17cm前後、床面から底面までの深さが37cm前後である。P 2～5の各心々距離は、いずれも約20mと均等である。P 6は、南壁沿いのほぼ中央で検出した穴である。P 6の堆積土は炭化物と黄褐色土を均一に含み、人為堆積の可能性がある。P 6の断面形は舟底状である。P 6の規模は、長軸長45cm×短軸長42cm、床面から底面までの深さは12cmである。P 6は、その位置から出入口に関連した穴の可能性がある。なお、堅穴掘形の外周で、柱穴等を確認することはできなかった。

遺物(図7・8、写真27・28)

1号住居跡から土師器136点、鉄製品1点、石製品3点が出土した。土師器の器種は、杯・碗・甕などがある。杯の出土量が比較的少なく、また完形品に近い杯は1点(図7-3)のみである。土師器の出土地点は主にカマド及びその周辺部であるが、大・小の甕がカマドとは反対側のP1周辺で出土している。他に石が南壁沿いの床面上に散布していた。石の中で、明らかに磨面や敲打痕が認められたものを石製品として掲載した。

杯(図7-1~6) 1~3は丸底で、遺存率は1・2が45%以下、3が約80%である。3は口縁部を上に向け、P2脇で出土した。表面の色調は、1が赤褐色、2が明黄褐色、3が橙色である。1・2の器形は口縁部と体部の境がくびれるが、3はくびれのない半球状を呈する。1・2は口縁部内面に稜が付く。また2は、外面にも稜が付く。1の内面には、疎らな放射状のヘラミガキが施されている。2・3は、内外面とも概ね横位のヘラミガキが施されている。なお、1の内面は、熱を受けて部分的に爆ぜていた。

4は小破片で、内外面に赤彩が認められる。5は、カマド東側の床面から出土したほぼ完形の手捏ね土器で、口縁部を上に向けていた。5の調整は、指によるナデツケである。6は大型の丸底杯で、口縁部内面に緩い稜が付く。器面調整は、内外面にヘラミガキが施されている。

碗(図7-7) 丸底杯をさらに深くしたような器形の土器で、全体の約90%が遺存している。出土地点はカマド燃焼部内の堆積土であるが、その出土状態を確認することはできなかった。最大径は胴部中央にあり、口縁部が短く外傾している。器面調整は、外面の丁寧なヘラミガキに対し、内面はヘラナデである。

甕(図7-8・11) 出土状況から、カマド据付けの甕と考えられる。8は広口の甕で、口径と胴部最大径が等しい。器面調整は、外面がヘラケズリ、内面がヘラナデで、部分的にヘラミガキが認められる。8の底部外面に木葉痕が認められる。11は頸部が窄まり、胴部中央で最も膨らむ器形である。11の外面調整はヘラケズリである。11の内面は、熱を受けて部分的に爆ぜている。

甕・瓶(図7-9・10) 出土地点は、1号住居跡の南東角である。出土状況は床面に甕9が倒立した状態で置かれ、その中に小型単孔式の瓶10が重ねられていた。9の内面には、粘土紐の積上げ痕が明瞭に残っている。10の口縁部は、短く外反している。

甕(図8-1・3) いずれも遺存率が15%以下の口縁部破片である。口縁部の形状は、1が直立、3が外反である。1・3の胴部外面には、ヘラミガキが施されている。

瓶(図8-2) P1の北側で出土した無底式の瓶である。ほぼ完形品である。器形は、胴部が内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反する。胴部内面には、ヘラミガキが施されている。

刀子(図8-4) 西壁寄りの床面から出土した鉄製品である。先幅に対して元幅が広めである。棟区は鉤形で茎に繋がる。茎の端部には、欠損したような痕跡は認められなかった。茎に木質が残存している。

石製品(図8-5~7) いずれも床面から出土したものである。5・7は磨石で、いずれも赤色

第1編 日南郷遺跡(2次調査)

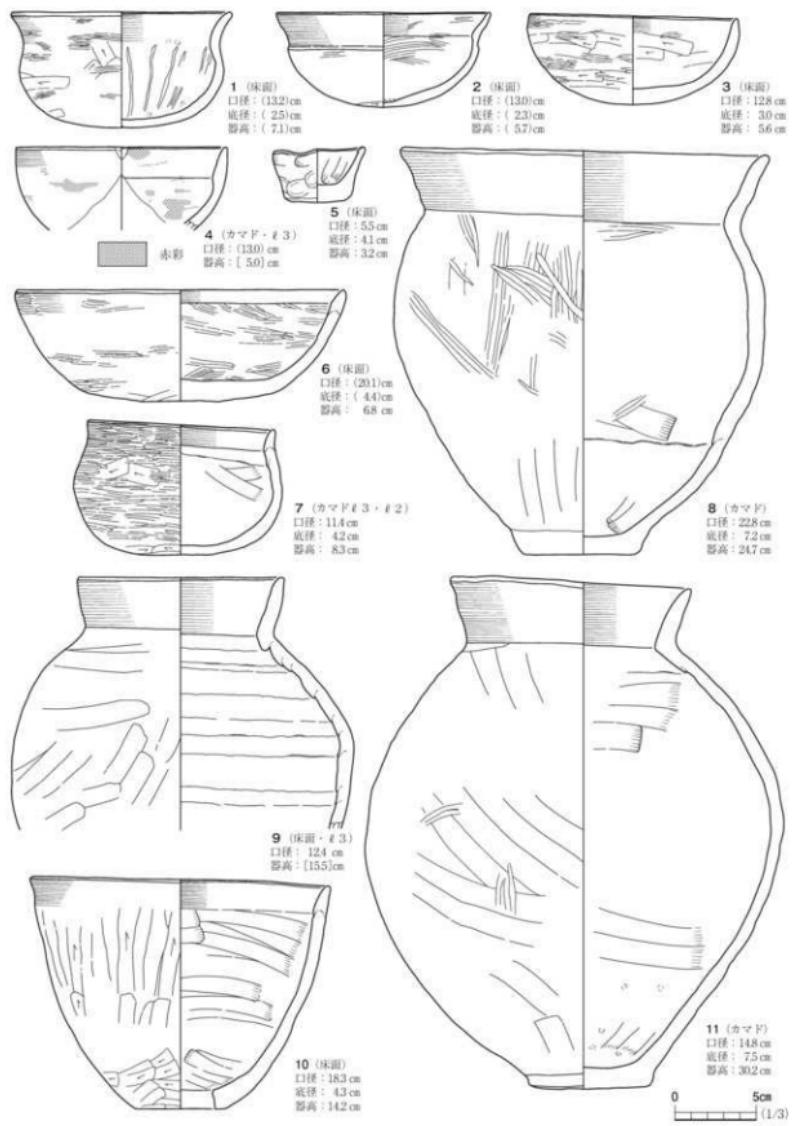


図7 1号住居跡出土遺物 (1)

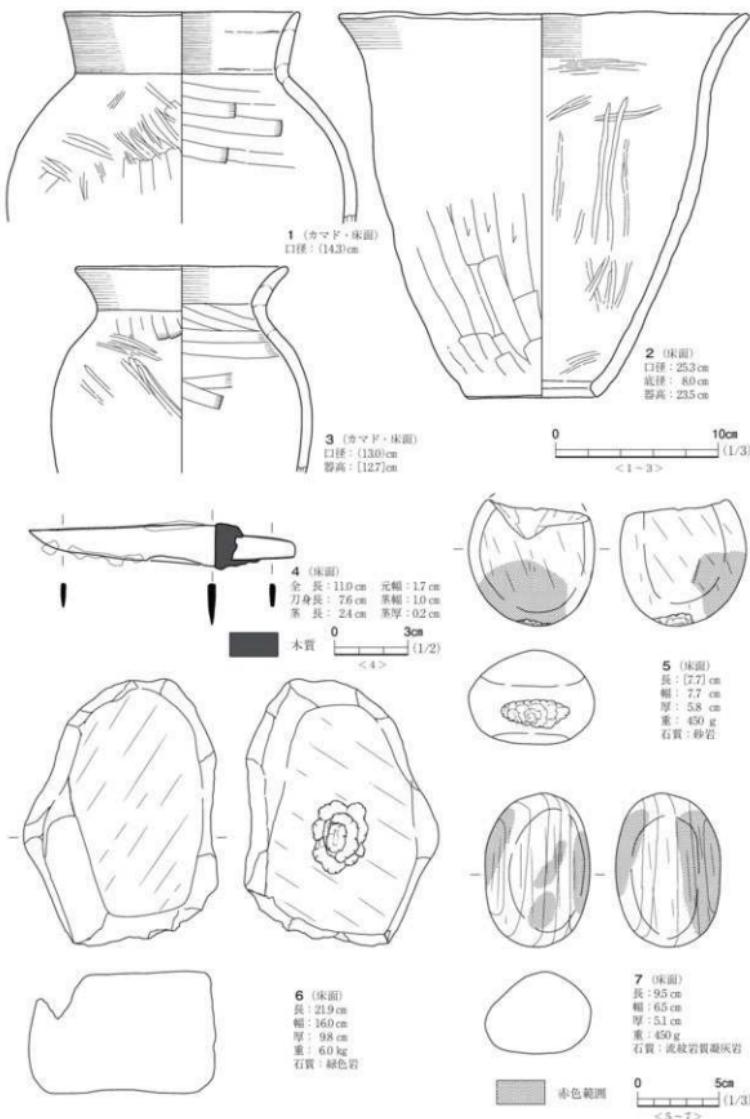


図8 1号住居跡出土物 (2)

に変化した箇所が認められる(付編2参照)。5は下端に敲打痕が認められ、敲石としても使用されたようである。6はP6の南西側で出土した台石で、表裏面が擦られ、また裏面には浅い敲打痕が認められる。

まとめ

1号住居跡は、北壁のほぼ中央にカマド、南壁側に貯蔵穴と推測されるP1が付設されている。P1の周囲は無堤である。遺構内堆積土の肉眼観察から、テフラ状の含有物は確認できなかった。カマド燃焼部の構築土は黄褐色粘土を用いている。カマド燃焼部の掛口には、2個体の甕を据えていたと思われる。主柱は4本で、方形床面のほぼ対角線上に配置し、その柱間は均等である。床面は、地山を直接利用している。床面から壁溝、床面小溝等を確認することはできなかった。1号住居跡の出入口は、梯子穴の可能性があるP6の位置から南壁中央に設けられていた可能性がある。

1号住居跡の時期は、出土土器の特徴から古墳時代中期後半～後期前葉と考えられる。(香川)

2号住居跡 S I 02

遺構(図9・10、写真9～12)

2号住居跡は、調査区南東部のM17グリッドに位置する。検出面はLIV上面で、炭化物やLIII・LIV粒を含む黒色土の範囲として確認した。他遺構との重複はないが、北約6mに3号住居跡、約9mに4号住居跡、北東約5.5mに5号住居跡が近接している。

遺構内堆積土は、12層に区分した。このうちLIIIないし黒色土に由来し混入物が少ないℓ1～7は自然堆積と判断した。これに対しLIVを基調とし、水平に堆積するℓ8・ℓ9は明らかに人為堆積を示している。貼床の可能性も考えられたが、ℓ10～12の上位に堆積すること、ℓ8・ℓ9を除去した後にカマド内崩落土が確認できたことから、堆積土と判断した。竪穴壁際には、LIIIとLIVの混土であるℓ10～12が堆積しており、住居廃絶直後の土層と考えられる。

2号住居跡は、平面形が長方形を呈し、規模が長軸長5.11m、短軸長4.62mを測り南北方向に長い。東壁下端の軸線はN23°Wを指し、これは近接する3号・5号住居跡の中軸線と概ね一致する。床面はLIVを掘り込んだ面をそのまま使用しており、検出面からの深さが最大51cmを測る。床面は北方がわずかに高く、南方に緩やかに傾斜している。また、住居跡中央の3.0m×1.0～2.0mの範囲には踏み縮まりが認められる。竪穴壁は急峻に立ち上がり、南東隅部のみわずかに緩やかになっている。

2号住居跡に伴う施設として、主柱穴・貯蔵穴・小穴・カマドが検出された。主柱穴はP1～4の4個であり、それぞれ対称的な場所に位置している。主柱穴上端の直径は36～23cmと比較的小規模だが、深さは56～49cmと深く掘り込まれ、底面は標高76.30m付近に達している。柱痕が確認できたのはP2のみであることから、柱材は柱穴掘形とほぼ同じ太さと考えられる。

南壁中央で、竪穴壁の際を掘り込んだP5を検出した。P5の周囲には、馬蹄形の土手が巡っている。P5は平面形が長方形を呈し、規模が長軸長62cm×短軸長57cm、床面からの深さが37cm

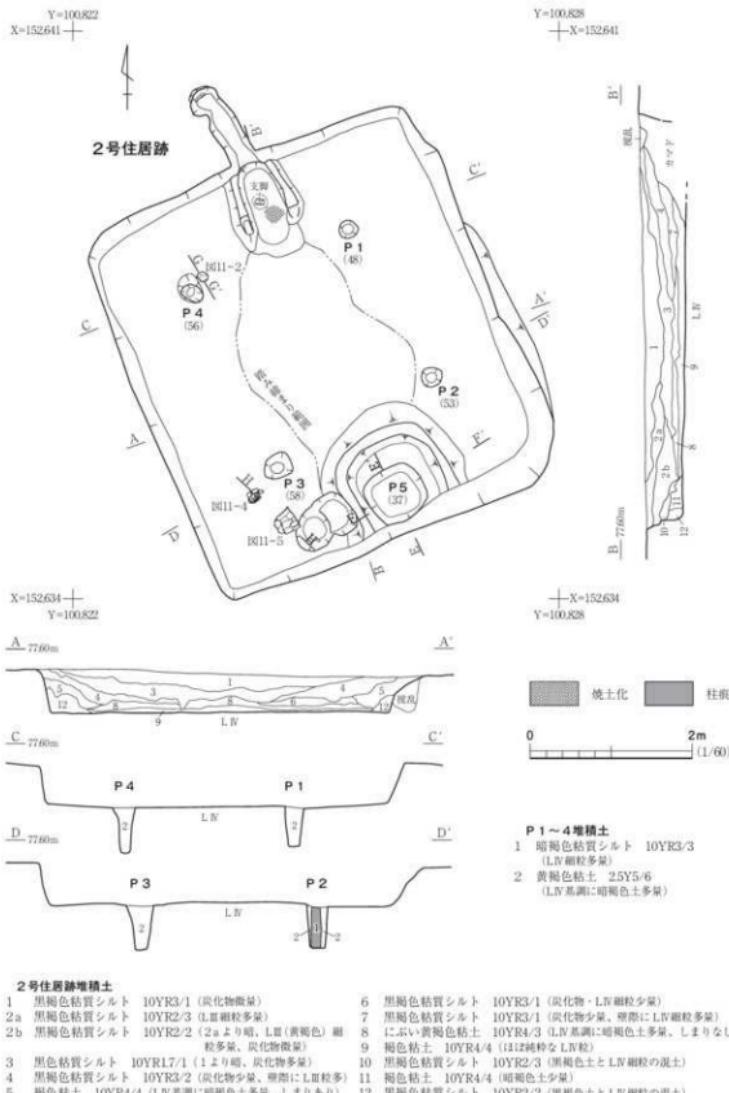
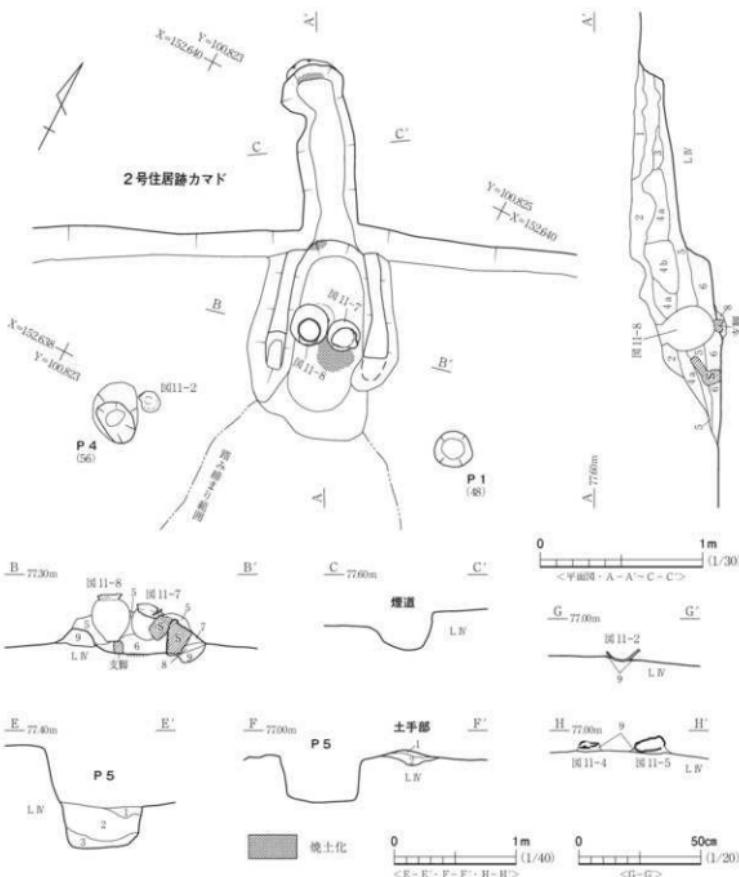


図9 2号住居跡 (1)

第1編 日南郷遺跡(2次調査)



2号住居跡カマド堆積土

- | | |
|---|---|
| 1 黒褐色粘質シルト 10YR2/2 (LIV細粒・炭化物や多量、焼土細粒少量) | 1 黒褐色粘質シルト 10YR3/1 (焼土細粒・炭化物微量) |
| 2 黄褐色粘質シルト 10YRA4/4 (LIV細粒多量、焼土細粒・炭化物や多量) | 2 にい黄褐色粘質シルト 10YRA4/3
(LIV細粒と暗褐色土の混土、しまり弱) |
| 3 黑褐色粘質シルト 10YR2/3 (LIV細粒・焼土細粒少量) | |
| 4 a 黄褐色粘質シルト 10YRA4/4 (LIV細粒基調に暗褐色土細粒・焼土細粒少量) | 3 暗褐色粘土 10YR4/4 (LIV基調に暗褐色土少量) |
| 4 b 暗褐色粘質シルト 10YR3/4 (LIV粒・細粒基調に暗褐色土細粒・焼土細粒少量) | |
| 4 c 暗褐色粘土 10YR4/6 (LIV基調、LIV粒・焼土細粒多量) | |
| 5 黑褐色粘質シルト 10YR2/2 (LIV粒多量、焼土細粒・炭化物少量) | 1 にい黄褐色粘土 10YR5/4 (H12純粹なLIV塊、しまり強) |
| 6 黑褐色粘質シルト 7.5YR2/2 (焼土粒・細粒・LIV粒・細粒・焼土細粒と暗褐色土の混土) | 2 暗褐色粘質シルト 10YR3/3 (LIV細粒極多量、しまり弱) |
| 7 黄褐色粘質シルト 10YR4/4 (LIV基調) | |
| 8 黑褐色粘質シルト 7.5YR3/2 (焼土粒・LIV細粒多量、しまり弱) | |
| 9 暗褐色粘土 10YR4/4 (LIV基調、焼土細粒少量) | |

図10 2号住居跡 (2)

を測る。堆積土は3層に分けた。P 5については、梯子を設置する施設の可能性も考えた。しかし、土層観察では、その痕跡を確認することはできなかった。P 5の規模・形状から貯蔵穴の可能性が考えられる。P 5を囲む馬蹄形の土手は、西辺と北辺がLIVを削り出して形成されている。東辺は、L IVを基調とした土を盛り上げている。土手部外側までの規模は、長軸長1.73m×短軸長1.40mを測る。

P 5の西に接して、東西に並ぶ小穴2個が存在する。平面形は円形を基調とし、規模は西側が直径40cm・深さ10cm、東側が直径55cm・深さ5cmの小さなものである。2個の穴については貯蔵穴、梯子穴等の可能性も考えたが、その性格は不明である。

カマドは北壁中央に存在する。焚口・燃焼部・煙道からなり遺存状態は良い。焚口から煙道までの長軸長は2.34mである。燃焼部の火床面は長軸長1.24m×短軸長0.53mの広がりをもち、火床面中央からやや焚口に寄った位置に22cm×20cmの焼土面を確認した。この焼土面の北西に接して凝灰岩を長方形に整形した支脚が据えられており、これに乗った状態で土師器甕(図11-8)が、これの東に接して土師器小型甕(図11-7)が出土している。この2個体の甕は、住居跡機能時には燃焼部の掛口に据えられていた土器と考えられる。燃焼部の袖は、長さ30cm×幅20cm×厚さ20cmに整形された凝灰岩塊を焚口側端部から左右それぞれ3個ずつ据えて芯材とし、その周間に粘土を貼り付けることで構築されている。燃焼部の平面形は、袖の遺存状態から長方形を呈していたと考えられ、その規模は長軸長97cm×短軸長94cmを測る。煙道の長軸長は北壁から1.14mである。

カマド内堆積土は9層に大別した。 ℓ 1～6が住居廃絶後の堆積土である。このうち焼土を多く含むLIV基調土の ℓ 4～6が、燃焼部の天井崩落に由来する土層とみられ、天井の芯材と考えられる凝灰岩塊も出土している。これに対し、 ℓ 7～9は燃焼部袖を構築した土層である。

遺物(図11-12、写真29・30)

2号住居跡から、土師器48点、石製品1点が出土した。特徴的な出土状況としては、カマドで出土した土師器甕(図11-7)の内部に土師器杯(同図3)が入れてあったこと、本住居跡南西部の床面から土師器の椀・甕(同図4・5)が並んで出土したことがあげられる。前者は住居機能時から廃絶時の様相、後者は住居廃絶時の様相をそれぞれ示すものと考えられる。出土遺物のうちの9点を図示した。

杯(図11-1～3) 1はカマド内堆積土出土と遺構内堆積土出土の破片が接合しており、カマド内から出土した破片は被熱により内外面とも焼けている。口縁部が外傾する器形の杯で、内面に稜をもち、底部は丸底となる。調整は外面にヘラナデ、内面にヘラミガキが観察される。2・3は体部が丸みをもって立ち上がり口縁部が直立する形状で、底部は2が平底、3が丸底となる。器面にはヘラナデやヘラミガキが観察される。3は40%が遺存し、図11-7の内部底面に置かれていた。器面には焼けや変色がみられないことから、カマド廃絶時に7の中に置かれたと推定される。

椀(図11-4・6) 高さのある器形で椀とした。体部に最大径をもち、口縁部が直立気味に立ち上がるが、6は器高がそろわざゆがんだ形状を呈している。4・6の調整は、ヘラナデやヘラミガ

第1編 日南郷遺跡(2次調査)

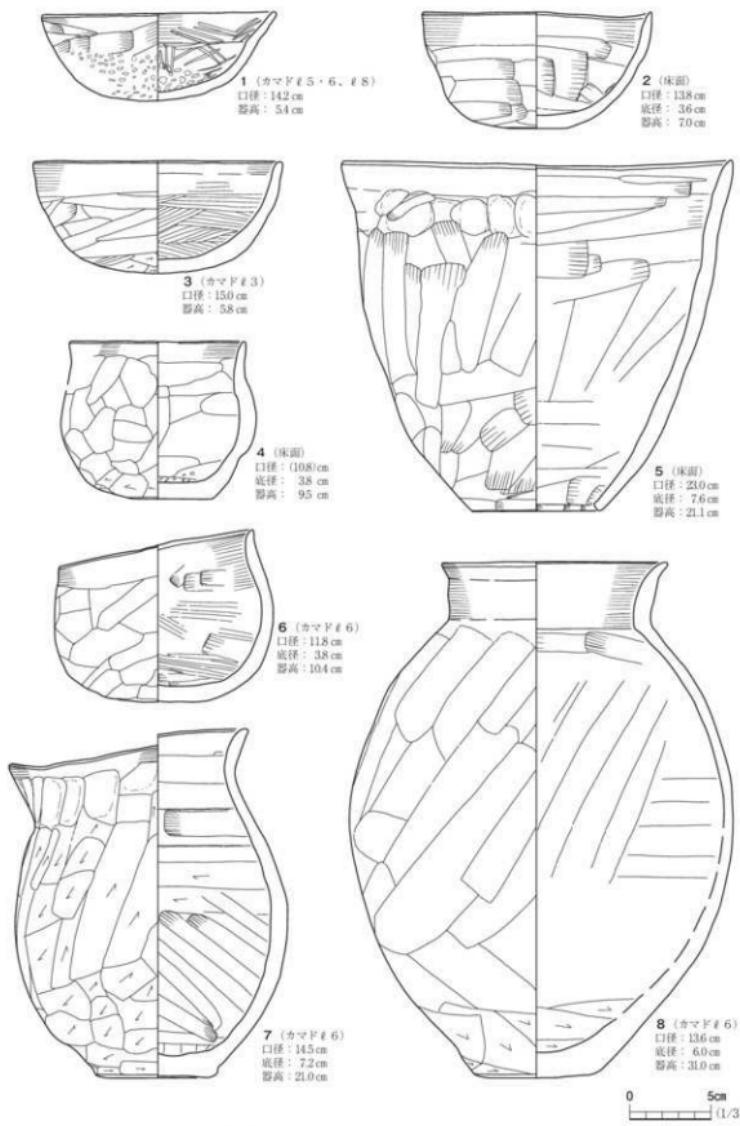


図11 2号住居跡出土遺物（1）

キが施される点は図11-1~3と共通するが、器厚が厚く、雑な印象を受けるつくりといえる。

瓶(図11-5)4と並んで床面から出土した。器高が低いわりに口縁部が開く器形で、内面に丁寧なヘラナデが施される一方、外面には積上げ痕やユビオサエを残す。

壺(図11-7・8)いずれもカマド燃焼部で出土した完形の壺である。7は小型の壺で、頸部が広く口縁部は外反気味に立ち上がる。

調整は、外面にヘラケズリ、内面には丁寧なヘラナデがなされる。8は支脚に乗った状態で出土した。球胴形に近い胴部から直立気味に外傾する口縁部にいたる大型の壺である。調整は、外面にヘラケズリ、内面には丁寧なヘラナデがなされる。

石製品(図12-1)床面近くから出土した磨石である。表面とも平滑面が観察され、端部には敲打痕もみられる。床面からわずかに浮いた状態で出土した。

まとめ

2号住居跡は、北カマドの対辺に貯蔵穴等の施設があり、主柱穴は小さいながら深く掘り込まれるなどの特徴をもっている。P5が規模から貯蔵穴と考えられるが、その周りを馬蹄形状の土手で囲っている。

2号住居跡の年代は、出土遺物から古墳時代中期後半~後期前葉に比定される。(佐藤)

3号住居跡 S I 03

遺構(図13~15、写真13・14)

3号住居跡は、調査区東部のM15・M16グリッドに位置する。遺構検出面はLIV上面で、炭化物やLIII・LIV粒を含む黒色土の範囲として確認した。他遺構との重複はないが、北約3mに4号住居跡、南東約4.5mに5号住居跡、南約6mに2号住居跡が近接している。遺構内堆積土は、7層に分層した。このうち混入物が少ない ℓ 1・ ℓ 2が自然堆積、混入物が多い ℓ 3~7が人為堆積と考えられる。なかでも ℓ 4には炭化物が多量に含まれており、焼土はみられなかったが火災に伴う土層の可能性がある。床面出土の炭化材周辺には ℓ 4が堆積していた。 ℓ 5は東壁・西壁付近、 ℓ 6・ ℓ 7は南壁付近にのみ分布していた。

3号住居跡は、平面形が東西方向にやや長い長方形を呈し、その規模は長軸長5.13m、短軸長4.60mを測る。東壁下端の軸線はN28°Wを指し、2号・5号住居跡の中軸線と概ね一致している。床面はLIVを掘り込んだ面をそのまま使用しており、検出面からの深さは最大36cmである。

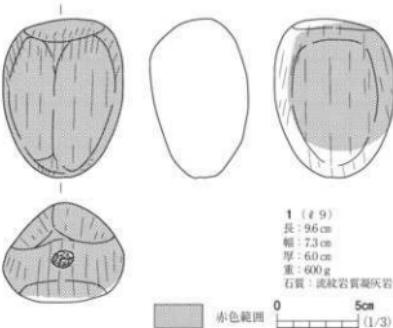
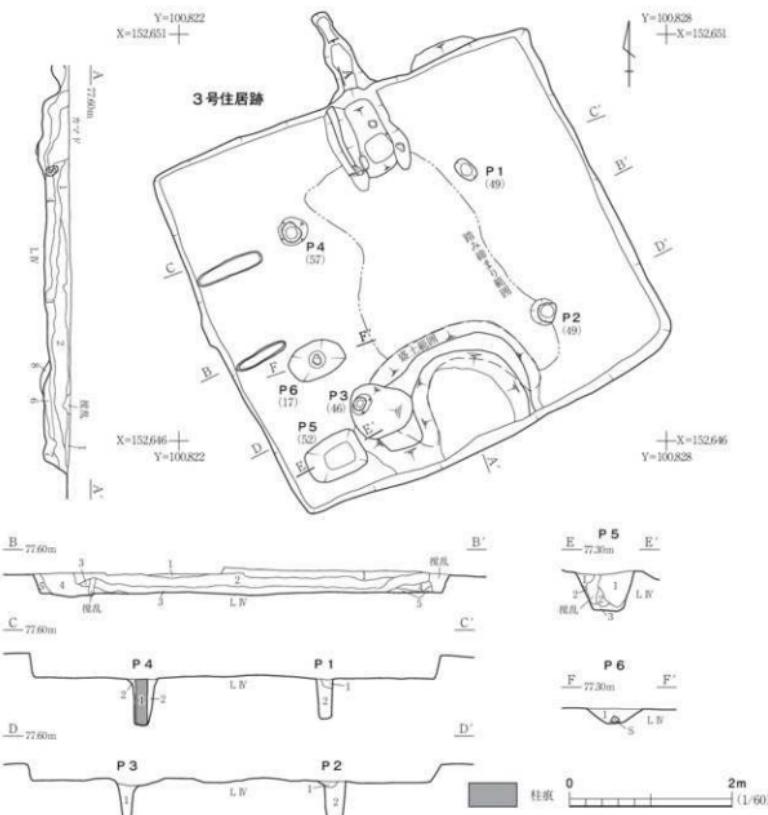


図12 2号住居跡出土遺物(2)

第1編 日南郷遺跡(2次調査)



3号住居跡堆積土

- 1 黒褐色粘質シルト 10YR3/1 (炭化物微量)
- 2 黒色粘土 25Y2/1 (1より暗、炭化物・LNv細粒少量)
- 3 黒褐色粘質シルト 10YR3/1 (LNv細粒多量、しまり弱)
- 4 褐色粘土 10YR4/4 (LNv粒基調、炭化物・暗褐色土・細粒多量、しまり強)
- 5 暗褐色粘質シルト 10YR3/3 (LNv粒基調、4より暗、しまり・粘性あり)
- 6 褐色粘土 10YR4/4 (LNv粒基調、暗褐色土少量)
- 7 暗褐色粘質シルト 10YR3/3 (LNv細粒と暗褐色土の混土、炭化物少量、粘性あり)
- 8 オリーブ褐色粘土 25Y4/3 (LNv粒基調、暗褐色土少量)

P 1堆積土

- 1 にぶい黄褐色粘質シルト 10YR4/3 (暗褐色土と LNv細粒の混土、焼土細粒・炭化物少量、しまり強)
- 2 黑褐色粘質シルト 10YR3/1 (LNv細粒多量、炭化物や多量、しまり弱)

P 2堆積土

- 1 暗褐色粘質シルト 10YR3/4 (LNv細粒多量、しまりややあり)
- 2 褐色粘土 10YR4/6 (LNv粒基調、しまり弱)

P 3堆積土

- 1 褐色粘土 10YR4/6 (LNv粒基調、しまり弱)

P 4堆積土

- 1 暗褐色粘質シルト 10YR3/3 (炭化物・LNv細粒多量)
- 2 褐色粘土 10YR4/6 (炭化物・焼土細粒少量)

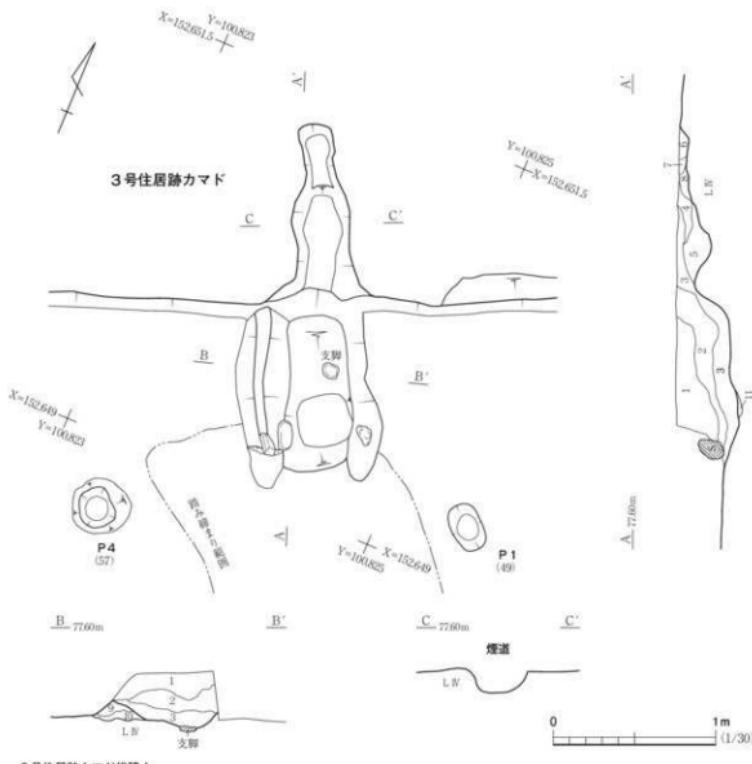
P 5堆積土

- 1 黄褐色粘質シルト 10YR4/3 (LNv粒・細粒多量、炭化物や多量、しまりなし)
- 2 黑褐色粘質シルト 10YR3/2 (LNv粒・細粒多量、しまりなし)
- 3 オリーブ褐色粘土 25Y4/4 (やや薄った LNv、しまり強)

P 6堆積土

- 1 黑褐色粘質シルト 10YR2/3 (LNv細粒多量、焼土細粒・炭化物多量)

図13 3号住居跡（1）



3号住居跡カマド堆積土

1 にぶい黄褐色粘質シルト 10YR4/3 (LIV粒・細粒・桃土細粒・暗褐色 色土細粒の混土)	6 暗褐色粘質シルト 10YR3/3 (桃土粒多量、LIV粒やや多量) 色土細粒の混土)
2 暗褐色粘質シルト 10YR3/3 (1より弱く、層状にLIV粒)	7 黄褐色粘土 10YR4/6 (純粋なLIV塊)
3 暗褐色粘質シルト 7.5YR3/3 (桃土粒・LIV粒・暗褐色土の混土。 炭化物微量)	8 暗褐色粘質シルト 10YR3/3 (桃土粒多量、LIV粒やや多量) 色土細粒の混土)
4 暗褐色粘質シルト 10YR2/4 (桃土粒・黑褐色土粒・LIV粒少量)	9 黄褐色粘土 10YR4/4 (LIV粒無調に暗褐色土粒多量、桃土細粒少量) 炭化物微量)
5 黄褐色粘土 10YR4/4 (LIV粒多量、桃土細粒、黑色土細粒少量)	10 黄褐色粘土 10YR5/4 (はば純粋なLIV塊)
11 にぶい黄褐色粘質シルト 10YR4/3 (桃土細粒・炭化物少量。し まりやや弱)	

図14 3号住居跡（2）

床面は南方から北方へ、東方から西方へわずかに傾斜している。南壁際中央の馬蹄形施設からカマド焚口にかけての3.2m×1.8mの範囲には踏み締まりが認められる。竪穴壁は急峻に立ち上がり、特に北壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

3号住居跡に伴う施設として、主柱穴・馬蹄形施設・小穴・床面小溝・カマドが検出された。主柱穴はP1～4の4個であり、対称的な場所に位置している。主柱穴上端の直径は35～20cmで、深さは58～38cmである。掘形が小さなながら深く掘り込まれる点は、1号・2号・5号住居跡と共に通している。柱痕が確認できたのはP4のみであり、柱材は掘形とほぼ同じ太さとみられる。

第1編 日南郷遺跡(2次調査)

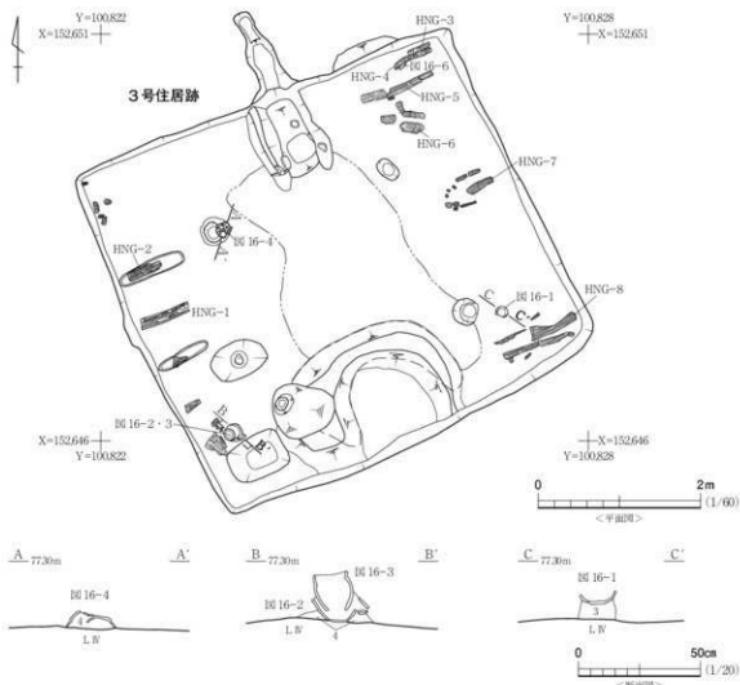


図15 3号住居跡（3）

馬蹄形施設は、南辺中央付近を開んだ土手部と、土手部に囲まれた窪み部からなる。窪み部は平面形が半円形に近く、規模は長軸長98cm×短軸長95cm、深さは最も深い地点で7cmである。土手部はLIVを基調とするℓ8を貼り付けて土手とし、窪み部を馬蹄形状に開んでいる。土手部外側までの規模は、短軸長が1.43mである。長軸長は、西部が攪乱されて不明瞭ながらも2.34mを測る。

住居跡南北隅のP5は、比較的小規模ながらも整った長方形を呈し、深く掘り込まれていることから、貯蔵穴の可能性がある。堆積土は3層に分層したが、いずれもLIVを多量に含む。P5の規模は、長軸長72cm×短軸長53cm、床面からの深さが47cmを測る。西壁から約0.7mに位置するP6は、開口部と比較して小さい底面をもち、底面中央に石が据えられていた。性格は不明だが、容器等を据えた痕跡の可能性があり、人為的に埋め戻されている。

間仕切り溝と考えられる床面小溝が2条検出された。いずれも西壁際に位置している。規模は、北側が長軸長85cm×短軸長20cm、南側が長軸長65cm×短軸長15cmである。小溝内にはℓ4類似土が堆積しており、上面から炭化材が出土している。

カマドは北壁中央に存在し、焚口・燃焼部・煙道からなる。遺存状態は良いが、燃焼部の右袖は

掘りすぎたため、確認することができなかった。焚口から煙道までの長軸長は2.26mである。

燃焼部底面は長軸長97cm×短軸長40cmの広がりをもち、床面からは最大10cm窪んでおり火床は遺存していない。これは住居廃絶時に火床を搔き取ったためと考えられる。燃焼部のほぼ中央に凝灰岩を整形した支脚が据えられていたが、これも大部分が削り取られている。燃焼部の袖は、焚口側端部に凝灰岩塊を据えて芯材とし、これに粘土を貼り付けることで構築されている。袖がほぼ平行に延びていることから、燃焼部は長方形を呈していたとみられる。燃焼部の規模は、長軸長が1.01m、短軸長が遺存値で85cmを測る。煙道は、北壁から1.03m延びて煙出しに至る。

カマド内の堆積土は11層に細分した。 ℓ 1～8は、住居廃絶後の自然堆積土である。このうち ℓ 1～3は主に燃焼部天井、 ℓ 5～7は煙道天井の崩落にそれぞれ由来する土層とみられる。また、 ℓ 1・ ℓ 2中には層状に薄く堆積する砂層が観察できることから、崩落の合間に周辺から雨水などの流入があったことも理解できる。LIVを基調とする ℓ 9・ ℓ 10は袖構築土、 ℓ 11はカマド掘形内の埋土である。

遺物（図16、写真30・33）

3号住居跡から、土師器64点、石器・石製品4点が出土した。このほか形状を残す多数の炭化材が出土している。炭化材は、層位的には床面あるいは床面近くから出土し、平面的には東壁・西壁の際で出土した。図15に出土状態を示した。

炭化材の大きさは、最長で1m、幅は15～20cmに収まるものが大部分である。炭化材の長軸方向は、東壁・西壁に対してほぼ垂直であり、住居跡中心部に向く放射状ではない。しかも西壁際では、上記した床面小溝の範囲内に収まるものもあった。以上の所見から、これらは上屋材ではなく、建物内の施設を構成した材の可能性も考えられる。具体的な施設として、間仕切りや棚状施設などをあげることができる。

杯（図16-1）住居跡南東部の ℓ 3下部から出土した杯で、2号住居跡 ℓ 1出土の破片と接合した。この接合関係は、本住居跡の廃絶時に2号住居跡がほぼ埋まりかけていたこと、つまり両住居跡の時間差を示していると考えられる。器形は、比較的大きな底部から丸みを持って立ち上がり、口縁部が内傾する。調整は内外面とも幅広の工具によるヘラナデが観察される。色調は黄褐色で、他住居跡の杯が赤みを帯びているのとは異なっている。

壺（図16-2・3）小型の壺とした。2の上に3が乗った状態で出土した。2は口縁部、3は底部の一部を欠損している。2・3は意図的に壊され、また重ねられた可能性が高い。いずれも、球形の胴部から口縁部がわずかに外反する器形を呈している。調整はヘラナデが多用されており、2の内面にはヘラミガキも観察される。

鉢（図16-4）P 4脇から口縁部を床面に伏した状態で出土したもので、全体の約40%が遺存する。器形は、胴部上位に最大径があり、そこから口縁部が内傾する。器形的には片口土器にも類似する。調整は内外面ともヘラナデが多用され、内面底部付近のみヘラケズリが観察される。

石器・石製品（図16-5～8）5は両側辺に調整を施した珪質頁岩製の剥片で、未製品と考えら

第1編 日南郷遺跡(2次調査)

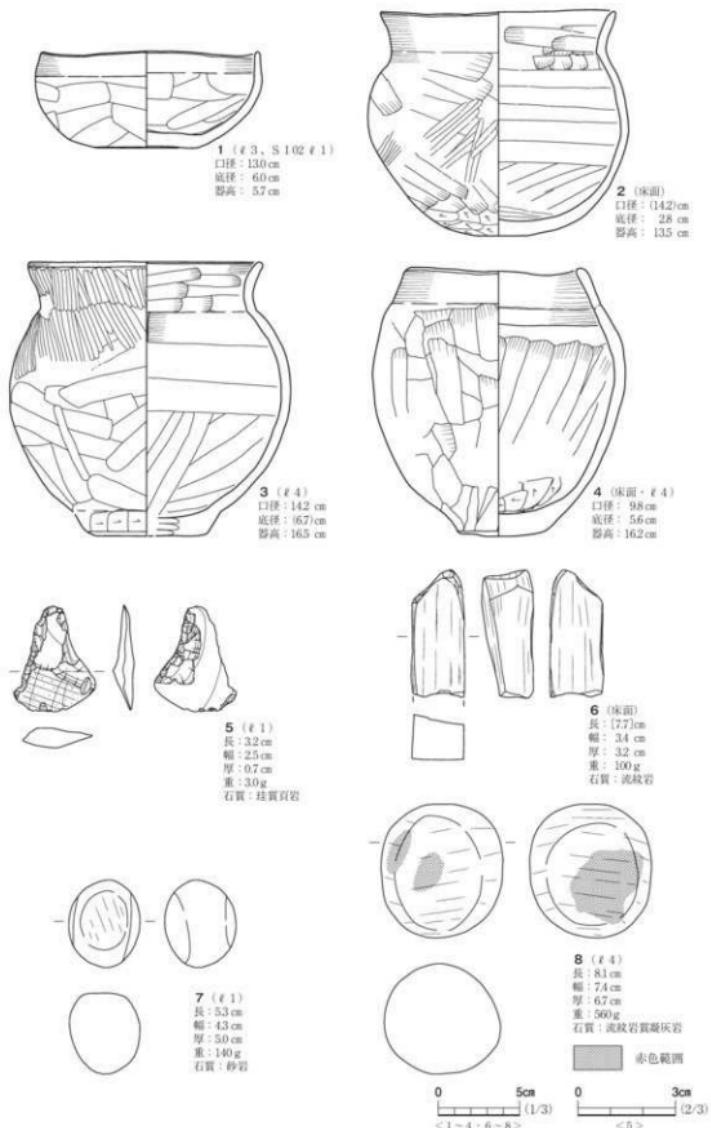


図16 3号住居跡出土遺物

れる。6は住居跡北東部の床面から出土した砥石である。4面すべてが摩耗しており、頻繁な使用が想定される。7・8は使用痕が明瞭な磨石で、器面には赤色を呈する部分が確認される。

まとめ

3号住居跡は調査区東端付近に位置し、近接する2号・4号・5号住居跡とともに住居跡集中区を形成している。平面形や規模、馬蹄形盛土施設をもつ点やカマド・柱穴の特徴が2号・5号住居跡と類似している。なお、土器の接合状況から、本住居跡と2号住居跡の廃絶時期に時間差を想定することができた。

注目されるのは、炭化材の出土である。堆積土中に焼土は観察されていないが、火災による廃絶の可能性を考えている。炭化材の出土状況から、垂木等の屋根組材ではなく室内施設の用材だった可能性もある。付録1に掲載した樹種分析では、これらの樹種としてスギ・ヒノキ・ヤナギ・ブナがあり、スギ・ヒノキが卓越するとの結果が得られている。

3号住居跡の年代は、出土遺物から古墳時代中期後半～後期前葉に比定できる。(佐藤)

4号住居跡 S I 04

遺構 (図17、写真15・16)

4号住居跡は、調査区北側のL15、M15グリッドに位置する。南側には3号住居跡が隣接する。遺構検出面はLIV上面で、方形を呈した明瞭な黒褐色土の落ち込みを確認した。4号住居跡の規模は、今回検出した住居跡の中で最も小型である。

4号住居跡の平面形は、ほぼ正方形を呈する。規模は上場の長軸長3.53m、短軸長3.36mを測る。下場は、長軸長3.30m、短軸長が3.10mである。短軸方向の傾きはN 48° Wである。遺構検出面から床面までの深さは20cmである。床面は、ほぼ水平である。

遺構内堆積土は4層に分け、いずれも自然堆積土と判断した。 ℓ 1～4は、軟質でやや粘性のある土層である。 ℓ 1は黒褐色土が主体で、 ℓ 2は灰褐色土で構成され、いずれも遺物等はない。 ℓ 3から、拳大の石が2個と土師器片が出土した。また、南東側 ℓ 4下位で、床面と間層を挟んで焼土を検出し、隣接して口縁部を上に向けた完形の土師器杯が出土した(図18-1)。焼土の層厚は約10cmで、3層に分けた。焼成面が発達していないため、この場所に廃棄された可能性もある。この焼土の南西側の床面から橙色の被熱範囲も確認した。また、被熱範囲を精査中に、北側で橢円形を呈した深さ10cmのP1を検出したが、その性格は不明である。

遺物 (図18、写真30)

4号住居跡から土師器が3点出土し、そのうちの2点を図示した。

杯(図18-1・2)いずれも赤彩が施された丸底の杯である。1は完形品の資料で、赤彩は外表面全体と口縁部内面に観察される。1の器形は、内湾する体部から口縁部が直線的に外方へ開く。内面の口縁部と体部の境に顕著な稜が形成されている。1の外調整は、口縁部がヨコナデ後ヘラミガキ、底部～体部がヘラケズリである。2は床面出土の資料で、全体の約50%が遺存する。2の

第1編 日南郷遺跡(2次調査)

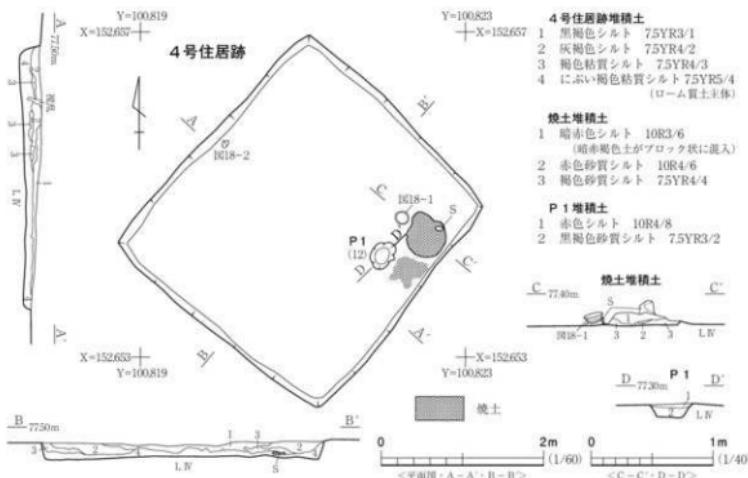


図17 4号住居跡

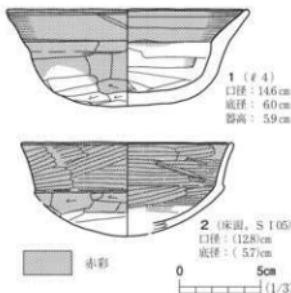


図18 4号住居跡出土遺物

赤彩は、内外面とも口縁部～体部の範囲で観察される。2の器形は須恵器杯蓋状で、口縁部と体部の境に顯著な稜が形成されている。2の外表面調整は、口縁部がヘラミガキ、底部がヘラケズリである。なお、2は、5号住居跡カマド検出面出土の資料と接合した。

まとめ

4号住居跡は3号住居跡と近接するが、中軸線の方向が異なっている。カマド・柱穴等の有無については不明である。4号住居跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期後半～後期前葉と考えられる。

(笠原)

5号住居跡 S I 05

遺構 (図19・20、写真17～20)

5号住居跡は、令和元年度に福島県教育委員会が実施した試掘・確認調査において、その8号トレンチから発見された遺構である。5号住居跡の位置はN 16グリッドである。遺構検出面は、L I直下のL IV上面である。

遺構検出状況は、地山とした褐色のL IV面に対して、方形に広がる暗褐色土面が明瞭に認められた。N 16グリッド付近は農地整備による土地変更が著しく、5号住居跡も削平を受けていた。5号住居跡と重複する遺構はない。5号住居跡と2号・3号住居跡は近接し、各住居跡間の最短距離

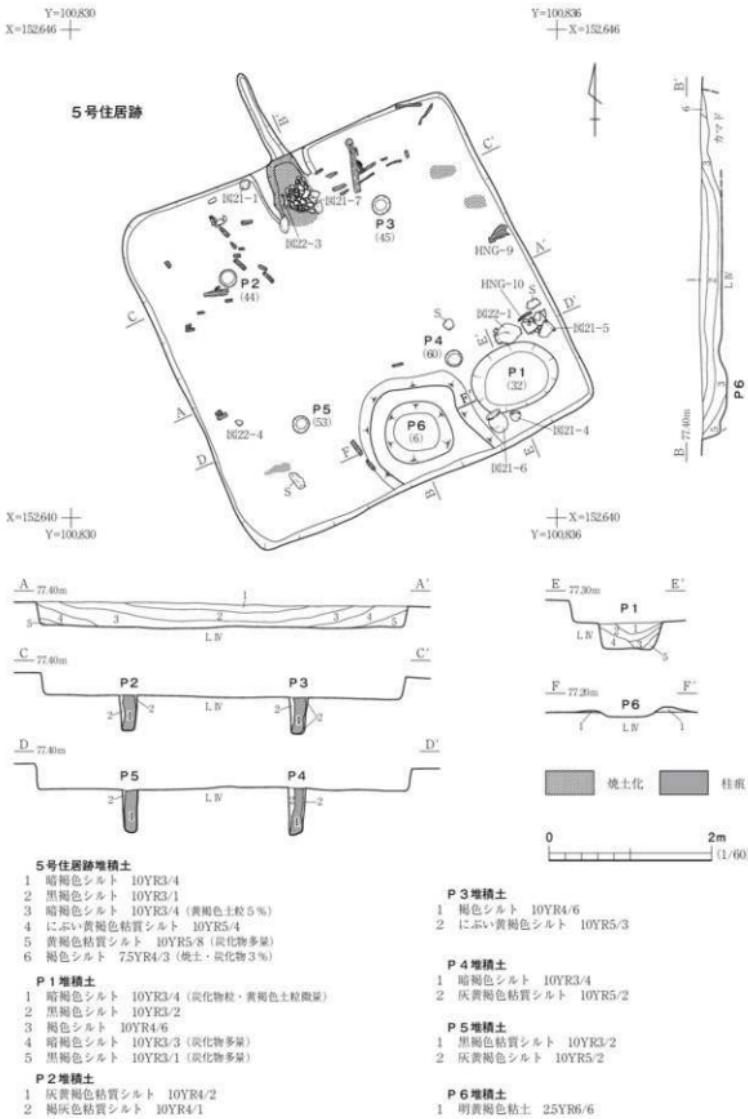


図19 5号住居跡 (1)

はいずれも約5mである。なお、5号住居跡の西辺延長線と3号住居跡の東辺が概ね重なる。

遺構内堆積土は6層に分けた。 ℓ 1～3は暗褐色又は黒褐色の腐植質土壌で、住居跡の中央から四状に堆積している。 ℓ 4～6はローム質土壌で、その分布は竪穴壁際に限られている。 ℓ 1～6の堆積状況はいわゆるレンズ状堆積であり、5号住居跡は廃絶後、自然埋没したと考えられる。

5号住居跡の平面形は、正方形に近い。上端の平面規模は、長軸長4.55m×短軸長4.37mを測る。カマドを通過する中軸線の方向はN 26°Wである。竪穴壁の立ち上がり角度は75°前後である。遺構検出面から床面までの深さは、最大で約30cmを測る。床面は全体的には水平で、地山を直接利用している。床面全体を観察したが、強い踏み締まりを確認することはできなかった。

床面から炭化物と焼土を確認し、5号住居跡は焼失したものと推測される。炭化物は、柱状・棒状が主体である。スサ状の炭化物や焼土塊等は確認できなかった。炭化物の分布は竪穴壁際に集中しており、傾向として炭化物の長軸方向は、近接する竪穴壁に対し概ね直角又は平行である。カマド燃焼部右袖の東側で、炭化物がほぼ直交した状態で検出された。各炭化物の遺存状態は悪く、芯側が土化したものがほとんどである。東壁沿いで採取した炭化物(HNG-9・10)の樹種同定を実施したところ、いずれもヒノキとの結果を得た(付編1参照)。なお、炭化物の長軸を延長した竪穴壁際付近を観察したが、関連するような窪み等は確認できなかった。

北壁のはば中央で、造りつけのカマドを検出した。カマドの遺存状態は比較的悪く、後世の搅乱を受けていた。カマド関連の堆積土は12層に分けた。 ℓ 1・ ℓ 2は、カマドの燃焼部両袖に使われた黄色系粘土である。 ℓ 3～10は燃焼部内の堆積土で、土質は粘土、又は粘質土である。 ℓ 8は下面が赤褐色に熱変硬化しており、燃焼部天井の崩落土と考えられる。 ℓ 3～10の状況からカマドは故意に破壊された可能性があるが、農地整備等による削平が著しい箇所でもあることから判断できなかった。 ℓ 11・ ℓ 12は、削平によりわずかに遺存していた煙道内の堆積土である。

燃焼部の規模は、両袖の遺存範囲から長軸長85cm×短軸長75cmである。火床面の範囲は、長軸長83cm×短軸長34cmである。燃焼部両袖の先端には、花崗岩製の袖石が埋め込まれている。火床面は、全体的に床面とはば同一標高である。火床面・奥壁・袖内面は、熱により暗赤褐色～明赤褐色に硬化していた。奥壁は、火床面から約48°の角度で立ち上がる。カマドの煙道は、奥壁上端から約7°の傾斜で北に延びている。煙道の規模は、長軸長113cm×短軸長17cmである。

床面からP 1～6の穴を検出した。P 1は1号住居跡の南東角に位置し、その平面形は梢円形を呈する。P 1内の堆積土は5層に分けた。最下層の ℓ 4・ ℓ 5内には多量の炭化物が含まれており、このことからP 1は5号住居跡の火災後、しばらくは開口していたものと推測される。P 1の上端規模は長軸長110cm×短軸長78cmである。床面から底面までの深さは32cmである。P 1の周囲から完形の甕・瓶等が出土していることから、P 1は貯蔵穴であった可能性がある。P 2～5は、対角線に近い位置関係から主柱穴と推測される。P 2～5内堆積土は、いずれも2層に分け、 ℓ 1を柱痕と判断した。 ℓ 1の幅から柱の直径は15cm程度であった可能性がある。P 2～5の規模は、上端の直径が20～24cm、床面から底面までの深さが44～60cmである。P 2～5の各心々距

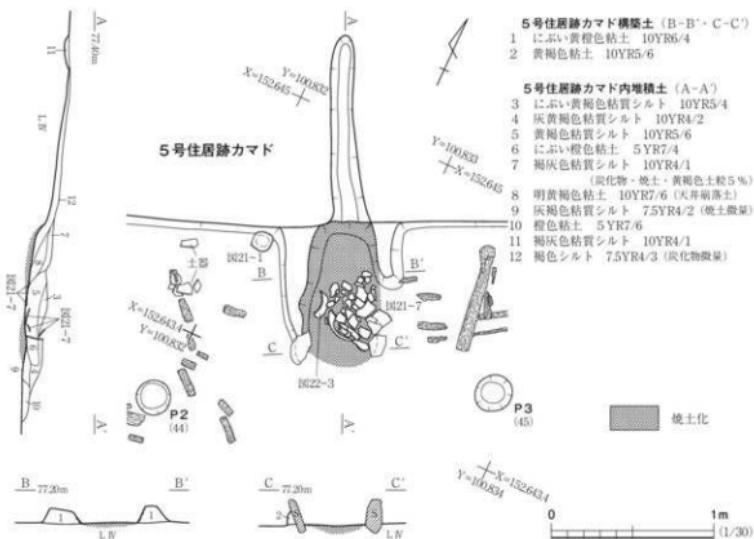


図20 5号住居跡(2)

離は、いずれも約2.1mと均等である。P 6は、カマドと対面する南壁のほぼ中央に位置する浅い穴で、その縁を明黄褐色粘土の盛土で土手状に固めている。P 6内には遺構内堆積土ℓ3・ℓ5が堆積しており、廃絶時まで窓でいたものと推測される。P 6周辺の盛土は硬化していたが、P 6の底面は特に強く踏み締めたような感じではなかった。また、P 6の底面から小穴等は確認できなかった。P 6の上端規模は、長軸長82cm×短軸長75cmである。床面から底面までの深さは6cmである。土手状の盛土は、幅が30cm前後、床面からの高さが5cm前後である。

遺物 (図21・22、写真31~33)

5号住居跡から土師器77点、石製品1点が出土した。土師器の器種は、杯・鉢・壺・瓶がある。土師器の出土地点は、カマド及びP 1周辺が主である。石器は磨石である。

杯(図21-1~3) 1・2が丸底、3が平底である。遺存率は1・3が85%以上、2が約70%である。表面の色調は、1がにぶい橙色、2・3が灰褐色である。1の器形は、内湾気味の体部から口縁部が直線的に開く。口縁部は肥厚している。器面は熱を受けて劣化が著しいが、内面にヘラミガキが認められる。2はP 1のℓ4から炭化物に混じて出土したもので、口縁部下端に内外とも緩い稜を形成している。器面調整は、外側面にヘラミガキが施されている。3はカマド内で出土したもので、1と同様に熱を受けている。底部は平底で、外側に木葉痕が認められる。口縁部はわずかに内傾し、外側の口縁部と体部の境に緩い稜が形成されている。

鉢(図21-4) ほぼ完形品で、P 1の南西側で出土した。器形は、内湾気味の胴部から口縁部が

第1編 日南郷遺跡(2次調査)

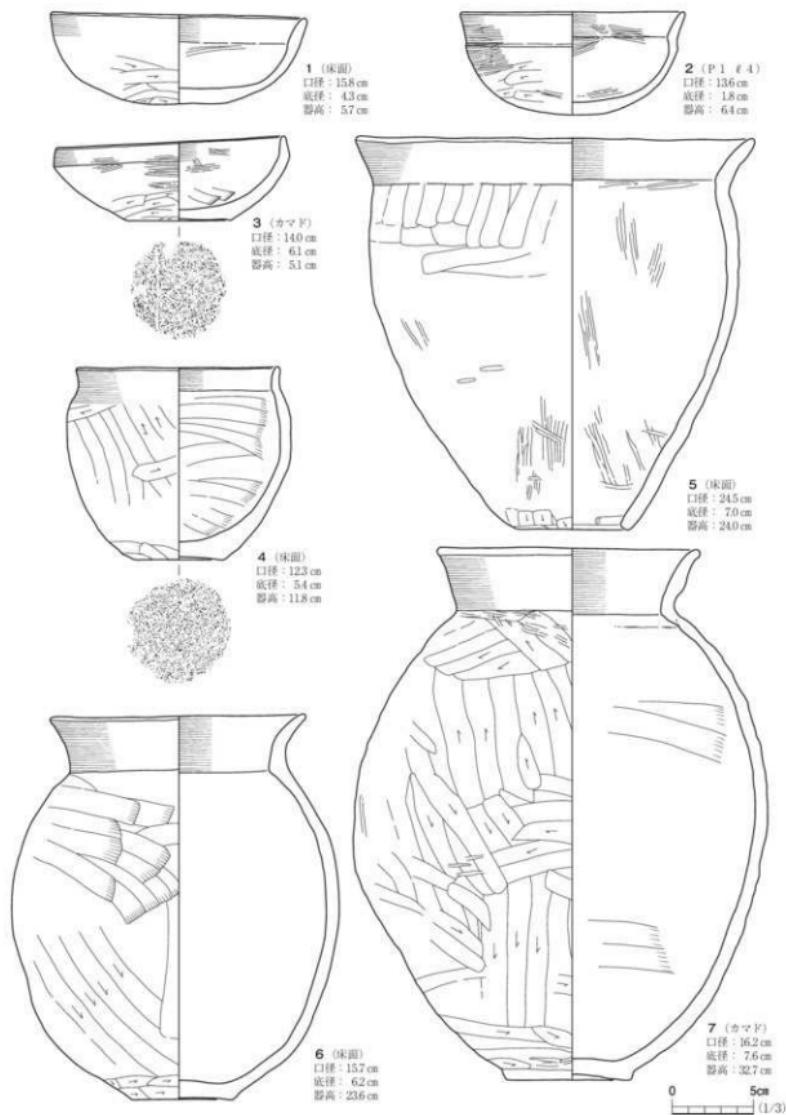


図21 5号住居跡出土遺物 (1)

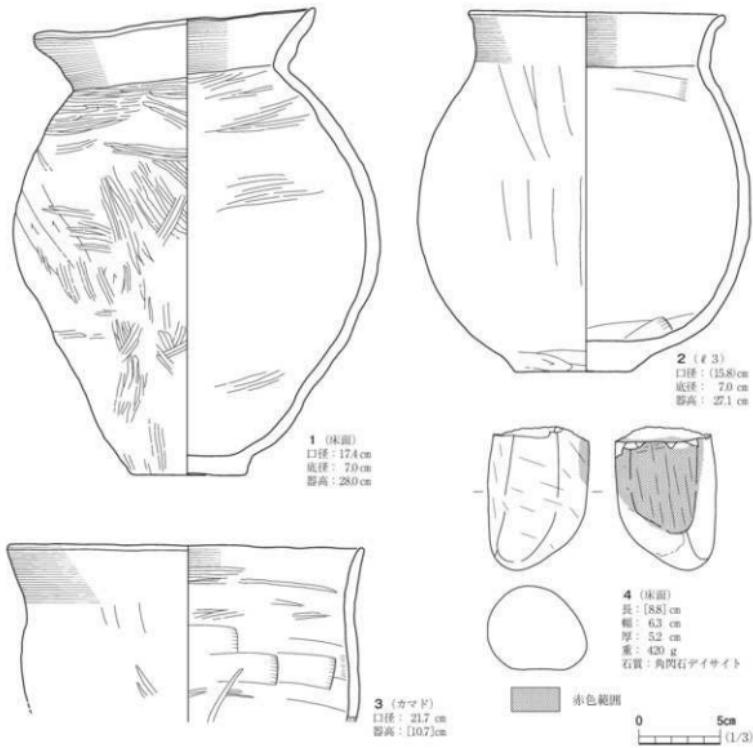


図22 5号住居跡出土遺物（2）

短く直立する。底部外面にヘラケズリが施されているが、木葉痕がわずかに残っている。胴部の調整は、外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。

甕(図21-6・7) 6は完形品で、P 1の南西側で図21-4の西隣で出土した。器形は、胴部が球形に近く、広めの頭部から口縁部が外反する。頭部内面の稜は顕著である。7は、カマド火床面上に細かく潰れた状態で発見されたが、全体の約95%まで復元することができた。器形はやや胴長で、窄まった頭部から口縁部が外傾する。口唇部は、肥厚気味である。底部は、ケズリにより上げ底状となっている。胴部外面の調整は、ヘラケズリが主体である。

甕(図22-1・2) 1は完形品に近く、P 1の北側で出土した。やや胴長の器形で、ゆがみが比較的大きい。胴部の内外面にヘラミガキが施されている。2はℓ 3から出土した甕の破片資料で、全体の約40%が遺存している。器厚は比較的薄く、口縁部が直立気味に開いている。

甕(図21-5、図22-3) 図21-5は、P 1の北東側で出土した無底式の甕である。接合によ

りほぼ完形品となったが、その出土状況において口縁部の向きが上・下で反転していたことから、故意に破壊された可能性もある。器形は、胴部上方が膨らみ、頸部でわずかに窄まつたあと口縁部が外反する。調整は、外面にヘラミガキが施されている。図22-3はカマド火床面で出土した土器であるが、下半部を欠損している。広口で、頸部の窄まりも弱いことから瓶の可能性がある。

石製品(図22-4) 西壁に近い床面から出土した磨石で、片面が薄赤に変色している(付編2参照)。出土状況は、変色面側が上に向いていた。

まとめ

5号住居跡は、北壁にカマド、南壁角に貯蔵穴、南壁中央に馬蹄形盛土が付設されている。主柱は4本で、方形床面のほぼ対角線上に配置し、その柱間は均等である。床面は、地山を直接利用している。床面に炭化物等が散布していたことから、本住居跡は焼失したものと考えられる。

5号住居跡の時期は、出土土器の特徴から古墳時代中期後半～後期前葉と考えられる。(香川)

第4節 溝跡

今回の調査区において、1号・2号溝跡を検出した。いずれも、令和元年度の試掘・確認調査で発見された遺構である。1号溝跡は東西方向に、2号溝跡は南北方向に延びている。

1号溝跡 SD 01

遺構(図23、写真21・23)

1号溝跡は、調査区中央部のK 16グリッドから同西端部のG 17グリッドまで直線的に延びている。遺構検出面はL IV上面である。1号住居跡と重複するが、1号溝跡の方が新しい。H 16グリッドで、現代のものと判断した溝跡(搅乱)によって1号溝跡の一部が破壊されている。

遺構内堆積土は黒褐色の ℓ 1が主体であるが、東部では底面上に砂礫の ℓ 2が薄く堆積していた。 ℓ 1は、混合土等がなく自然堆積土と判断した。また、 ℓ 2も自然の水成流入土と判断した。

1号溝跡の断面形は舟底状を呈する。遺構検出面から底面までの深さは、最大で32cmを測る。1号溝跡の上端幅は最大で125cm、底面幅は最大で60cmを測る。調査区内における1号溝跡の全長は約425mで、さらに調査区を越えて西に延びていると考えられる。

まとめ

1号溝跡の性格については、底面上に堆積していた ℓ 2から用水路等であった可能性がある。1号溝跡の時期については、共伴遺物等もなく不明である。(香川)

2号溝跡 SD 02

遺構(図23、写真22・24)

2号溝跡の位置は、調査区中央部のL 16・L 17グリッドを中心とする地点である。遺構検出面

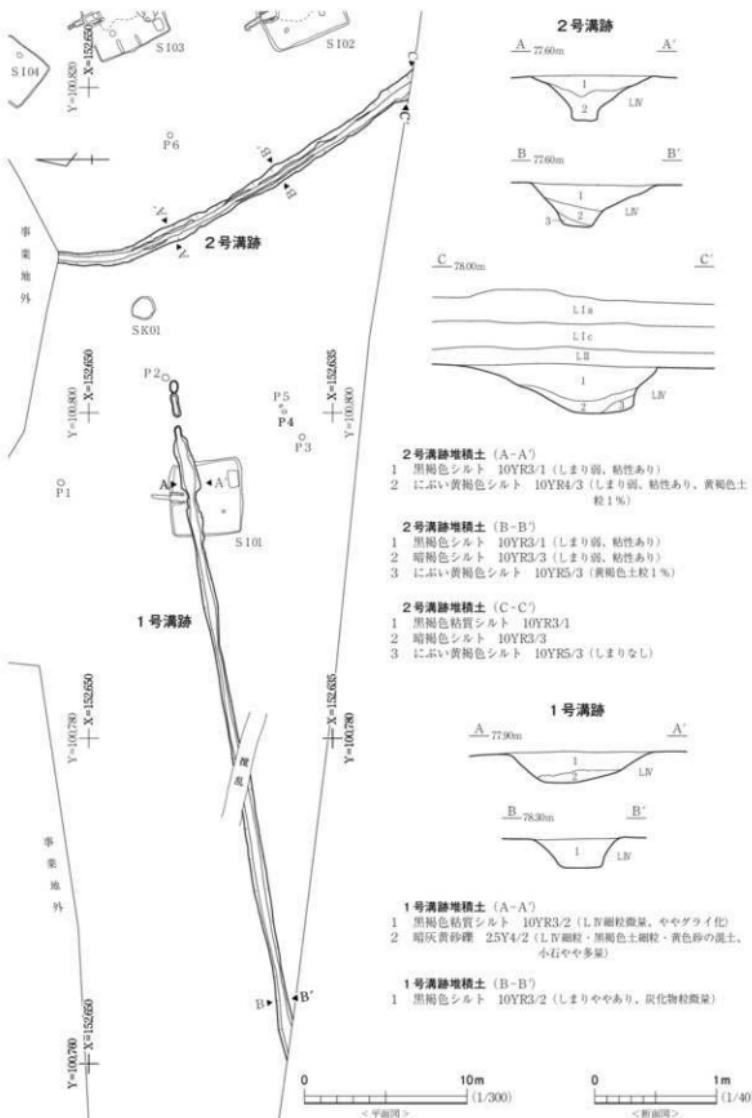


図23 1号・2号溝跡

はL IV上面である。重複遺構はない。2号溝跡の東約6mの地点に2号住居跡がある。

遺構内堆積土は、地点により2層又は3層に分けた。最上層のℓ 1は、各地点とも黒褐色シルト層で共通している。各堆積土については、いずれも混合土等がなく自然堆積土と判断した。なお、C-C'の断面から、2号溝跡の築造時期はL II形成以前と考えられる。

2号溝跡の断面形はY字形を呈し、上端幅に対して底面幅が非常に狭い。2号溝跡の上端幅は100cm前後、底面幅は20~25cmである。遺構検出面から底面までの深さは40cm前後である。

2号溝跡の平面形は、非常に緩やかな弧状を呈する。2号溝跡の北側は比高約3mの崖になっており、2号溝跡の北限である。2号溝跡の全長は、調査区内で25mを測る。2号溝跡の長軸方向は約N 26°Wで、近接する2号・3号住居跡と概ね平行している。出土遺物はなかった。

まとめ

2号溝跡は、2号・3号住居跡との位置関係から古墳集落に関連した溝跡の可能性もある。しかし、出土遺物が確認できなかったことから、2号溝跡の時期については不明である。(香川)

第5節 その他の遺構・遺物

本節では、土坑・小穴の各遺構と弥生土器について報告する。弥生土器は、古墳時代以降の遺構内堆積土から出土したものが大半である。なお、後世の削平によって調査区内の旧表土がほとんど失われていたこともあり、2次調査区において遺構外から遺物はほとんど出土していない。

1号土坑 SK 01

遺構 (図24、写真25・26)

1号土坑の位置は、調査区中央部のK 16グリッドである。遺構検出面はL IV上面である。重複遺構はない。1号土坑の東約3m地点に2号溝跡がある。

遺構内堆積土は5層に分けた。ℓ 1~5は、いずれも黄褐色土が混じっていた。特に、底面上に

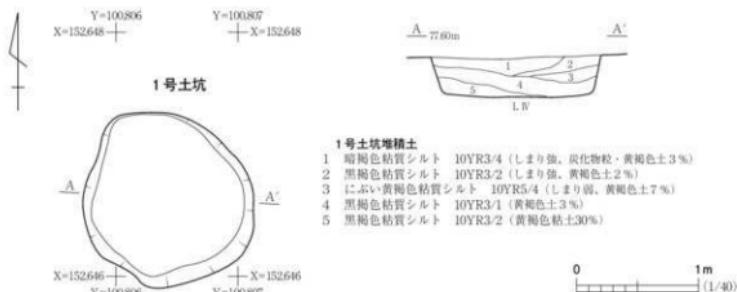


図24 1号土坑

堆積する ℓ 5は、多量の黃褐色土が含まれていた。これらのことから、 ℓ 1～5は人為堆積土の可能性が高く、1号土坑は埋め戻されたものと考えられる。

1号土坑の壁は、ほぼ水平の底面から70°以上の角度で立ち上がっている。遺構検出面から床面までの深さは33cmである。1号土坑の平面形は不整円形で、南北方向がわずかに長い。1号土坑の上端規模は、長軸長144cm×短軸長140cmである。なお、1号土坑から遺物は出土しなかった。

1号土坑は人為的に埋め戻されたと考えられる遺構であるが、その性格を明らかにすることはできなかった。また、1号土坑の時期についても不明である。
(香川)

小穴 P 1～6

遺構(図25)

調査区において計6個の小穴P 1～6を検出した。P 1～5は、1号住居跡の中心から半径9m内に位置している。P 6は、3号住居跡の西約5mの地点に位置している。遺構検出面はLIV上面

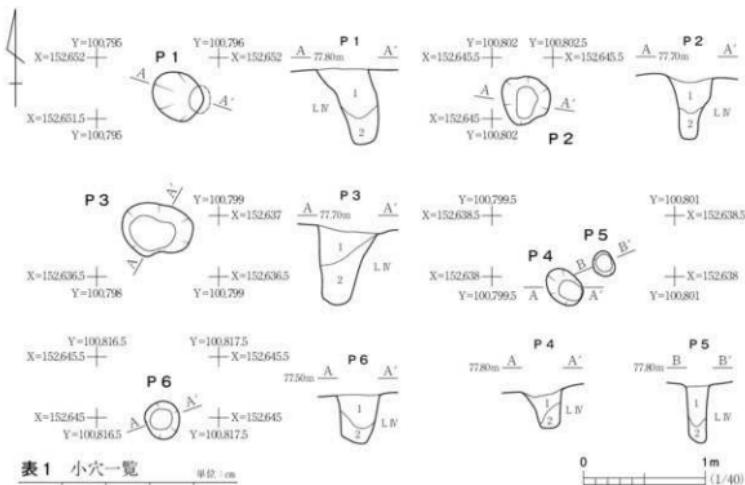


表1 小穴一覧

No.	位 置	長 軸	短 軸	深 さ
P 1	J 15	44	37	62
P 2	K 16	40	40	51
P 3	J 17	54	45	65
P 4	K 17	35	25	32
P 5	K 17	22	18	49
P 6	L 16	32	28	40

P 1堆積土
1 黒褐色シルト 7.5YR3/1 (小礫少量)
2 棕褐色シルト 7.5YR4/3

P 2堆積土
1 黑褐色シルト 7.5YR2/2 (炭化物少量)
2 棕褐色シルト 7.5YR4/4

P 3堆積土
1 黑褐色シルト 7.5YR3/2
2 棕褐色シルト 7.5YR4/4

P 4堆積土
1 棕灰色シルト 7.5YR4/1
2 棕褐色シルト 7.5YR4/3

P 5堆積土
1 棕灰色シルト 7.5YR4/1
2 棕褐色シルト 7.5YR3/4

P 6堆積土
1 黑褐色シルト 7.5YR3/1
2 棕褐色シルト 7.5YR4/3

図25 小穴

である。

P 1～6の堆積土は、各小穴とも2層に分けた。堆積土の色調は、ℓ 1が黒褐色又は褐灰色、ℓ 2がいずれも褐色である。各堆積土に混入物等は認められず、いずれも自然堆積土と判断した。

P 1～6上端の平面形は、不整な円形又は楕円形である。P 1を除いた各小穴は、ほぼ垂直に掘り込まれている。P 1は、垂線に対して約20°傾いている。底面は、すべて皿状に窪んでいる。P 1～6の各計測値については、表1のとおりである。

P 1～6の形状から柱穴等の可能性があるが、各堆積土から柱痕を確認することはできなかつた。また、P 1～6の時期についても不明である。
(香川)

弥生土器

遺物 (図26、写真34)

1号・2号住居跡、1号溝跡の各遺構内堆積土から弥生土器が出土した。1号住居跡での出土量が最も多いため、同住居跡及び周辺部で弥生時代の遺構を確認することはできなかつた。今回出土した弥生土器は、原位置を離れて混入したものと考えられる。

図26-1～6に示した弥生土器の時期は、文様等の特徴からいずれも弥生時代後期と考えられる。1は外反口縁部の破片で、櫛葉状工具による波状文が施されている。2・3は口唇部に丸棒状工具で刺突列が施されている。地文はいずれも撫糸文である。4・7は頸部破片で、縦方向の条線区画が認められる。7・11は、竹管状工具による連続刺突文が施されている。5・6・8～10は、地文が撫糸文の胴部破片である。
(香川)

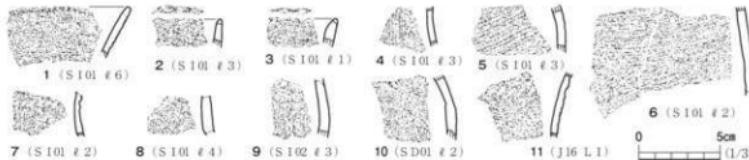


図26 弥生土器

第3章 総括

第1節 遺構について

本節では、今回の発掘調査で検出した5軒の竪穴住居跡について、補足・整理を行う。各住居跡は、共伴遺物から古墳時代中期後半～後期前葉の時期に収まると考えられる。特記事項としては、調査区東部の2号・3号・5号住居跡で検出された馬蹄形盛土の存在があげられる。

なお、調査区東部は農地整備による削平が顕著であったため確実ではないが、同東部の2～5号住居跡から出土した土師器の遺構間接合の関係から、2号住居跡よりも3号住居跡の方が新しく、また、5号住居跡よりも4号住居跡の方が新しい可能性がある。

1. 平面形・規模について

竪穴掘形の平面形は、正方形又は長方形である。1号・5号住居跡については、長軸長と短軸長の差が小さく正方形としたが、ともに南壁が北壁よりも約30cm長く、厳密には台形に近い。

住居跡の規模は、4号住居跡を除いてほぼ同一である。2号・3号・5号住居跡は、ユニット的なまとまりを形成しているように見えるが、住居規模に格差が認められない。

2. 床面・主柱について

1～5号住居跡は、いずれも地山を直接床面としている。2号・3号住居跡では、カマドから馬蹄形盛土方向に広がる床面の踏み締まりが確認された。しかし、1号・5号住居跡では、床面に窪みや強く踏み締まったような箇所は認められなかった。

4号住居跡を除く各住居跡の主柱配置は、いずれも床面中央を正方形に開く4本主柱である。主柱間の心々距離は2.1m前後である。1号・5号住居跡の主柱穴から推測される柱の直径は17cm以下である。なお、1～5号住居跡から壁溝は確認できなかった。

3. カマドについて

4軒の住居跡で確認されたカマドは、いずれも北壁中央に付設されている。1号・2号住居跡カマドの土器出土状況から、カマド掛口には、胴部の膨らみがやや残る2個体の土師器甕が横並びで据えられていたと考えられる。なお、4号住居跡については、床面上に焼土・石の散布が認められ

表2 竪穴住居跡一覧

遺構名	竪穴掘形		主軸線方位	主柱間心々距離(m)	カマド位置	窓疏穴位置	馬蹄形盛土位置	備考
	平面形	規模(m)						
1号住居跡	正方形	4.55×4.50	N 6° W	約20	北壁中央	南壁東	無	南壁中央に梯子穴
2号住居跡	長方形	5.11×4.62	N23° W	約21	北壁中央	南壁中央	南壁中央	
3号住居跡	長方形	5.13×4.60	N28° W	約23	北壁中央	南壁西	南壁中央	焼失住居跡
4号住居跡	正方形	3.53×3.36	N48° W	不明	不明	無	無	
5号住居跡	正方形	4.55×4.37	N26° W	約21	北壁中央	南壁東	南壁中央	焼失住居跡

たが、カマドの有無は確認できなかった。

4. 貯藏穴・馬蹄形盛土

カマドが確認された4軒の住居跡は、いずれもカマドと対面する南壁側に貯藏穴を有する。2号住居跡の貯藏穴は南壁中央に位置し、周間に馬蹄形盛土を伴う。この貯藏穴は、竪穴壁のなりに沿って掘り込まれており、テラス面をもたないタイプである。一方、1号・3号・5号住居跡の貯藏穴は、いずれも無堤であり、南壁中央の東側又は西側に位置している。

馬蹄形盛土は、2号住居跡のほか、3号・5号住居跡で確認された。いずれも南壁中央に位置する。馬蹄形盛土については、梯子穴とされる「5番目のピット」とともに出入口施設の可能性が指摘されている(高橋1983)。馬蹄形盛土が確認できなかった1号住居跡は、南壁中央の小さなP6が梯子穴に該当すると考えられる。よって、1~3号・5号住居跡の出入口は、南壁中央に位置していた可能性がある。また、2号・3号住居跡の床面の踏み締まり範囲は、カマド→出入口の動線方向を示していると思われる。なお、5号住居跡の馬蹄形盛土は非常に固く締まっていたが、盛土に開まれた浅い窪み部分は特に踏み締まったような感じではなかった。5号住居跡と同様の事例は、白河市の佐平林遺跡(Ⅷ区)7号住居跡の馬蹄形施設でも確認できる。

佐平林遺跡(Ⅷ区)では、7号住居跡のほか、住居規模がやや小さい21号住居跡で馬蹄形施設が確認されている。7号住居跡は、北カマドの東側に有堤の貯藏穴があり、南壁中央に周堤の内側が軟らかい馬蹄形施設をもつ。一方、21号住居跡は、いわゆる「張り出し貯藏穴」をもつ竪穴住居跡である。7号・21号住居跡の時期は、いずれも引田式後半(佐平林式期)に位置づけられ、出土土器から7号住居跡の方が先行するとされる。このことから、7号住居跡の馬蹄形施設と有堤の貯藏穴が合体し、21号住居跡の張り出し貯藏穴へと変化した可能性があるだろう。また、日南郷遺跡の2号住居跡のような貯藏穴が、張り出し貯藏穴へと変化したとしても不自然ではない。

ところで、3号・5号住居跡は、貯藏穴と馬蹄形盛土の位置関係が類似しており、また、焼失住居跡であることと共通している。あくまでも参考であるが先の遺構間接合の関係と合わせると、2号住居跡→3号・5号住居跡の変遷を想定することも可能であろう。この場合、2号住居跡では馬蹄形盛土と合体していた貯藏穴が、次期の3号・5号住居跡では馬蹄形盛土の脇に移動した形となる。白河郡矢吹町に所在する白山C遺跡の9号住居跡は、南壁中央に掘られた貯藏穴状のP8を埋

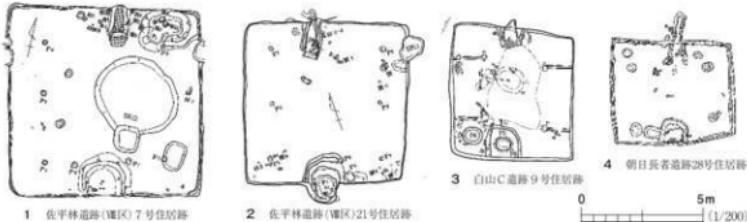


図27 馬蹄形状施設をもつ竪穴住居跡

め戻し、新たに馬蹄形盛土が巡る浅いP5につくりかえられている。P5の西側には貯蔵穴とするP6が隣接している。この9号住居跡の部分的な変化は、日南郷遺跡2号住居跡→3号・5号住居跡の変遷想定を否定しない。なお9号住居跡では、TK23型式の無蓋高壺が出土している。

日南郷遺跡が所在する浜通り地方では、いわき市の朝日長者遺跡や浪江町の鹿屋敷遺跡などで馬蹄形施設が確認されている。朝日長者遺跡の28号住居跡は、日南郷遺跡とほぼ同時期の住居跡である。鹿屋敷遺跡では、栗廻式期の住居跡に出入りと考えられる馬蹄形施設が認められる。

第2節 遺物について

5軒の堅穴住居跡から土師器328点、鉄製品1点、石製品8点が出土した。須恵器は、遺構外も含めて1点も出土していない。

各住居跡における土師器の主な出土地点は、カマドと貯蔵穴の周辺部に分けられる。図28の7-11、11-8、21-7は、出土状況からカマドで使用された甕である。8-2、11-5、21-5の甕は、いずれもカマドとは反対の貯蔵穴付近で出土している。7-3、11-2、16-4は、いずれも各住居跡の北西側主柱穴の東隣で出土したものである。

他に特徴的な出土状況としては、2号住居跡の堆積土から出土した破片と接合した3号住居跡の16-1、5号住居跡のカマド検出面で出土した破片と接合した4号住居跡の18-2がある。この遺構間接合の関係から、前節では住居跡の新旧関係を想定した。

しかし、1~5号住居跡から出土した杯・甕の形態は、いずれも5世紀後半の系譜をもつものであり、出土土師器から住居跡間の時間差を見出すことは困難である。

杯は、丸底で口縁部が外反するもの(7-1・2、11-1、18-1、21-1・2)、半球形で口縁部が直線的に立ち上がるもの(7-3、11-2・3、16-1)が主体である。他

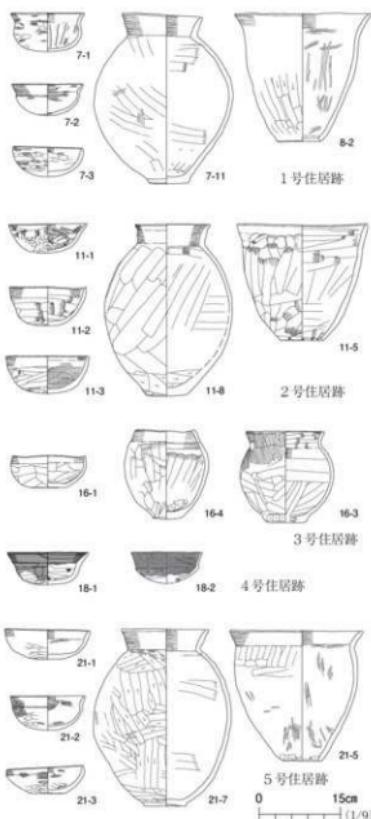


図28 日南郷遺跡出土土師器

に平底で口縁部と体部の境に稜を形成する21-3や、洗練感のある須恵器杯蓋模倣の18-2がある。半球形の杯については、浜通りでは6世紀前葉頃まで残るとされる（菅原2007）。

7-11、11-8、21-7の大型甕は、胴部中央に最大径があり、頸部が比較的窄まる器形である。口縁部の立ち上がりは直立に近い。胴部外面の調整は、いざれもヘラケズリである。

第3節 ま と め

阿武隈高地東縁の富岡川中流域で確認されている古墳時代の遺跡は、現在のところ日南郷遺跡のみである。富岡町では、富岡川下流～河口の谷底平野が開けた地域に、古墳時代の遺跡が集中している。このことから、日南郷遺跡が立地する富岡川中流域の一帯は、古墳時代においては開発・経営等の中心部から離れた外縁の地であったと考えられる。

今回、調査を実施した古墳時代の集落跡の特徴は、馬蹄形盛土（施設）をもつ堅穴住居跡が確認されたことにある。2号住居跡のような馬蹄形施設は、形態的な観点から張り出し貯蔵穴との関連性が考えられている。また、張り出し貯蔵穴をもつ堅穴住居跡の性格については、「新たな地域の開発を主導し、その中核となった集団の居住施設」の可能性が指摘されている（鶴間2011・2015）。この張り出し貯蔵穴に関する卓見に従えば、阿武隈高地東縁の地に忽然と現れた感のある日南郷遺跡の小さな古墳集落についても、新地開発に関連していたと推測することが可能である。

日南郷遺跡の馬蹄形施設をもつ2号・3号・5号住居跡の居住者は、堅穴住居の主軸線を描える関係であり、外縁の土地開発を共同の目的としていた可能性が考えられる。1号住居跡の居住者についても、同様の目的であったと考えられる。集落跡の時期は、出土土師器から古墳時代中期後半～後期前葉の間に位置づけられるが、佐平林遺跡や白山C遺跡等の事例から、引田・佐平林式期を中心とする時期の可能性が高いと考えられる。

（香川）

引用・参考文献

- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史第14輯』東北史学会
- 菅原祥夫 2007 「東北・北海道における6～8世紀の土器変遷と地域の相互関係」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
- 高橋一夫 1983 「集落分析の一視点－入口と集落の道－」『埼玉考古第21号』埼玉考古学会
- 鶴間正昭 2011 「蔵穴住居にみられる張り出し貯蔵穴」『東京考古29』東京考古談話会
- 鶴間正昭 2015 「張り出し貯蔵穴をもつ堅穴建物」『季刊考古学第131号』雄山閣
- 戸田有二・柳沼賢治 1988 「六天石道跡」鹿島町教育委員会（現南相馬市教育委員会）
- 東国土器研究会 1989 「東国研究第2号」
- いわき市教育委員会 1981 「朝日長者遺跡 夕日長者遺跡」
- 天栄村教育委員会 1981 「舞台－福島県天栄村における古墳時代集落の調査－」
- 福島県教育委員会 1980 「佐平林遺跡（霞区）」「母畠地区遺跡発掘調査報告V」
- 福島県教育委員会 1999 「白山C遺跡」「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告3」
- 福島県教育委員会 2022 「鹿屋敷遺跡」「駒道広野小高線関連遺跡発掘調査報告3」
- シンポジウム資料 1989 「福島県に於ける古代土器の諸問題－特に5～7世紀を中心として－」鹿島町教育委員会（現南相馬市教育委員会）

第2編 高津戸館跡

遺跡記号 TO-TKD

所在地 福島県双葉郡富岡町大字上手岡字高津戸

時代・種類 中世-城館跡

調査期間 令和3年7月15日~11月17日

調査面積 1,300m²

調査員 香川愼一・佐藤 啓・笠原 興

第1章 調査概要

第1節 遺跡の位置と地形

高津戸館跡は、双葉郡富岡町大字上手園字高津戸地内に所在する。JR常磐線夜ノ森駅を起点とすると、その北西約1.3kmの地点に位置する。高津戸館跡の範囲・規模は、東西長700m×南北長500m・220,150m²である。高津戸館跡が所在する丘陵は、通称「館山」と呼ばれており、周辺にも館山又は館山の名が冠せられた施設等がある。また、高津戸館跡の西側には、「家老沢」と呼ばれる地名が確認できる。

高津戸館跡の南約150mの地点には、同館跡と平行するように小野富岡線が通過している。明



図1 調査箇所

治18年の地籍図には、後的小野富岡線につながると思われるような道が確認できる。このことから、小野富岡線の基となった道が、明治時代にはすでに存在していた可能性がある。

高津戸館跡の地形区は、富岡丘陵・夜の森台地に属する。館本体が立地する富岡丘陵は、阿武隈高地東縁から連続する定高性丘陵である。しかし、高津戸館跡の西側に急峻な谷が刻まれており、館本体の地形は独立丘陵状の高台となっている。現在、同西側の谷は、家老溜池と高津戸館跡北側の館山ダムを繋ぐ流路になっている。

館本体の丘陵頂部には、東西長約57m×南北長約36m、標高約118mの楕円状平場と、その南東側で東西長約380m×南北長約60~100m、標高約92~108mの横長平場が認められる。楕円状平場は、眺望が良好であることから物見的な可能性が指摘されており(福島県教育委員会1988『福島県の中世城館跡』)、現在は館山稻荷神社が造営されている。

横長平場の東部では、上位段丘面の残存が認められる。横長平場の中央部では、南北に走る土塁・空堀と噴い違い状の虎口が確認できる。

富岡丘陵の南側には、中位砂礫段丘の夜の森台地が広がる。高津戸館跡の裾部が該当し、遺跡南西部では概ね東方向に延びる全長約110mの土塁・堀が確認できる。土塁・堀付近の標高は約75m前後で、現況は山林である。

(香川)

第2節 調査経過

今回の調査区を含む高津戸館跡の南西部は、土塁・堀の存在が指摘されていたが、福島県埋蔵文化財包蔵地の範囲からは外れていた箇所である。しかし、同南西部が小野富岡線の整備事業予定地と重なったことから、福島県教育委員会により、平成30年11月及び令和2年1月に試掘・確認調査が行われた。調査の結果、高津戸館跡の範囲が拡大することが確認され、同包蔵地台帳の変更増補が行われた。また、保存協議の結果、高津戸館跡南西部の1,300m²を対象として、令和3年度に公益財團法人福島県文化振興財团が発掘調査を行うことになった。

調査区が杉・檜等の山林であったため、その樹木伐採・搬出作業の条件整備が令和3年3月から開始された。条件整備の終了見込みが5月下旬であったことから、日南郷遺跡の調査を先行し、同I期調査区の引渡し後に高津戸館跡の調査を行うことが事前協議で決まっていた。

7月13日、日南郷遺跡I期調査区の引渡しが行われた。引渡し終了後、高津戸館跡の調査で使用する大型重機を小野富岡線側から搬入するため、同I期調査区の東端部に仮設の作業用道路を設置する作業に入った。

7月15日、高津戸館跡の調査を開始した。まず、重機による抜根作業及び表土等掘削・土砂運搬作業に着手した。抜根作業は8月3日に終了した。表土等掘削・土砂運搬作業は、土塁・堀を境として2回に分けて実施したため、その終了日は9月30日である。

7月26日、遺構検出・掘削・土砂運搬作業を開始した。同作業は、調査区北東部から着手し

た。調査区北東部の南側に平場地形が連続していることから、早急に同北東部の遺構検出作業を行い、調査区外へ広がる遺構の有無を確認することになっていた。しかし、調査区外へ広がる遺構は認められず、そのことを7月29日の現地協議で報告した。

8月後半から1号・2号土壘、堀の本格的な調査に着手した。8~9月の降雨量は例年と比べて非常に多く、晴天でも堀の湧水が止まらない日々が続いた。堀の掘削作業は、常に排水作業と並行して行った。9月15~17日の期間で、3号土壘の調査を行った。9月21~28日の期間で、1号溝跡の調査を行った。

10月12日から堀下部の壁検出作業を開始し、堀の形態が箱築研であることを確認した。10月20日までに検出遺構のすべてを完掘した。10月22日から空中写真撮影のための全体清掃を開始するが、風・雨に度々悩まされた。10月27日、好条件の天候の下、ドローンによる空中写真撮影を行った。10月28日・29日の期間で、1号・2号土壘、堀の各平面図の追加実測を行った。

1号・2号土壘の構築盛土の断面を観察・記録するため、11月1日から各土壘の断割り作業を開始した。1号土壘の断割り作業は、遺構に張り付く切り株のため難航したが、作業員が丁寧に木根の処理を進めた。11月16日、各土壘の断面観察・記録が終了した。11月17日、調査区内の片付けを終え、高津戸館跡の調査が完了した。

11月18日にユニットハウス、仮設トイレ等の機材搬出がすべて終了し、現場からの完全撤収となった。11月29日、相双建設事務所、県教育庁文化財課、当遺跡調査部の関係職員で調査終了状況を確認し、引渡しが行われた。

(香川)

第3節 調査方法

条件整備の樹木伐採後の切り株については、重機を用いながら慎重に抜根作業を行った。しかし、土壘・堀にかかる切り株については、抜根により遺構を損傷してしまう可能性が高いため、人力でできる範囲の処理にとどめた。なお、抜根した切り株については、十分に土を落とした上で指定された場所に移動・集積した。

表土等掘削作業は、平坦部については効率化を図るためにバックホーで、土壘についてはバックホーと人力で行った。表土等掘削土は指定された2か所の排土置場に集積し、土砂飛散・流出防止のため、こまめに排土整形・転圧を行った。

遺構検出・掘削作業は、人力で行うことを原則としたが、堀堆積土の上～中層の荒掘り作業については、小型バックホーを併用した。堀堆積土の下層の掘削作業は人力のみで行い、壁・底面の検出作業については移植ペラ・小型三角ホーを用いて行った。

高津戸館跡の調査区、遺構等の位置を正確に示すため、平面直角座標系に従って平面図等の記録を行った。X=152,800、Y=100,700の地点を基点とし、日南郷遺跡の調査区から高津戸館跡の調査区までの範囲を連続的に10m四方のグリッドで網羅した。各グリッドの名称は、基点から東方



図2 グリッド配置

向へ大文字A～小文字fまでのアルファベットを、また南方向へ1～20の算用数字を付し、その組み合わせによってA 1～f 20のように表記した。なお、高津戸館跡の調査区にかかる東西方向のグリッドは、X～eの範囲である。

調査区内に各グリッドの位置を明示するため、測量基準杭を兼ねた木杭を、測距測角儀を用いて打設した。また、調査区内に標高を示すベンチマークを設置し、水準測量用の基準点とした。

基本土層の表記は、大文字Lとローマ数字の組み合わせを基本とし、さらに細分した土層については、アルファベットの小文字を付加してL II a・L II b…のように表した。遺構内堆積土については、小文字ℓと算用数字でℓ 1・ℓ 2…のように表記した。なお、高津戸館跡の調査では、遺構の名称に略記号を使用していない。

遺構実測は、平面・断面のセットを原則とした。遺構実測図の縮尺は、遺構の規模に合わせて1/20・1/40・1/100で作図した。遺構平面図の作成は、グリッドの木杭を測点として測距測角儀で計測を行った。地形測量図は、1/200の縮尺で作図した。

写真記録は、デジタルの1眼レフカメラ・コンパクトカメラの2機種で行った。また、遺跡の立地や調査区の全景を記録するため、ドローンによる空中写真撮影を実施した。

発掘調査で得られた各種記録・出土遺物は、公益財団法人福島県文化振興財団遺跡調査部で整理作業を行った。報告書刊行後は各種台帳を作成し、閲覧可能な状態で福島県文化財センター白河館に収蔵・保管する予定である。

(香川)

第2章 調査成績

第1節 遺構の分布(図3)

今回、調査を実施した高津戸館跡の南西部は、土塁・堀などの遺構が現況で確認できる一画である。検出遺構は、土塁3条、堀1条、溝跡1条である。

検出遺構のうち、1号・2号土塁及び堀の3遺構はセット関係にあり、Z6グリッド付近を起点として南東方向へ弧状に延びている。堀の北東側が1号土塁、堀の南西側が2号土塁である。堀の北西側は家老沢と呼ばれる急崖で、天然の要害となっている。この3遺構は、b8グリッド付近で調査区を抜け、その先は南の小野富岡線と平行するように東進している。なお、調査区外の堀に土橋状の施設が認められる(図1)。

堀の両側に位置する1号・2号土塁の標高は、1号土塁の方が高く、南側の見通しがきく構造である。このことから、土塁・堀は、南方を意識しているものと考えられる。1号土塁の東側は平坦地が広がっているが、掘立柱建物跡などの遺構は確認できなかった。このことから、同平坦地は、広場的な空間であった可能性がある。

調査区南西部で3号土塁・1号溝跡を検出した。両遺構の東側に2号土塁が近接しているが、長軸線の方向が異なっている。このことから、3号土塁・1号溝跡は、1号・2号土塁及び堀とは関係していない可能性がある。

(香川)

第2節 基本土層(図4)

調査区の地形は、Y7グリッド付近から北東方向にb5グリッド付近までが谷、それ以外の箇所が平坦地である。基本土層の堆積状況は、谷と平坦地で様相が異なるが、全体としてL I～VIに分けた。なお、各層から遺物は確認できなかった。

L Iの現表土は、林地の表層を覆う暗褐色シルトである。L IIは、L Iよりも明るい褐色シルトである。1～3号土塁の築造はL II上面であり、このことからL IIを旧表土と呼称した。L IIは、調査区のはば全域で確認できる安定的な層である。

L IIIは、にぶい黄褐色の腐植に乏しい粘質シルトで、再堆積層と考えられる。L IIIの分布は、谷及びその周縁部に限られる。2号土塁北西部のL IIIについては、さらにL III a～III cに細分した(D-D')。L III a・L III cはいずれもにぶい黄褐色粘質シルトで、両層の間に暗褐色のL III bが入り込んでいる。このL III bはやがて消失し、土質が類似するL III a・L III cが合体する。L III a～III cの堆積状況から、堀北西部の築造は谷地形を利用したものと考えられる。

L IVの分布範囲はL IIIの範囲と概ね重なり、調査区北東～南西部の平坦地では認められない土層

第2編 高津戸遺跡

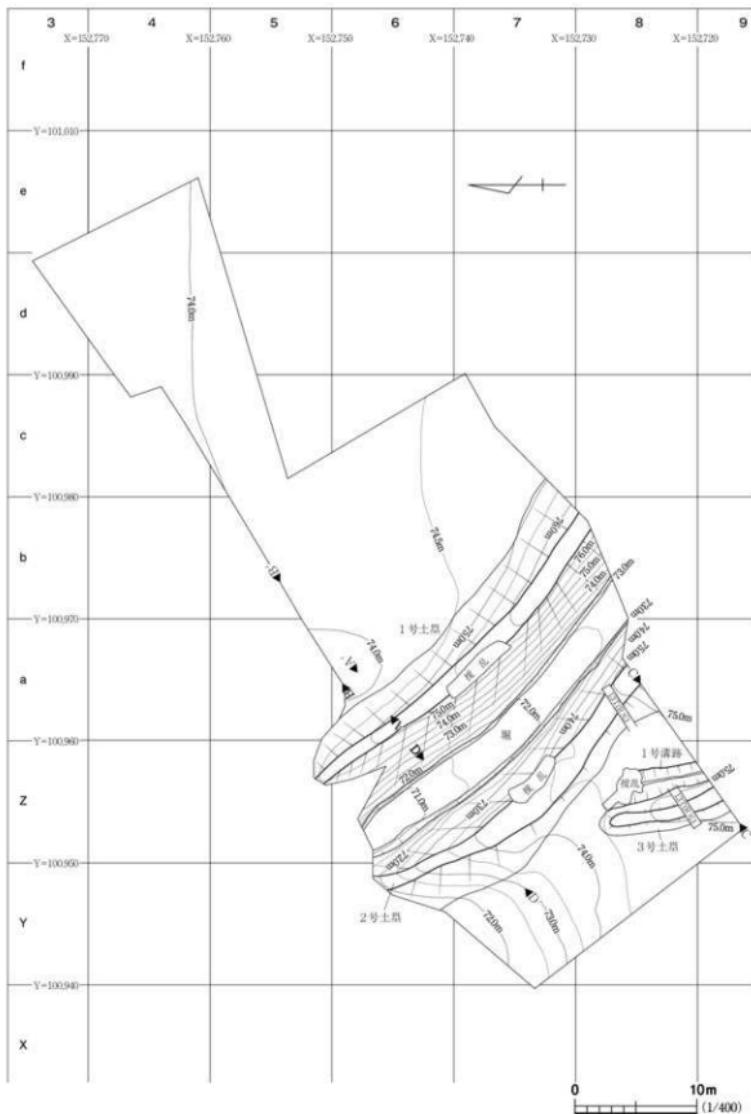


図3 遺構配置

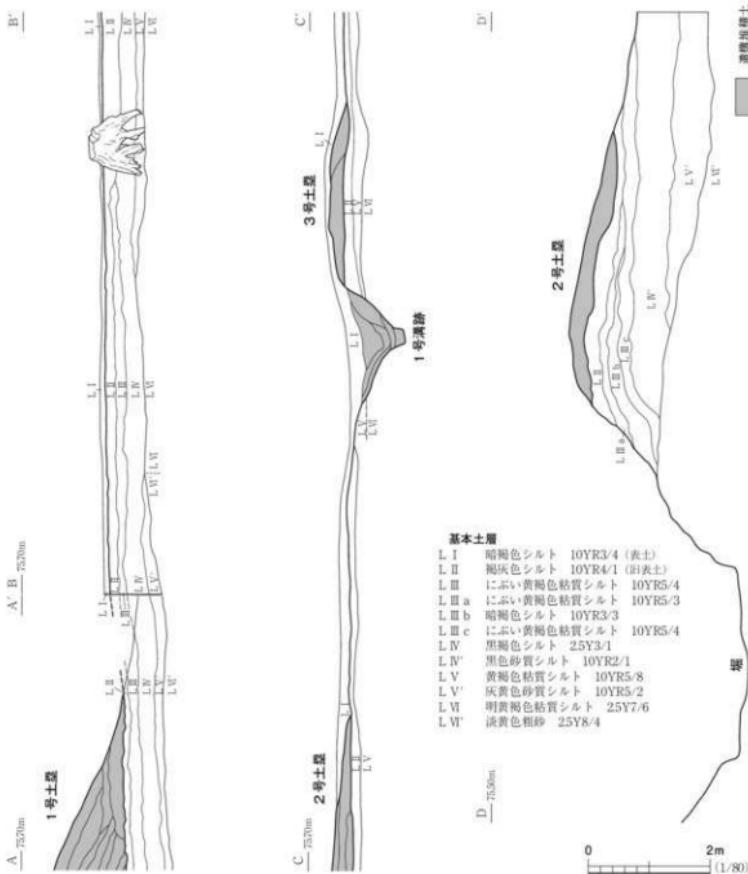


図4 基本土層

である。土質の違いからL IVとL IV'に二分した。L IVは腐植質のシルト土壤で、1号土壠北西部からb 5グリッド付近にかけて分布している。L IV'は砂質シルト土壤で、2号土壠北西部からY 7グリッド付近にかけて分布している。

L V・L V'を地山漸移層とした。いずれも腐植に乏しい土壤でL Vは平坦地に、L V'は谷に分布している。調査区北東～南西部の平坦地では、L II直下がL Vとなる。

L VI・L VI'を地山とした。L V下にL VIが、L V'下にL VI'が堆積している。L VIはローム質土壤、L VI'は谷に分布する粗砂である。

(香川)

第3節 土 墓・堀

本節では、セット関係にある1号・2号土塁・堀について報告する。これらの3遺構は、Z 6グリッド付近から南東側のb 8グリッド方向へ弧状に延びており、調査区内における長軸長は約33mである。同長軸線の方向は、およそN 42°Wである。1号・2号土塁の基底はL II上面で、L IIが築造当時の表土である。堀は、L II上面から掘り下げられたことになる。

1号土塁

遺構（図5・6、写真7～10）

1号土塁中央の上端の一部が攪乱を受け破壊されていたが、全体的な遺存状態は比較的良好である。1号土塁と重複する遺構はない。

1号土塁が立地する基底層は、地点により異なっている。土塁南東部では、L II直下が地山漸移層のL Vとなる。しかし、谷に立地する土塁中央～北西部は、L II下にL III・L IVが堆積する。L IIIはにぶい黄褐色の再堆積層、L IVは厚さ25cm以上の黒褐色シルト層である。この築造地点における基本土層の違いが土塁の盛土にも現れており、土塁中央～北西部で観察される黒～暗褐色の盛土が、南東部では全く認められない。この黒～暗褐色の盛土はL IV由来と考えられるところから、1号土塁は、堀掘削土のかき揚げによってつくられたと推測される。なお、土塁堆積土の観察は、厚さ10～15cmの表土除去後の土層断面を行った。

1号土塁南東部の堆積土は、ℓ 1～13に分けた。いずれも築造時の盛土で、堀側から斜め方向に重層している。盛土は、砂礫層・粘土層が主体である。ℓ 1～3は砂礫層で、内法の表層を形成している。法尻のℓ 3は、50mm前後の礫を多量に含む。ℓ 4～6・ℓ 9～13は、いずれもしまりが非常に強い粘土・粘質土である。ℓ 7・ℓ 8は、ℓ 4以下で堆積する粘土層のはば中間に盛土された砂礫層である。

1号土塁北西部の堆積土は、ℓ 1～13に分けた。堆積状況は、法尻のℓ 3・ℓ 8が水平堆積、それ以外は堀側から斜め方向に重層している。内法の表層は、同南東部と同様に砂礫層（ℓ 1～3・ℓ 8）が堆積する。礫を多量に含む法尻のℓ 8は、堆積状況から比較的初期に盛土された可能性がある。ℓ 5・ℓ 9～11は、黒～暗褐色のシルト・粘質シルトである。同南東部のような黄色系粘土の盛土は認められなかった。

1号土塁の下端幅は、南東部が約6.1m、北西部が約5.1mである。L II上面から1号土塁頂部までの高さは、南東部・北西部とも約1.4mである。1号土塁頂部と堀底面の比高は約3.8～4.0mである。1号土塁頂部の標高は南東端から北西端に向かって緩やかに減じ、両端の比高は約2.0mである。1号・2号土塁頂部の標高差は、1号土塁の方が約1～2m高い。1号・2号土塁頂部間の距離は約11.0～11.7mである。1号土塁の法面の傾斜は、内法が約23°、外法が約40°である。

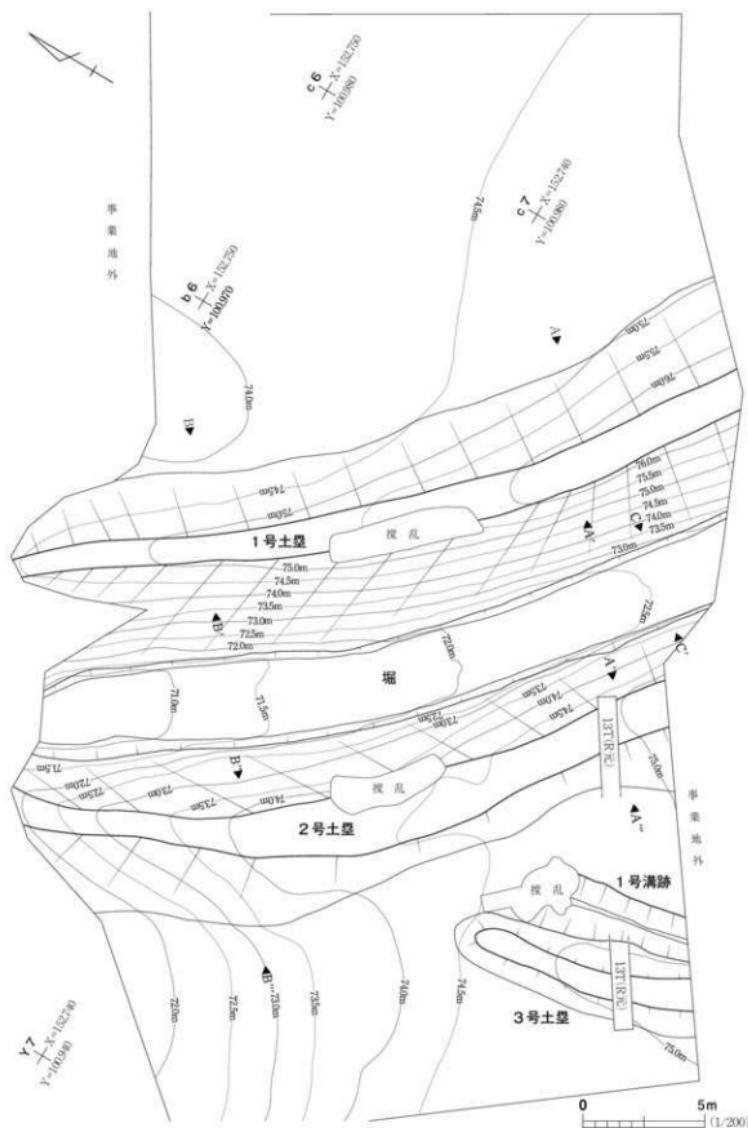
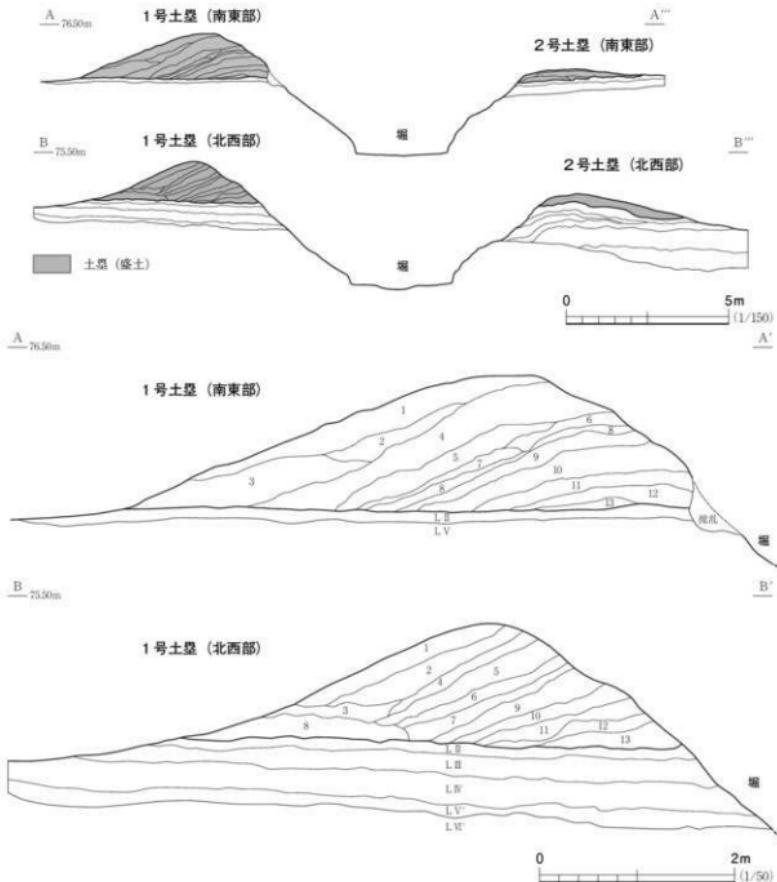


図5 1～3号土型、堀、1号溝跡

第2編 高津戸館跡



- | | |
|---|---|
| 1号土壘堆積土 (南東部)
1 浅黄色細砂 2.5Y7/4 (5~20mmの礫を3%)
2 にぶい黄色粗砂 2.5Y6/4 (10mm前後の礫を1%)
3 淡黄色粗砂 2.5Y8/4 (50mm前後の礫を50%)
4 淡黄色粘土2.5Y8/3と灰白色粘土2.5Y8/1の混合土
5 灰黄色粘土2.5Y6/2と灰白色粘土2.5Y8/2の混合土
6 灰褐色粘質シルト 10YR4/2 (しまり強)
7 にぶい黄褐色細砂 10YR6/4 (10mm前後の礫を3%)
8 黄褐色粗砂 10YR7/8 (5~20mmの礫を7%)
9 灰白色粘土 2.5Y8/2 (しまり強)
10 淡黄色粘土 2.5Y7/4 (しまり強)
11 黄褐色粘土 2.5Y5/4 (しまり強)
12 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 (しまり強)
13 黄褐色粘質シルト 10YR5/6 (しまり強) | 1号土壘堆積土 (北西部)
1 明黄褐色細砂 10YR6/8 (10~30mmの礫を3%)
2 にぶい黄褐色粗砂 10YR7/4 (10~30mm前後の礫を7%)
3 にぶい黄褐色粗砂 10YR5/3 (10~20mmの礫を40%)
4 灰褐色粘質シルト 10YR4/1 (しまり強)
5 黑褐色粘質シルト 10YR2/1 (しまり強)
6 灰褐色粗砂 10YR5/2 (10mm前後の礫を5%)
7 にぶい黄褐色粗砂 10YR5/3 (5~20mmの礫を40%)
8 にぶい黄褐色粗砂 10YR5/4 (20~50mmの礫を50%)
9 黑褐色シルト 10YR3/2 (しまり強)
10 灰褐色粘質シルト 10YR3/3 (10mm前後の灰褐色土壤を3%)
11 黑褐色シルト 10YR3/2 (10~30mmの礫を3%, 10~40mmの灰褐色土壤を5%)
12 黑色砂質シルト 10YR2/1 (しまり強)
13 灰褐色粘質シルト 10YR4/2 (30~50mmの灰褐色土壤を3%) |
|---|---|

図6 1号・2号土壘断面

なお、1号土壘から、柱穴等は確認できなかった。また、遺物も確認できなかった。

まとめ

1号土壘は、盛土の状況からいわゆる「搔揚土壘」と推測される。2号土壘よりも1号土壘の方が高いことから、南方を意識した施設の可能性がある。なお、1号土壘から遺物が確認できなかつたため、時期を直接推測することはできなかった。

2号土壘

遺構（図5・7、写真11・12）

福島県教育委員会が、令和元年度の試掘・確認調査(13T)で発見・確認した遺構である。2号土壘中央の上端の一部が搅乱を受けて破壊されている。2号土壘の西側約6mの地点に3号土壘・1号溝跡がある。2号土壘と重複する遺構はない。

2号土壘も1号土壘と同様に、南東部と中央～北西部で基底下の基本土層が異なる。特に北西部では元の地形が谷であり、L IV'とした黒褐色シルト層の厚さは約60cmを測る。2号土壘南東部の堆積土は、ℓ 1～4に分けた。いずれも築造時の盛土で、L II上面を基底とする。土質は、ℓ 1が砂質シルト、ℓ 2～4がしまりの強い粘土等である。ℓ 1～4の層厚は、最大で35cmを測る。

2号土壘北西部の堆積土は、ℓ 1の1層とした。このℓ 1は、同南東部のℓ 1と同質である。2号土壘全体が、黄褐色砂質シルトで被覆されている。なお、ℓ 1下のL II～III bについては、その堆積状況が堀側へ傾斜していることから、当初は築造盛土の可能性も考えた。しかし、L IIは調査区のほぼ全域で観察される比較的安定した層であり、L III a以下の層についても混入物等が認められないため、ℓ 1の下層は自然堆積土であると判断した。ℓ 1の層厚は、最大で30cmを測る。

2号土壘の下端幅は、約3.8～4.5mである。2号土壘の頂部と南西辺の比高は、南東部が25cm、中央部が30cm、北西部が約1.1mである。2号土壘頂部と堀底面の比高は、中央～南東部が約2.8m、北西部が約2.0mである。2号土壘頂部の標高は、南東端から中央部までは緩やかに減じ（比高約70cm）、中央部から北西端では傾斜がやや急となる（比高約23m）。

なお、2号土壘から、柱穴等は確認できなかった。また、遺物も確認できなかった。

まとめ

2号土壘は、L II上面に30cm前後の盛土が施されたものである。表層は黄褐色系土が盛られ、1号土壘と共に通している。なお、2号土壘から遺物が確認できなかつたため、時期を直接推測することはできなかつた。

堀

遺構（図5・7、写真13～15）

L II上面から掘り下げられたと考えられる堀である。1号土壘の状況から、堀の掘削土を盛り上げながら土壘を築造したと考えられる。この堀と重複する遺構はない。

第2編 高津戸館跡

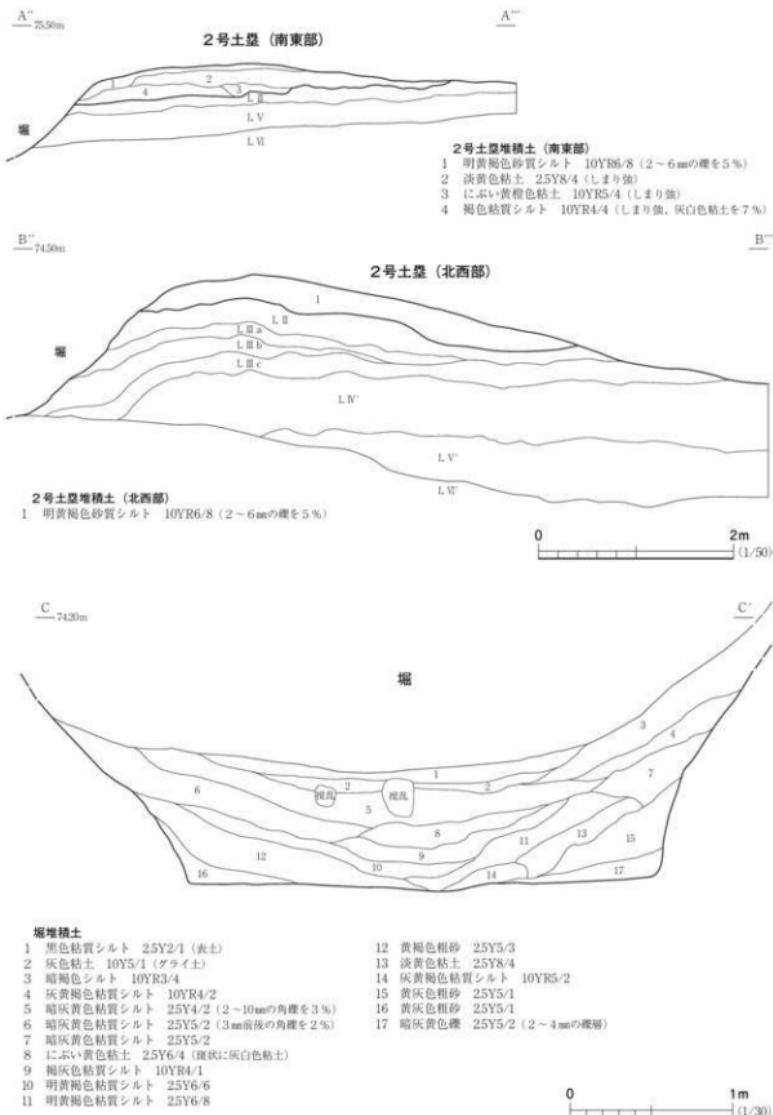


図7 2号土塁・壠断面

堀の堆積土は17層に分けた。 ℓ 1～17の堆積は凹状であり、いずれも自然堆積土と考えられる。 ℓ 1は現表土で、その上面から底面までの深さは73cmである。堆積土の土質は粘性土が主体であるが、底面壁際には砂・礫が堆積している。

壁は、底面から約60～70°の急角度で約60cmの高さまで立ち上がった後、角度が約40°とやや緩やかになって土壘に至る。1号土壘側の壁は直線的であるが、2号土壘側の壁は曲線的である。底面と壁の境界は明瞭である。底面の短軸方向は、ほぼ水平である。堀底面の標高は、南東端から北西端に向かって緩やかに減じ、両端の比高は約2mである。堀のL II上面から底面までの深さは約24～26mである。堀の幅は、上端(L II間)が7.3～8.5m、底面が2.5～3.3mである。

なお、堀から、柱穴等は確認できなかった。また、遺物も確認できなかった。

まとめ

断面の形状から、いわゆる「箱築研」の堀である。堀の掘削土は、主に1号土壘側へ盛り上げたものと考えられる。堀の時期については出土遺物がなく判然としないが、遺構の形態等から中世末期頃の可能性も考えられる。

(香川)

第4節 その他の遺構

本節では、3号土壘・1号溝跡について報告する。これらの2遺構は、福島県教育委員会が、令和元年度の試掘・確認調査(13T)で発見・確認した遺構である。両遺構は、位置関係から一連の遺構の可能性がある。2遺構の長軸線方位はN 10°Wである。

3号土壘

遺構(図8、写真16)

3号土壘の位置は、Z 8・Z 9グリッドである。3号土壘の基底はL II上面で、L IIがつくられた当時の表土である。3号土壘の東約6mの地点に2号土壘が位置するが、遺構の長軸線方位は異なる。3号土壘と重複する遺構はない。

3号土壘の遺構堆積土は、 ℓ ①・ ℓ ②に分けた。 ℓ ①は、黒褐色シルト塊を含むことから盛土と考えられる。また、 ℓ ②についても、凸状に堆積していることから盛土と考えられる。

3号土壘の規模は、長さ10.2m、下端幅約3mである。L II上面から3号土壘頂部までの高さは約25cmである。3号土壘及び周辺から、柱穴等は確認できなかった。また、遺物も確認できなかった。なお、3号土壘は、遺跡範囲を超えてさらに南東方向へ延びている可能性がある。

まとめ

3号土壘の性格については、確認することができなかった。3号土壘の時期は、L II上面を基底としていることから1号・2号土壘と大きな違いはなかったと考えられるが、関係性等については不明である。



図8 3号土壠・1号溝跡

1号溝跡

遺構(図5・8、写真16)

1号溝跡の位置は、Z8・Z9グリッドである。遺構検出面はL.V上面である。1号溝跡の北部が搅乱を受けて破壊されている。1号溝跡と重複する遺構はない。

1号溝跡の堆積土は、①～⑥に分けた。各堆積土の状況から人為的に埋め戻したような痕跡は認められなかったことから、1号溝跡は自然に埋没したと考えられる。

1号溝跡の断面形は、漏斗状を呈する。壁は、底面から直角に近い角度で約20cmの高さまで立ち上がった後、約30～45°の角度で開く。1号溝跡の幅は、上端が約1.8～2.4m、底面が15～20cmである。1号溝跡が北の搅乱部を超えないことを確認したため、1号溝跡と3号溝跡の北端が概ね一致している。なお、1号溝跡から、遺物は確認できなかった。

まとめ

1号溝跡の性格・時期については、確認することができなかった。また、1号溝跡・3号土壠の同時性についても確認できなかったが、3号土壠の盛土は1号溝跡の掘削土を利用した可能性も考えられる。

(香川)

第3章 総括

第1節 土壘と堀の歴史的性格 (図9・10)

本章では、今回の調査で確認された遺構の性格と構築年代について考察することで、本報告のまとめをしたい。

高津戸館跡の特徴 図9は、これまで報告されている高津戸館跡の縄張図に、今回の調査成果をふまえて新たに作成した図(④)を加えた図である。いずれも西側の主郭と東側の副郭を表現し、副郭に喰い違いの虎口を認める点で共通し、虎口の東側を曲輪とするかどうかで相違がある。また、丘陵上の館部とともに今回調査した裾部の土壘と堀(①-A)も認識されており、②では図に表現されていないが、文章には記載されている。

また、①では丘陵麓部の土壘(B)や井戸も描かれ、Aが坊主沢まで延びている可能性も指摘されている。さらに県道沿いの枡形も指摘しているが、明治時代の地籍図や戦後の航空写真からは確認できず検討を要する。③では虎口の西側に折れる土壘(③-C)が表現されており、作成者は横矢とする。④では麓部の土壘を二重土壘とし、年代は不明ながら3号土壘(④-D)も表現した。

縄張図からみた高津戸館跡の特徴は、①主郭・副郭とも曲輪の削り出しが緩く、虎口以外の遺構が明確でない、②喰い違いの虎口が副郭東側に設けられ、この土壘が折れて、通路幅を確保している、③麓部の土壘と堀が東方に続いた可能性があり、館跡が南方の防御を意識していると推定さ

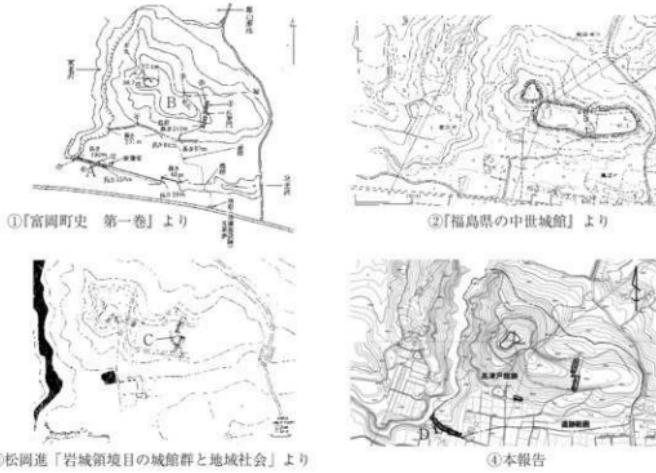


図9 高津戸館跡縄張図集成

れる、④虎口部と麓部の土塁・堀とは規模の違いがあり、年代差が想定される、等があげられる。拠点的な城館とは考えられず、松岡進氏は相馬氏による臨時の館と考えておられる。

発掘調査に先立ち実施された試掘調査では、麓部のトレンチから遺構・遺物は全く発見されなかった。削平により遺構が失われた可能性は否定できないが、この地区に屋敷地が広がっていた可能性は低い。したがって、土塁と堀がいわゆる「惣構」に伴う遺構ではなく、南方からの進入を遮断する施設の可能性が想定できる。また、東に延びるとすれば、①が指摘する登城ルートへ誘導する施設とも考えられる。

高津戸館の帰属 天正18(1590)年、豊臣秀吉の奥羽仕置により岩城氏領は安堵され、文禄4(1595)年に領内の検地が行われた。『奥州岩城崎之郡林城村検地帳』によれば岩城領総石高は114,651石8斗5升3合あり、うち橋葉郡は10,246石1斗8升3合と記載されている。現在の富岡町に該当する村名として、「上郡山・下郡山・仏浜・富岡村・たかつど村・北郷村・こはま・小良浜」があげられており、このうち富岡村とたかつど村、北郷村とこはま(村)が併記されている。奥羽仕置時における高津戸村が岩城領であるとともに、富岡村の分村扱いを受けていた可能性が高く独立性の低い地域であったことが分かる。このことは文禄年間には高津戸館が廃城しており、館が立地する高津戸村の地位も低下したことを示している。豊臣政権の城郭政策を考慮すれば、高津戸館は遅くとも奥羽仕置時には廃城したことは間違いない、それ以前に城としての機能を終えていた可能性もある。いずれにせよ奥羽仕置時に、高津戸館及び高津戸村は岩城氏の支配下にあったことが史料から確認できた。したがって、関ヶ原合戦(慶長奥羽越合戦)時に岩城領の北端に位置する高津戸館が改修される必然性がないことから、今回調査された土塁と堀がこの時に構築された可能性は否定される。遺構の構築時期はそれ以前となり、館の南方を意識している点を積極的に評価するのならば、相馬氏が橋葉郡に勢力を伸ばした時期とみるのが妥当であろう。

『貞山公治家記録』や『奥相茶話記』によれば、これに先立つ天正15(1587)年5月、岩城常隆と相馬義胤が大菅原で会談したという。大菅原は、高津戸地区の東に接する大字大菅に比定できる地区である。この会談で岩城領と相馬領の境界が確定した可能性があり、現在でも富岡町と大熊町との町境として引き継がれている。このように、奥羽仕置以前には高津戸館周辺がすでに岩城領であることから、土塁と堀が相馬氏の手によるものだとすれば、その構築はそれ以前となる。

相馬氏の橋葉郡支配 中世の富岡地域は橋葉郡に属し、岩城一族と考えられる橋葉氏の支配下にあった。一方、熊川村以北は標葉群に属し、やはり岩城一族とされる標葉氏が支配した。相馬氏・岩城氏等も含めた各氏は、応永年間頃(15世紀初頭)までは一揆関係にあり比較的対等だったとみられるが、文明6(1474)年の岩城氏による橋葉氏の滅亡、明応元(1492)年の相馬氏による標葉氏の滅亡以降は、相馬氏と岩城氏が当地域を挟んで直接対峙する状態となり、16世紀に入ると抗争も伝えられている。

しかしこの時期の様相を信頼性の高い史料からうかがうことは困難で、一般的には近世に成立した書物にもとづいて考察されている。『奥相茶話記』は、大永4(1524)年に相馬氏が橋葉郡に侵

攻し、この際富岡・木戸の二つの城（地域）が相馬氏に割譲されたとするが、現在ではこの侵攻を天文3（1534）年とする説が一般的なようである。また、岩城氏による富岡・木戸の奪還も元亀元（1570）年とされるが、『奥相茶話記』は岩城氏との境目である木戸よりも富岡落城を重点的に記述していることから、『富岡町史』ではその年代観を疑問視している。特に『町史』が指摘する、天文年間における岩城氏家臣の富岡在城が確かならば、岩城氏による奪還時期はより早い時期となる。土星と堀が相馬氏の構築だとすれば、その年代は最短で10年強、国境が流動的だった可能性がある天正15年までとしても約60年間の時間幅の中に収まるものと考えられる。いずれにせよ、その年代は戦国時代後半と考えられる。

江戸時代の新田開発 本館跡が所在する上手岡地区周辺は、江戸時代に新田開発が盛んに行われた地域として知られている。岩城に入部した鳥居氏は慶長13（1608）年に検地を行った。その成果は『元和8（1622）年岩城御領分定納之御帳』に反映されていると考えられる。同書中には富岡町の村名として、「下郡山村、上郡山村、小良ヶ浜村、仏浜村、けかや村、手岡之村、富岡本町村、富岡小浜村」があり、文禄の検地帳と比較すると「たかつど村」がなく代わりに「手岡之村」になっていること、文禄年間と同様に富岡本町村の分村として扱われていることが判明する。

鳥居氏に次いで平藩主となった内藤氏は、大規模な新田開発を行った。特に2代藩主内藤忠興以降に検地や大規模な新田開発が行われ、寛永4（1627）年に新田町村が成立したのを皮切りに、元禄2（1689）年に滝川筋の開発、元禄4（1691）年に千里村が成立、宝永2（1705）年には手岡村が分離して上手岡村・下手岡村が成立する。また、内藤家文書『伊呂波寄頸書』中の「新田開発覚」には「新田町村・赤木新田・茂手木新田・千里新田」の村名が確認できる。このうち千里村（新田）・茂手木新田・滝川筋が現在の大字上手岡に属する地区で、新田町村は現在の大字夜の森、赤木新田が大字本間に所在し、いずれも町の北部に所在する地域である。千里村は今回の調査区である高津戸地区・後田地区の南に隣接し日南郷遺跡の範囲も一部含む地区、滝川村は富岡川上流に位置する地区、茂手木新田は高津戸・後田地区の西方に位置する。このように手岡村では、江戸時代前期から中期にかけて活発な開発が行われた。手岡村の分村は、こうした新田開発に伴う人口増加に対応したものと推定される。

図10は、明治22（1889）年の地籍図『檜葉郡上手岡村字高津戸』をトレースしたもので、北を上にしている。図は隣接する字や村が現在のそれと異なっているが、原図のまま作成した。現在の県道に対応する街道と水路が村の南部を走り、水路は南側にもう1本描かれる。村の北部は山と林が大部分を占め、概ね道に面して宅地が並ぶが、街道の北には水路は確認できない。一方、調査区周辺は宅地及び耕地に利用されるが、土塁や堀とみられる表現は明確ではない。また、耕地の地目に注目したところ、街道の南側ではほぼすべてが田であるのに対し、街道の北側では大部分が畠で田は沢の範囲に確認できるのみであった。街道の北側は地形が複雑なため水路を通さず、畠に利用されたものと推定される。上記の新田開発時には、畠地も広範囲に造成されていることから、街道の北側も同じ時期に開墾された可能性がある。この時、土塁と堀が壊され、開発行為の及ぼなかつた遺

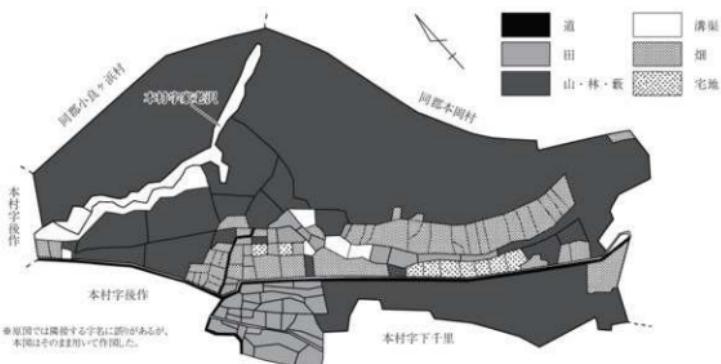


図10 磐城国稻葉郡上手岡村十一番字高津戸地籍図

構の西端部のみが残存したと推定される。

戊辰戦争 土壘と堀を戊辰戦争時の遺構とみる意見もある。『築城典刑』(大鳥訳1864)や『斯氏築城典刑』(吉澤訳1865・1866)などの幕末の築城書には、中世城郭にも見劣らない土壘や堀の構築法が掲載されており、会津藩が構築したと考えられる郡山市馬入峠の防壁や、平田村中根館跡で戊辰戦争時に仙台藩が構築したと考えられる「土壘」と「平場状遺構」が検出されるなど、少ないながら類例もある。また、慶応4(1868)年8月28日には手岡村および夜ノ森村で衝突があったことが東軍・西軍双方の記録に確認できるなど、土壘と堀が構築される素地はあった。しかし当地域での衝突は、平城落城後の状況の急激な変化により発生したものであり、その前段階に当地方で大規模な戦力が駐屯していた形跡はうかがえない。また馬入峠や中根館跡の例こそあるものの、これまで該期の遺構として検出されているのは塹壕といわゆる「タコ壺状遺構」が大多数を占めており、高津戸館跡の遺構とは明らかに異なる。以上の所見から、戊辰戦争時の構築の可能性は低いと考えた。

以上、本稿では土壘と堀の性格として、街道から館跡への進入を遮断するとともに、東方に想定される虎口へ誘導する施設と推測した。そして、その構築時期を相馬氏が猪苗代郡に進出したとされる戦国時代後半に求め、これが近世の新田開発により破壊されたと推定した。したがって、現在確認できる遺構の東方に堀が連続している可能性が高いことから、今後当地区の開発にあたっては考古学的調査がのぞまれる。

(佐藤)

参考文献

- 棚倉町教育委員会 2001 「赤塙跡」
- 富岡町 1988 「富岡町史 第一巻」
- 中津朝綱 1667 「奥相茶話記」(歴史図書社 1972 「岩磐史料叢書(下)」)収録
- 福島県教育委員会 1988 「高津戸館跡」「福島県の中世城館」
- 松岡 進 2002 「岩城領境目の城館群と地域社会」「中世城郭研究」第16号

付編 自然科学分析

付編 1 日南郷遺跡出土炭化物分析

(株)吉田生物研究所

1. 試 料

試料は福島県日南郷遺跡から出土した炭化材 10 点である。

2. 觀察方法

剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結 果

樹種同定結果(針葉樹 2 種、広葉樹 2 種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) シギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don) (遺物 No. 5 ~ 7) (写真 5 ~ 7)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で 1 分野に 1 ~ 3 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

2) ヒノキ科ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.) (遺物 No. 1, 2, 8 ~ 10) (写真 1, 2, 8 ~ 10)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で 1 分野に 1 ~ 2 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州(福島以南)、四国、九州に分布する。

3) ヤナギ科ヤナギ属 (*Salix* sp.) (遺物 No. 3) (写真 3)

散孔材である。木口では中庸ないしやや小さい道管 (~110 μm) が単独または 2 ~ 4 個放射方向ないし斜線方向に複合して分布する。軸方向柔組織は年輪界で顕著。柾目では道管は單穿孔と交互壁孔を有する。放射組織は直立と平伏細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はやや大きく、筒状になっている。板目では放射組織はすべて単列、高さ ~ 450 μm であった。ヤナギ属はバッコヤナギ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

表 1 出土炭化物同定表

No.	試料番号(遺構)	樹種
1	HNG-1 (S103)	ヒノキ科ヒノキ属
2	HNG-2 (S103)	ヒノキ科ヒノキ属
3	HNG-3 (S103)	ヤナギ科ヤナギ属
4	HNG-4 (S103)	ブナ科ブナ属
5	HNG-5 (S103)	スギ科スギ属スギ
6	HNG-6 (S103)	スギ科スギ属スギ
7	HNG-7 (S103)	スギ科スギ属スギ
8	HNG-8 (S103)	ヒノキ科ヒノキ属
9	HNG-9 (S105)	ヒノキ科ヒノキ属
10	HNG-10 (S105)	ヒノキ科ヒノキ属

4) ブナ科ブナ属(*Fagus* sp.) (遺物No.4) (写真4)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～110 μm)がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2～3列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は單穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物(チロース)が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2～3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1～3 mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道(南部)、本州、四国、九州に分布する。

参考文献

- 林 昭三 「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所(1991)
 伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～V」京都大学木質科学研究所(1999)
 烏地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版(1988)
 北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社(1979)
 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)
 奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

◆使用顕微鏡◆ Nikon DS-Fi1

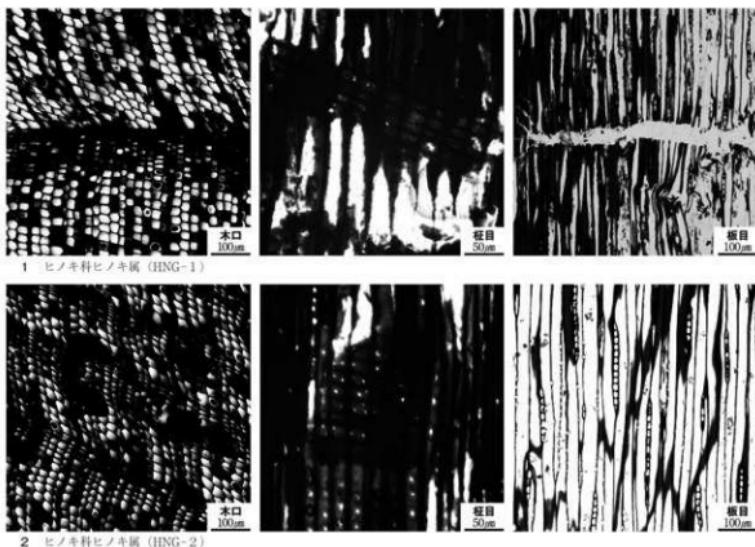
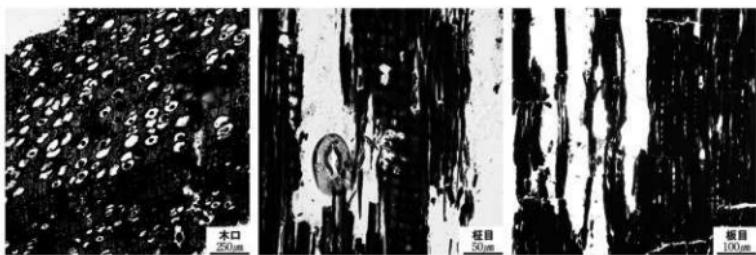


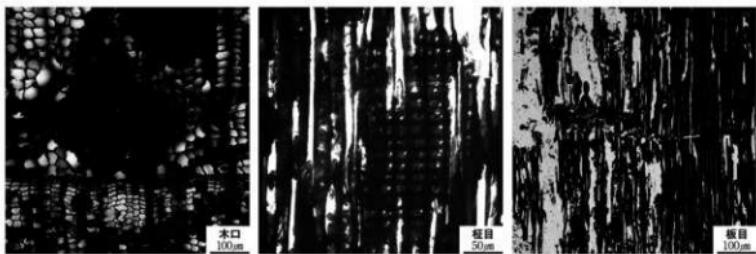
図1 顕微鏡写真 (1)



3 ヤナギ科ヤナギ属 (HNG-3)



4 ブナ科ブナ属 (HNG-4)



5 スギ科スギ属 (HNG-5)



6 スギ科スギ属 (HNG-6)

図2 顕微鏡写真 (2)

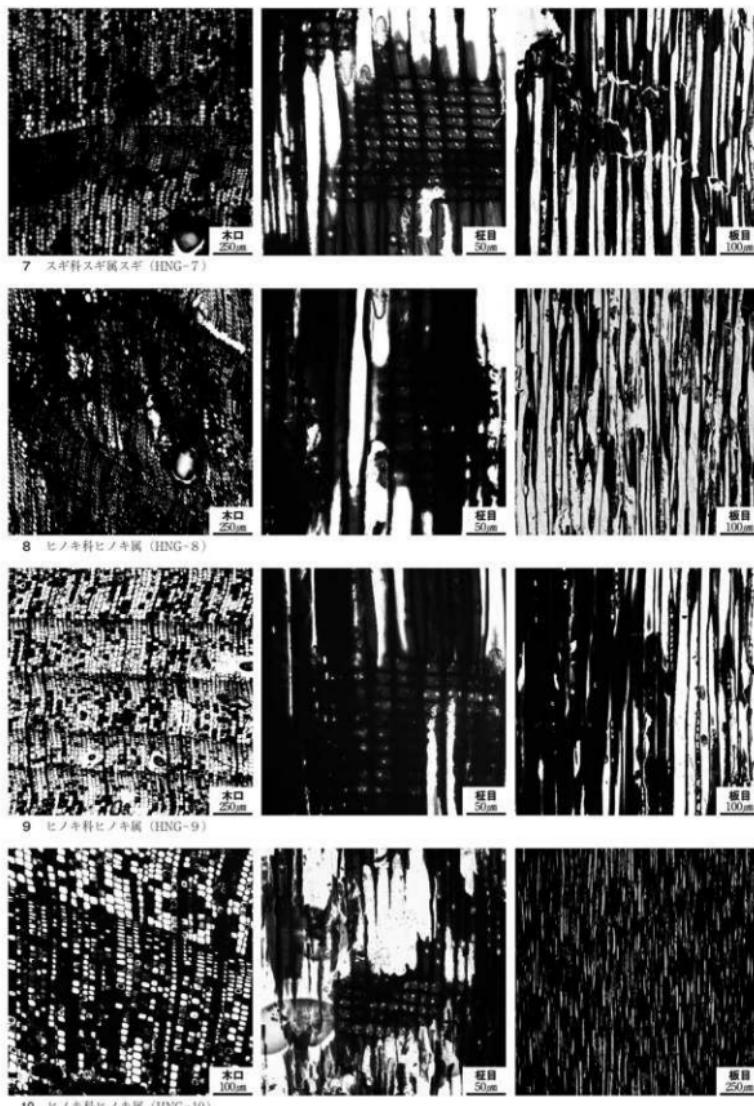


図3顕微鏡写真(3)

付編2 日南郷遺跡出土土師器・石製品蛍光X線分析

福島県文化財センター白河館 勝川若奈

1. はじめに

日南郷遺跡より出土した土師器2点及び石製品5点について蛍光X線分析を実施した。

土師器2点(第1編:図18-1・2)には赤色顔料が付着していた。付着している赤色顔料の種類を明らかにするため定性分析を行った。

また、石製品5点(第1編:図8-7・5、図12-1、図16-8、図22-4)には褐色に変色している部分がある。遺跡から赤色顔料が付着した土器が出土しており、褐色部分が顔料による変色である場合は顔料製作に用いられた磨石の可能性がある。そのため、褐色変色部分について定性分析を行った。

2. 試 料

分析試料の番号は以下のとおりである。

なお、文化財の科学分析は原則として非破壊で行う必要があるため、分析用試料の採取は行わず、土師器及び石製品そのものを分析した。

表2 分析試料一覧

試料番号	遺構	出土層位	図番号(第1編)	備考	遺物
HNG 1 - 1	4号住居跡	ℓ 4 層下	図18-1	赤色顔料	土師器(杯)
- 2				胎土	
HNG 2 - 1	4号住居跡	床面	図18-2	赤色顔料	土師器(杯)
- 2				胎土	
HNG 3 - 1	1号住居跡	床面	図8-7	褐色変色部分	石製品(磨石)
- 2				オリジナル部分	
HNG 4 - 1	1号住居跡	床面	図8-5	褐色変色部分	
- 2				オリジナル部分	
HNG 5 - 1	2号住居跡	ℓ 9	図12-1	褐色変色部分	
- 2				オリジナル部分	
HNG 6 - 1	3号住居跡	ℓ 4	図16-8	褐色変色部分	
- 2				オリジナル部分	
HNG 7 - 1	5号住居跡	床面	図22-4	褐色変色部分	
- 2				オリジナル部分	

3. 分析方法

各分析試料について蛍光X線分析を行った。蛍光X線分析とは、試料にX線を照射した際、含有

する各元素から発生する二次X線(特性X線)を検出器で捉え、X線のエネルギーと強度を表すものである。この方法は比較的容易に文化財の材質調査が行えるため、広く利用されている。

今回は福島県文化財センター白河館のエネルギー分散型X線分析装置(Bruker社製M4 TORNADE PLUS)を使用した。分析条件は、管電圧50kV、管電流300μA、X線管球ロジウム(Rh)である。分析径は20μmであり、測定雰囲気は大気状態で行った。

4. 結 果

4-1. 土師器

土師器は2点ともに鉄(Fe)が検出された(図4-1~4)。Feの検出は土器胎土より赤色顔料付着箇所において優位である。また、いずれの分析箇所からも水銀(Hg)が検出されていないことから、付着している赤色顔料は鉄由来のベンガラ(Fe₂O₃)である可能性が高い。

4-2. 石製品

いずれの試料からも鉄(Fe)が検出された(図4-5~10、図5-1~4)。褐色に変色している部分と石材のオリジナルな色調を呈している部分では、褐色に変色している部分のFe検出が優位である。

HNG4(図4-7・8)及びHNG5(図4-9・10)については褐色変色部分のFe検出が優位ではあるものの、その割合は微量である。当該試料について実体顕微鏡による褐色変色部分の観察を行ったが、石材表面への付着物は確認できなかった。

5. ま と め

蛍光X線分析の結果により、土師器に塗布された赤色顔料はベンガラ(Fe₂O₃)の可能性が高い。石製品の褐色変色部分については顔料によるものなのか、その他に由来するもののか不明である。今後、X線回折分析による結晶構造の解析など更なる科学分析が望まれる。

参考文献

- 奥山誠義 2003 「上平A遺跡出土石器の蛍光X線分析」「上平A遺跡」常磐自動車道遺跡調査報告37
小林 啓 2008 「赤色顔料の蛍光X線分析」「原B遺跡」常磐自動車道遺跡調査報告46

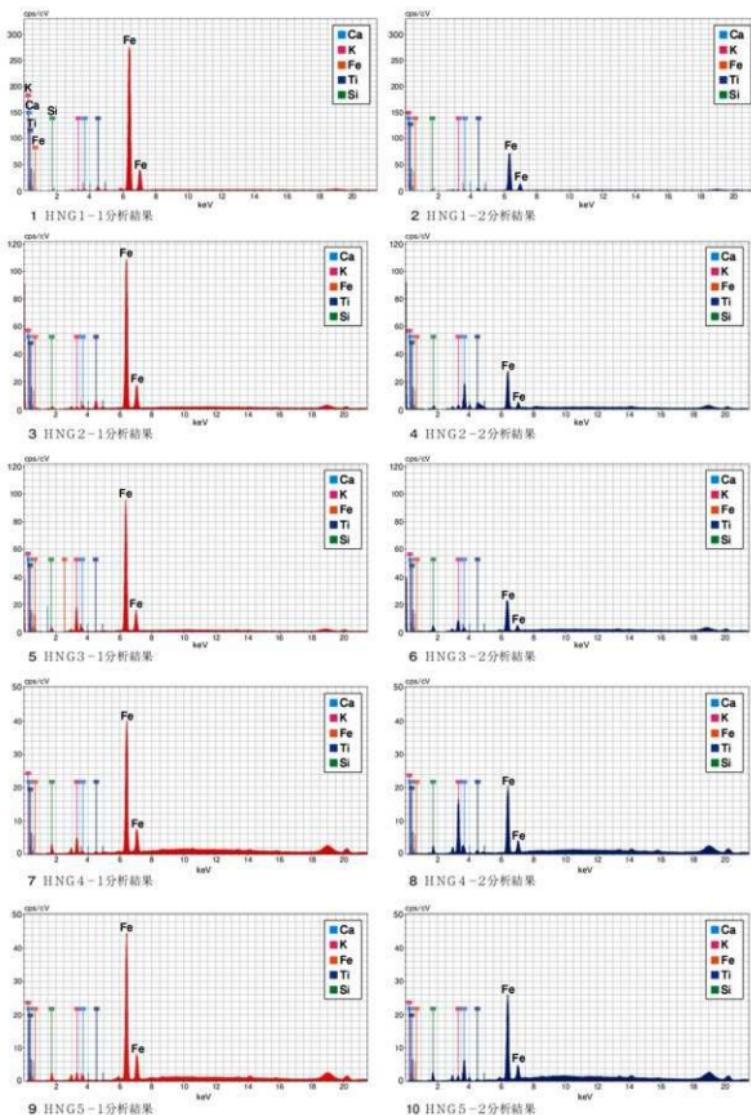


図4 蛍光X線分析チャート（1）

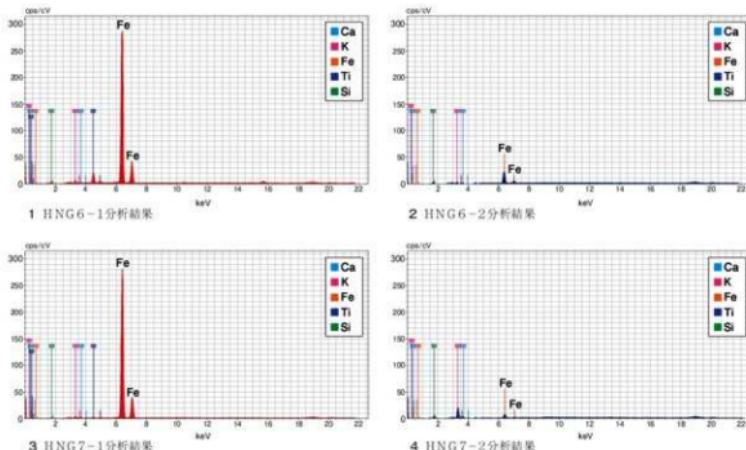


図5 蛍光X線分析チャート(2)



図6 石製品変色部写真

写 真 図 版

第1編 日 南 郷 遺 跡 (2次調査)



1 日南郷遺跡と周辺の地形（東から）



2 I期調査区1～5号住居跡（南から）

第1編 日南郷遺跡（2次調査）



3 基本土層 - J 15 G 北壁（南から）



4 1号住居跡検出作業（南西から）



5 1号住居跡全景（西から）



6 1号住居跡南北断面（西から）



7 1号住居跡カマド燃焼部（南から）



8 1号住居跡P 4断面（南から）



9 2号住居跡全景（南から）



10 2号住居跡東西断面（南から）



11 2号住居跡カマド土器出土状況（南から）



12 2号住居跡カマド燃焼部（南から）



13 3号住居跡全景（南から）



14 3号住居跡細部

a 炭化物出土状況西辺（南から）
b カマド全景（南から）

c 遺物出土状況（北東から）
d P 2 照面（南から）



15 4号住居跡全景（南東から）



16 4号住居跡断面（南東から）



17 5号住居跡全景（南から）



18 5号住居跡南北断面（東から）



19 5号住居跡炭化物出土状況（南から）



20 5号住居跡P5断面（南から）

第1編 日南郷遺跡(2次調査)



21 1号溝跡全景 [Ⅱ期調査区] (東から)



22 2号溝跡全景 (南東から)



23 1号溝跡断面 (東から)



24 2号溝跡断面 (南から)



25 1号土坑全景 (南から)



26 1号土坑断面 (南から)



27 1号住居跡出土遺物（1）

第1編 日南郷遺跡(2次調査)

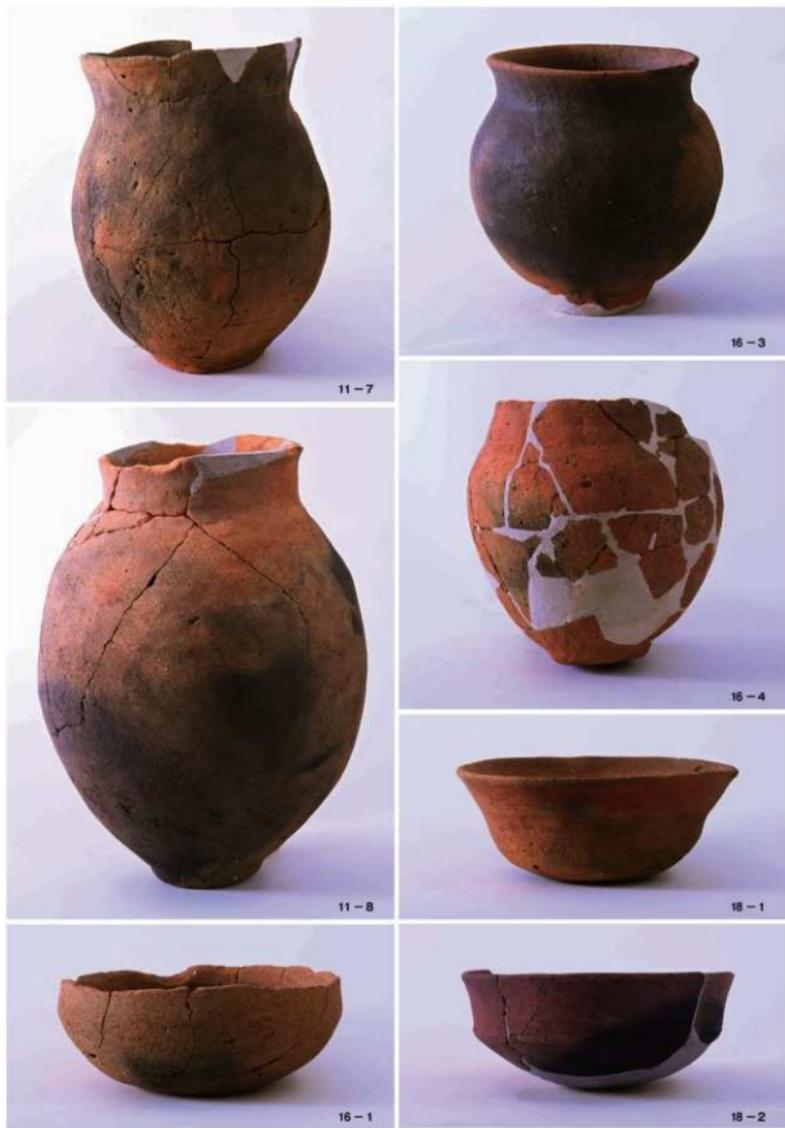


28 1号住居跡出土遺物 (2)

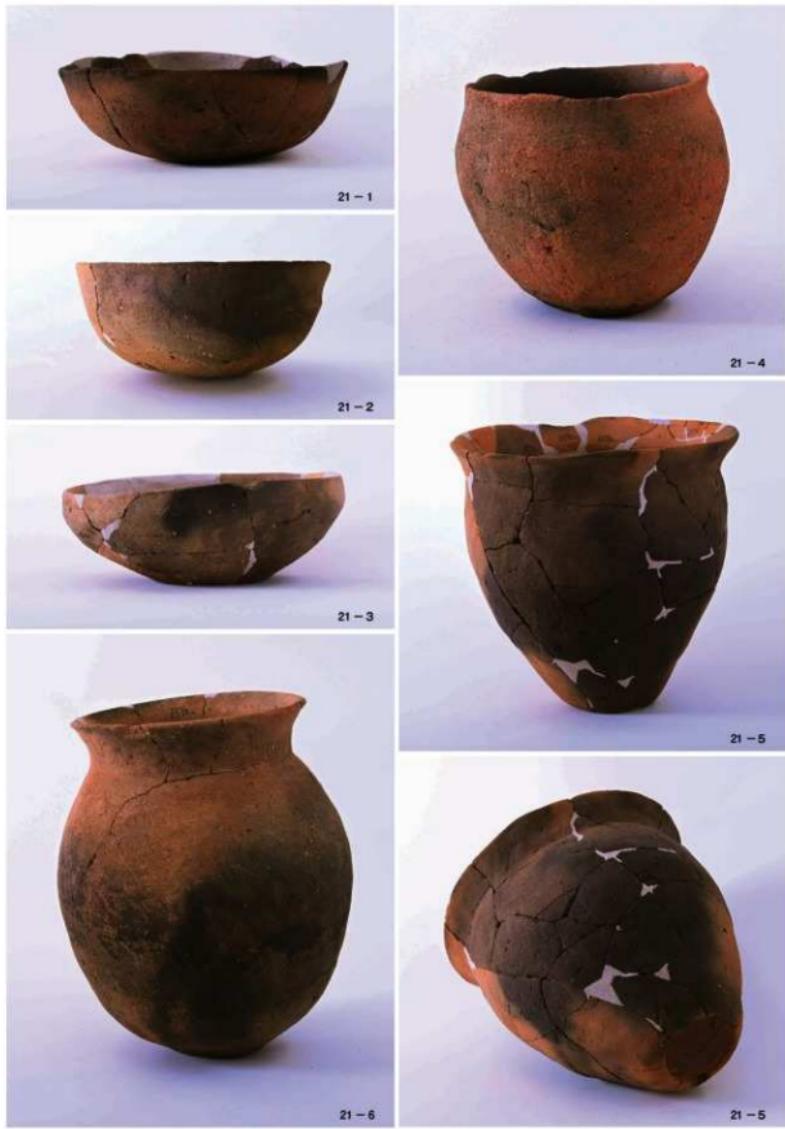


29 2号住居跡出土遺物

第1編 日南郷遺跡(2次調査)



30 2~4号住居跡出土遺物



31 5号住居跡出土遺物



32 5号住居跡出土土師器壺



33 3号・5号住居跡出土石製品



34 弥生土器

写 真 図 版

第2編 高 津 戸 館 跡



1 高津戸館跡と周辺の地形（南西から）



2 調査区全景（南東から）



3 調査区全景（南西から）



4 調査区西半部（北東から）



5 調査区中央部遺構検出作業（南西から）



6 基本土層

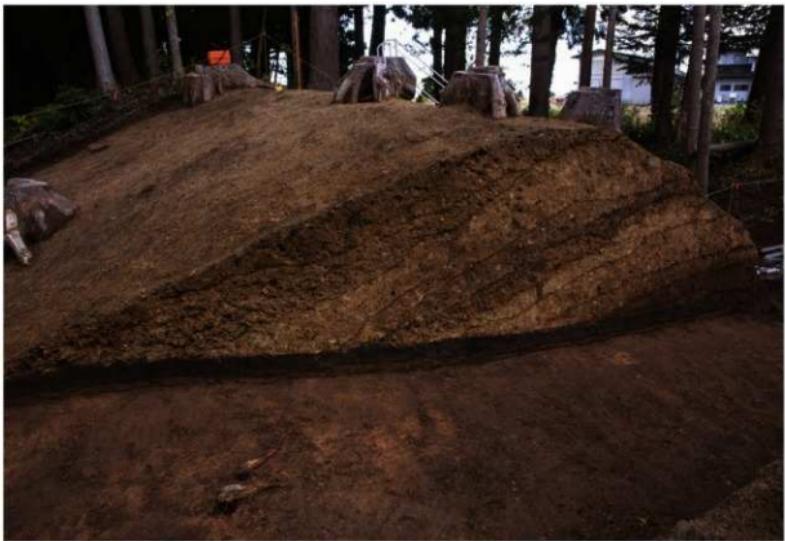
a b 5G 北壁断面（東から） b a 5G 北壁断面（南東から）



7 1号土壙南東部（北から）



8 1号土壙全景（北西から）



9 1号土壙南東部断面（北から）



10 1号土壙北西部断面（南東から）



11 2号土塁全景（北から）



12 2号土塁南東部断面（北から）



13 堀全景（南東から）



14 堀南東部（北西から）



15 堀断面（北西から）



16 3号土塀・1号溝跡全景（北から）

報告書抄録

※緯度数値は世界測地系(平成14年4月1日から適用)による。

福島県文化財調査報告書第 557 集

県道小野富岡線関連遺跡発掘調査報告 1

日 南郷 遺跡 (2次調査)

高津戸館跡

令和 5 年 3 月 10 日発行

編 集	公益財団法人福島県文化振興財団	遺跡調査部	(〒960-8115) 福島市山下町 1-25
発 行	福島県教育委員会		(〒960-8688) 福島市杉妻町 2-16
	公益財団法人福島県文化振興財団		(〒960-8116) 福島市春日町 5-54
	福 島 県 土 木 部		(〒960-8670) 福島市杉妻町 2-16
印 刷	三洋印刷株式会社		(〒965-0053) 会津若松市町北町大字上荒久田字跡木 163
